慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	『韻府群玉』版本考(五)
Sub Title	Comparative Study of the Printed Edition of the Yùn Fǔ Qún Yù (5)
Author	住吉, 朋彦(Sumiyoshi, Tomohiko)
Publisher	慶應義塾大学附属研究所斯道文庫
Publication year	2004
Jtitle	斯道文庫論集 (Bulletin of the Shidô Bunko Institute). No.39 (2004.) ,p.243- 330
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00106199-20040000-0243

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

『韻府群玉』版本考（五）

住吉朋彦

本論集掲載の「『韻府群玉』版本考（一）—（四）」（第三十五—八輯）に引続き『韻府群玉』諸版の解説を試みる。既に本書原本と新増説文本及びその亜種に当たる本文五属に解題を加えたが、本稿では、先ず上記諸本に属する版本で未紹介のものを取上げ、次で増続会通本の属以下に進み、版本の解題を終えたい。末尾に、本稿を含む一—五稿の全体に亘る総説を附し、これに従って左記の四章を設ける。[1]

一　原本・新増説文本等　　補遺
二　続編・増続会通本・同増編本　　解題
三　増刪本・摘要本　　解題
四　総説

本年度、台北市所在四機関に収蔵する伝本を調査することができた。補遺の章は、その結果を中心とする。このうち新増直音説文本に属する〔明初〕刊本のみは新たに著録した版種で、その他は、前稿までに著録した版種の伝本の増補である。後者については版本の詳細を再録せず、種目の下に前輯までの頁数を標示して互見を請うこととしたい。なお台北市所在の善本については、ほとんど既に阿部隆一氏『増訂中国訪書志』（昭和五十八年、汲古書院）諸編中に著録がある。

第二章に取上げる増続会通本とは、本書の新増説文本と、本書の続編『類聚古今韻府続編』を合輯した本文である。この『韻府続編』は、元来『韻府群玉』そのものと重なるものでは

ないが、本稿では先ず『韻府続編』諸版に解題を加え、それを踏まえて増続会通本に進む、という手順を採りたい。また第三章に取上げる増刪本・摘要本は、共に清代に行われた本書の約編本で、本書流行の末節に位する本文であるが、諸方に普通書として蘊蔵され、書目に徴することの難しい場合が多く、伝本の渉猟を尽くすことができていない。知見の版本を解説し、暫時措くことを諒とされたい。

一　原本・新増説文本等　補遺

○原本之属

韻府羣玉二〇巻　〔35輯346・36輯404・37輯199・38輯239頁〕

元陰時遇（時夫）編　陰幼達（中夫）注

元至正二十八年（一三六八）刊（東山秀岩書堂）

覆元元統二年刊本

〈台北・故宮博物院〉　一〇冊

清楊守敬旧蔵

新補藍色表紙（二三・八×一五・四糎）淡青包角、一部虫損修補。扉に楊氏影像。序、凡例、事目、目録を存するが、目録の第三・四張は鈔補に係り、目録末の木記をも鈔補す。毎冊二巻。第一巻第二十三・二十四張を欠き罫紙に近世期鈔補。匡郭二〇・九×一二・六糎、摺りは中程度に当たる。

平声のみ室町期の朱筆にて合竪句批点批圏、序のみ同墨筆にて返点連符音訓送仮名および同朱墨貼紙補注書入、朱点朱引精密。また全編に夥しく近世期の墨筆にて行間音注補注、同夾紙補注を加う（去声以下疎）。浅葱色不審紙。毎冊尾題下に又別筆にて「桂芳」墨識あり。首に単辺方形陽刻「寶秀／園圖／書記」、同「正／莅」朱印影（以上使用者不詳）、無辺方形陰刻「宜都／楊氏藏／書記」、同「飛青／閣臧／書印」、単辺方形陽刻「星吾海／外訪得／秘笈」、無辺方形陰刻「楊印／守敬」朱印影（以上楊守敬所用）を存す。

楊氏『日本訪書志』巻四、小学の部に「韻府羣玉二十篇〈元槧本〉」以下に掲出の題識は「次目録、缺二葉鈔補」等とあることから該本について記したものと思われるが、今題識を佚す。

〈台北・故宮博物院〉　一〇冊

巻十九・二十配〔日本南北朝〕刊本

浅野楳堂旧蔵　清楊守敬題識

新補藍色表紙（二三・九×一五・三糎）香色包角。扉に楊氏影像。毎冊前副葉、楊氏筆にて韻目を列記す。序、事目、目録、凡例の順に綴し、目録の第三・四張を欠く。毎冊二巻。第十一巻第一―三、十七・十八張、第十二巻第三十九―四十三張を欠き室町末近世初の筆にて鈔補。匡郭二〇・八×一二・六糎、摺りは前本と同程度。

序のみ室町期の朱筆にて竪句点を加う。毎巻首右辺外「桂谷寺常住」墨識あり。毎巻首題下別筆「屹布衲」墨識および宝文様陰刻「永屹」朱印影を存す（閩山永屹か）。凡例末に単辺方形陽刻「形函／翠蘊」、第九冊尾に同「漱芳閣／鑑臧印」、毎巻首題下に同「淺野源氏／五萬卷樓／圖書之記」朱印影（以上浅野楳堂所用）を存す。首冊副葉に楊守敬の筆にて「此書与流俗甚有出入与／四庫著録本亦不相應余別有跋／詳若之（隔三格）守敬記（書行）」題識あり、首および目首に単辺方形陽刻「星吾海／外訪得／秘笈」、首に無辺方形陰刻「楊印／守敬」、目首に同「宜都／楊氏藏／書記」朱印影（以上楊守敬所用）を存す。

題識中「別有跋」とは、前本に附された『日本訪書志』収録の題識を指すかと思われる。前本参照。

又〔明〕増修（〔清江書堂〕）　〔35輯356頁・37輯203頁〕

〈台北・国家図書館　三〇九・〇七九三六〉

巻三・四、九―二十配明天順六年刊新増説文本

巻五―八配元至正十六年刊新増説文本

存巻一・二（二〇冊のうち二冊）。序を欠き、凡例、事目、目録の順に綴して（目録末木記を摺らず）本文に入る。毎冊一巻。第五巻第一張も本版に係る。匡郭二一・二×一二・五糎（補刻）。首に単辺方形陽刻「海豐吳氏家／藏書画之章」、事目首に同「津門王鳳／岡風篁／館所藏印」、目録首に同「賜研齊」朱印影を存す。その他、全冊に亘る事項は天順刊本の項に後掲。

三種混配。巻一・二は元来原本に属する至正二十八年版の修刻本であるが、既に著録した静嘉堂文庫蔵本、名古屋大学附属図書館蔵本に同じく、巻一のみ新増説文本として増修したものである。巻首の題目と本文は新増説文本のそれであるが（行款は元のままで一〇行）、首目と巻二は原刻で原本に当たる。

同　〔36輯413頁・37輯204頁〕

〔明前期〕刊　覆元至正二十八年刊本

〈台北・国家図書館　三〇九・〇七九三八〉　四二冊

巻三・十六配同版本　清怡僖親王弘曉旧蔵

後補香色表紙（二五・七×一六・一糎）右肩綫外打付に冊序数を書す。襯紙改装。前後副葉。序、事目、目録を存し凡例を欠く。第三、五巻に三冊を配する他、毎巻二冊。本来正統二年の原木記のある第一巻尾の半張を刪去す。標記の他、第十三巻首、第二十巻尾にも別本を配す。匡郭二〇・三×一二・六糎。

間々墨句批圏、稀に竪句点書入。首および事目首に単辺方形陽刻「明善堂／珍藏書／畫印記」、首に無辺方形陰刻「明善堂／覧書／画印記」、巻首に単辺方形陽刻「安樂堂／藏書記」朱印影（怡僖親王弘曉所用）、首に無辺方形陰刻「三槐／世家」朱印影、第十三巻首に同「白雲堆／裡人家」朱印影を存す。

〈中央研究院歴史語言研究所傅斯年図書館　043.441〉　一〇冊

白紙印本

当館新補香色表紙（二八・一×一六・三糎）次で後補淡青裂表紙、左肩青絹地双辺摺題簽「韻府羣玉〈丙／下平聲〉」等貼附（首冊以下剥落多し）、右肩より同工目録簽を貼布し双辺中に声韻目を書す。本文白紙印、裏打改装。前後副葉。序、凡例、事目、目録の順に綴し本文。毎冊二巻。第一巻第二十八張欠。匡郭二〇・二×一二・六糎、後印本。

〈台北・国家図書館　三〇九・〇七九三八〉

巻一・二、四―十二、十四―二十配同版本

存巻三・十六（各前半、四二冊のうち二冊）。汚損。朱批圏書入。毎巻首に単辺方形陽刻不明朱印影、重鈐して同「欽／遠」朱印影を存す。詳細前掲。

同　〔35輯358頁・36輯406頁・38輯240頁〕

〔日本南北朝〕刊　覆元元統二年刊本

〈近畿大学中央図書館〉　一〇冊

後補古丹表紙（二四・八×一六・二糎）右肩より打付に室町期の筆にて韻目を列す。左肩厚手斐紙題簽を貼布し別筆にて「韻府羣玉〈声目／上（下）〉」と書す。本文の一部に原紙匡郭外を

刪去し表紙大に裏打する紙葉がある。首冊のみ前副葉。序、凡例、事目、目録を存し本文に入る。毎冊二巻。匡郭二〇・八×一二・四糎、本版現存本中最も早印の部類。

間々室町期の朱を以て標批圏、竪句批点、稀に返点連符送仮名、同朱墨欄上補注校注、近世初の朱墨を以て欄上字目標注合点、又後墨にて増続韻府との校注書入。第七冊尾に旗幟形陽刻不明朱印影、毎冊首に双辺方形陽刻「高木文庫（楷書）」朱印影（高木利太所用）、首冊前副葉、或いは毎冊前後見返しに単辺方形陽刻「アカキ」「横山家蔵（楷書）」朱印影（横山重所用）を存す。

該本は、中田祝夫氏編『玉塵抄（10）〔抄物大系別刊〕』（昭和四十七年、勉誠社）に巻首の書影を掲載する。

〈台北・故宮博物院〉

巻一―十八配元至正二十八年刊本

浅野楳堂　清楊守敬旧蔵

存巻十九・二十（一〇冊のうち一冊）。上辺補紙、原紙高二二・四糎。縹色不審紙貼附。末尾に無辺方形陰刻「義／之」、単辺方形陽刻「大／路」朱印影、毎巻首題下に同「淺野源氏／五萬卷樓／圖書之記」朱印影（浅野楳堂所用）を存す。詳細前掲。

同　〔35輯363頁・36輯407頁・37輯205頁〕

朝鮮明正統二年（一四三七）跋刊（江陵・原州）

覆元元統二年刊本

〈近畿大学中央図書館〉　分二〇冊

有跋本

丁子染艶出表紙（二三・九×一四・二糎）毎奇数冊左肩打付に朝鮮筆にて「韻府羣玉」と、右肩より声韻目を書す。毎冊後、後補黄檗染卍繋蓮華唐草文空押艶出表紙、無文。四針眼、改糸。書背中段に「廿本」と、毎冊の小口に韻目を書す。天地截断、虫破損修補。本文料紙、間々添料を加え竹紙の如き褐色を呈す。見返し新補、第八冊前見返し紙背に「一伊賀米拾八俵也／（低八格）内大豆壱俵也」墨書を認む。序、凡例、事目、目録を存し本文。毎冊一巻。匡郭二〇・二×一二・五糎、早印本。末尾に南秀文跋一張を附綴す。

朝鮮時代の朱筆を以て韻目標圏、字目聯珠標圏、批点、熟字鉤点書入、毎韻首行欄上に別手墨韻目標注を存するも、殆ど刪去せらる。毎奇数冊首に単辺方形陽刻「陰城／朴氏」朱印影、毎偶数冊尾に同「崇／善」「超」朱印影、毎冊首に同「觀主廬」

朱印影、双辺方形陽刻「澁谷藏書記」朱印影を存す。

表紙と鈐印の情況を勘案すると、朝鮮朝伝来の旧時には十冊であったものを、後に二十冊に改装し、旧後表紙を偶数冊前方に用いて、現在の後表紙を補ったと思われる。南跋を附印する伝本は同版中にも稀である。該本の書影は昭和五十一年の古典籍下見展観入札会目録に掲載されている。

○新増説文本之属

新増説文韻府羣玉二〇巻　〔37輯219頁・38輯245頁〕

元陰時夫編　陰中夫注　元欠名増

元至正十六年（一三五六）刊（劉氏日新堂）

〈台北・故宮博物院〉　一〇冊

清楊守敬旧蔵

後補渋引表紙（二二三・一×一四・九糎）左肩打付に「羣玉韵府〈幾〉」と書し、右肩より韻目を書す。左下方打付に別筆にて声目冊数を書し、右下方打付に又別筆にて「絶十」と書す。改糸、天地截断。扉に楊守敬影像。序、目録、凡例、総目の順に綴し本文。毎冊二巻。匡郭二一・一×一三・二糎。

欄上に室町末の墨筆にて字目標注（半截）、近世初の朱筆にて本文標竪句点、傍線、標批圏（第二冊以降疎）、欄上字目標注（現紙内）書入、又後墨筆にて胡粉校改、磨滅部鈔補。毎冊首尾に無辺方形陰刻「止」朱印影、首および毎冊首に無辺方形陰刻「飛青／閣藏／書印」、序末に同「宜都／楊氏藏／書記」、単辺方形陽刻「星吾海／外訪得／秘笈」朱印影（以上楊守敬所用）を存す。

なお該本については第三稿（本論集第三十七輯第二二五頁）にマイクロフィルム書影を以て著録したが、書入鈐印等に改正を要するため再度記した。

〈台北・国家図書館　三〇九・〇七九三六〉

巻一・二配元至正二十八年刊〔明〕増修本

巻三・四、九―二十配明天順六年刊新増説文本

存巻五―八（二〇冊のうち四冊）。毎冊一巻。第五巻第一・二張を欠き、第一張には元至正二十八年刊本を以て配し、第二張には鈔補を加う。

第五巻首に単辺方形陽刻「仲／遠」、無辺方形陰刻「王穆／之

印」、単辺方形陽刻「王氏」、無辺円形陰刻「水／竹居」、同方形「黄生／之印」朱印影を存す。全冊に亘る事項は天順刊本の項に後掲。

同　〔37輯230頁〕

明天順六年（一四六二）刊（葉氏南山書堂）

覆元至正十六年刊本

〈台北・国家図書館　三〇九・〇七九三六〉　二〇冊

巻一・二配元至正二十八年刊〔明〕増修本

巻五―八配元至正十六年刊本　明錢穀旧蔵

新補藍色表紙（二六・七×一六・七糎）金鑲玉装、素絹包角。首目にも元至正二十八年刊本を配し、第三・四、九―二十巻の一四冊が本版に当たる。毎冊一巻。

朱筆校改あり。第一、十三巻首に無辺方形陰刻「言／宮」、毎冊首に単辺方形陽刻「莅盟／昕藏」、第四巻尾に無辺方形陰刻「原／昇」、第四・十六巻尾に単辺方形陽刻「中呉錢氏／收藏印」朱印影（錢穀所用）を存す。

〈台北・国家図書館　三〇九・〇七九三七〉　五冊

清王昶旧蔵

後補香色表紙（二六・三×一五・二糎）。改糸、〔天地截断〕。序、目録、総目、凡例の順に綴し本文。毎冊四巻。第十二巻首六張を欠く。匡郭二一・二×一三・二糎。第一、七、二十巻尾木記部の原紙を破り去るが、第六巻尾のみこれを存する。

間々墨筆にて句圏書入。首に単辺方形陽刻「松陵／史蓉／莊臧」、同「逆圃／所臧」（張乃熊所用）、毎冊首に無辺方形陰刻「石林」、第一・二十巻尾刊記刪去部補紙上に同「青浦／王昶字／曰德甫」、単辺方形陽刻「一字述／菴別號／蘭泉」朱印影（二顆王昶所用）を存す。

○新増直音説文本之属　〔37輯240頁〕

新増直音説文韻府羣玉二〇巻

元陰時夫編　陰中夫注　欠名増〔明〕欠名音

〔明初〕刊（劉氏日□書堂）〔後修〕

この版種は前稿に未紹介のものであるが、現在まで伝本を一

点しか得ないために、版本の要件について確定できない点がある。暫く伝本の状態を記して後考を俟ちたい。版本に関する記述は、既出の〔明〕刊黒口本との相違を記すに止める。

序欠。先ず総目（一張）。次で目録（第二至四張）、上平声目下注記欠。凡例欠。

巻首題「新増直音説文韻府羣玉巻之一（隔二格）上平声（墨丽除刻）／（以下低八格）晩學　陰　時夫　勁弦　編輯／新呉　陰　中夫　復春　編註」等区々。

第一巻（三〇張）
第二巻（乙・二・一―五十張）
第三巻（乙・又一―廿八・又廿八―五十三張）
第四巻（六〇張）
第五巻（乙・一―二十二・又廿二―六十張）
第六巻（一―十四・十三・又十五・十五―四十九張）
第七巻（乙・一―四十七張）
第八巻（乙・一―三十四・又卅四―四十八張）
第九巻（乙―六・又六―四十五張）
第十巻（四八張）
第十一巻（四八張）
第十二巻（四二張）
第十三巻（五七張）
第十四巻（乙・二・二―十七・又十七―三十七張）
第十五巻（一―八・八又―五十張）
第十六巻（一―十・又九・又十―四十四張）
第十七巻（乙・又一―三十四張）
第十八巻（乙―十七・十七―四十五張）
第十九巻（乙・又一―四十張）
第二十巻（一―九・九―四十張）

四周双辺（二〇・七×一二・九糎）毎半張十一行、毎行小二十九字。中縫部、粗黒口（接外周）双線黒魚尾（不対向）、上尾下標「幾フ」、下尾下張数。本文中に間々明初原刻と思われる張子（第二巻第五―八、十三―十六、二十五・二十六以下）を存するが、巻首以下大半の張子は明中葉頃の補刻と思われ、暫時修刻と推定する。巻尾題「新増直音説文韻府群玉巻之幾」等区々。第六巻尾に双辺有界「劉氏日□（破損）書堂刊／［（破損）］」牌記あり。第二十巻尾に三層の八卦・霊獣負書・霊亀負書図を刻す。

本版の特色は、同属他版に比較しても、張付の操作が著しい

点にある。これらは全て張付「乙」「又幾」として加えられた増修に起因しているが、これらの部分は、他版には欠く場合と、他版にもあるが他版では張数を通してある場合との両様あり、本文上の変更としては、どちらも直音注を増入したのである。例えば第五巻・下平声一先韻の首に、本版では「乙」として直音注を備えているが、〔明〕刊黒口本等では直音注を欠き、また同巻・二蕭韻の首では、諸版とも第二十二張後半から次張の前半までの一張分に二蕭・三肴韻分の直音注を補ってあるが、本版では増入分を「又廿二」として処置し、〔明〕刊黒口本等では「二十三」以下巻尾まで数を加える形で処理したのである。本版の状態は恐らく本属の古形を示しており、本属本文が、当初は旧来の新増説文本に増修を加える形で成立したことを窺わせる。なお第一、十―十三巻の如く張数の重複がない巻は、本文に直音注の増入はあるが、他版のように張付は一通としたのである。ただ本版の伝本が補刻（推定）本であるために、他版との関係を確定することができなかった。

〈台北・故宮博物院〉　八冊

清楊守敬　民国朱師轍旧蔵

後補香色表紙（二五・五×一四・八糎）右肩より近世期邦人の筆にて声韻目を書す。五針眼、天地截断。前後副葉。序欠。第九―十一、十二―十四巻を各一冊に収める他は、毎冊二巻。邦人の朱筆にて句批点、批圏、批鈎、傍線書入、下平声以下は疎に遷る。首に無辺方形陰刻「飛青／閣臧／書印」朱印影（楊守敬所用）、巻首に同「朱師／轍觀」朱印影を存す。

〔38輯260頁〕

○新増説文王元貞校本之属

新増説文韻府羣玉二〇巻

元陰時夫編　陰中夫注　欠名増　明王元貞校

明万暦十八年（一五九〇）序刊（秣陵・王元貞）一修

拠元至正十六年刊本

〈堺市立中央図書館　〇三八一・一八〉　一〇冊

後補淡茶色布目花菱繋文空押艶出表紙（二六・二×一六・二糎）左肩題簽を貼布し声目を書す。右肩より打付に別筆にて巻序数、韻目を列す。題簽声目下に又別筆にて韻目を書す。表紙背雲母引。浅葱色包角。本文破損修補。前副葉。陳序、原序、凡例、

目録、総目の順に綴し本文。毎冊二巻。第三巻第二十一張を同第三十六・三十七張間に、第三巻第六十八張（尾）を第四巻第二・三張間に錯綴す。匡郭二一・二×一三・四糎。

間々朱竪句批点、批圈、鈔補、毎韻首張版心上標柱、稀に返点訓仮名、同墨欄上字目標注、補注（「瑛案」等）、鈔補、稀に行間音訓仮名、別墨貼紙補注書入。前見返しに単辺方形陽刻「爾雅堂／臧書記」、毎冊首に無辺方形陰刻「緑竹堂」、単辺方形陽刻「壽山癩祭窩（書楷）」、毎冊尾に単辺小判形陽刻「盤蝸寮」、無辺円形陰刻「養／源」朱印影を存す。

同　〔38輯279頁〕

〔明末〕刊　覆明万暦十八年序刊本之二

〈台北・故宮博物院〉　合　七冊

柴野栗山　徳島藩主蜂須賀家　清楊守敬旧蔵

後補淡渋引表紙（二五・八×一六・四糎）右上方綫外打付に声目、同下方に冊序数を書す。黄檗染包角。首目完整。毎旧冊一巻、現在は平声上下各二冊、仄声毎声一冊。匡郭二一・一×一三・五糎。

稀に朱標圈標点、墨欄上補注書入。首に単辺円形陽刻小「射」朱印影、第十七巻首に単辺方形陽刻「柴氏家／臧圖書」朱印影（柴野栗山所用）、毎冊首尾に双辺方形陽刻「阿波國文庫（書楷）」朱印影（徳島藩主蜂須賀家所用）、第九巻首に単辺方形陽刻「星吾海／外訪得／秘笈」、無辺方形陰刻「飛青／閣臧／書印」朱印影（二顆楊守敬所用）を存す。

〈愛知大学附属図書館簡斎文庫　二七三〉　一〇冊

高取藩主植村家旧蔵

香色表紙（二六・八×一六・七糎）左肩打付に邦人の筆にて「新増説文韻府羣玉［　］幾幾」と書す。改糸、第十冊後表紙新補、破損修補。陳序、原序、目録、総目の順に綴し凡例を欠く。毎冊二巻。匡郭二一・三×一三・五糎。

間々朱墨校改。紺色不審紙貼附。毎冊首に双辺方形陽刻「高取／植村／文庫」朱印影（高取藩主植村家所用）、同「簡齋文庫（書楷）」朱印影を存す。

同　〔38輯290頁〕

清乾隆二十三年（一七五八）刊　後印（菁華堂）

〈中央研究院歴史語言研究所傅斯年図書館　043.515〉　一〇冊
白紙印本
当館新補香色表紙（二六・三×一五・八糎）次で香色表紙、左肩打付に韻目巻序数、右肩に声目を書す。菁華堂封面あり、南京図書館、慶應義塾図書館蔵本と同版、竹紙印。本文白紙印。首目完整。毎冊一巻。匡郭二一・六×一三・七糎。墨句批点、句圏、欄上補注書入、校改。

二　続編・増続会通本・同増編本　解題

○続編之属

元明間の『韻府群玉』の版刻は、次々と覆刊を重ねる一方、新たな便宜を謳い、わずかな増補を繰返して来たが、これらは版刻の都合を第一義とする安易な方法によって行われ、増補と言っても粉飾の域を出ない性質の事柄であった。この場合、本文の管理も杜撰であり、一般的に覆刻の欠点として挙げられる誤写と誤刻とを次第に重ねていった。これに従い、新増説文本、新増直音説文本といった亜種を生みながら、基となる原編の本文自体は劣化の道をたどり、明代中葉までには参考に堪えない箇所を多く抱える結果となっていた。そのような情況の下、万暦十八年前後に南京の監生王元貞が、款式字様を改め、新たに『新増説文韻府群玉』を校刊した。この版本は時宜を得て広範に流通したため、従来の杜撰な覆刻本を退ける形で、以後はこの王元貞校本が本書の流布本と定まった。ただ明代の半ば頃、右の展開とは別に『韻府群玉』の続編が試みられ、増補別編として『類聚古今韻府續編』（以下「韻府続編」と簡称）が刊刻された。

この『韻府続編』を成した包瑜、字希賢は、浙江処州府青田県の出身で、諸方の教官を歴任した人物である。明清の伝記類や方志中に小伝を見るが、その記事は大同小異であり、[2]『栝蒼紀』巻十二・往哲紀、青田縣、皇明の項に拠ると、次のように伝える。

包瑜、字希賢、由擧人任教諭、致政歸。淮王幣聘修書、進講便殿、賜坐忘勢。所著通鑑事類一百二十一卷、左傳事類四十卷、王閲之喜甚、遂梓行、仍命工肖瑜像、親讃曰、見道之眞、履道之正、咳唾古今、寤寐賢聖、傳獵經蒐、回瓢點詠、衣冠肅如、後學企敬。居七年告歸投老。選述甚多、

見藝文志。

これに拠れば、挙人として教諭に任じ、官を退いた後、淮王の招聘により進講の栄に浴し、王の感ずる所となって、包の著作である通鑑事類百二十一巻と左伝事類四十巻の刊行が図られ、その他にも著述が多かったと言うのである。同書巻十三・藝文紀を見ると、通鑑事類一百二十一巻、史書係韻三百巻、綱目事類四十巻、読書備忘一百巻、春秋講義、周易衍義を挙げ、倶に包瑜の著作と登録してある。ただ実際、このうちの通鑑事類か或いは綱目事類に該当すると思わしき伝本を存するが[3]、その他の著作については伝本の所在を聞かない[4]。書目から判断すると、教官の著作らしく経史に取材した編著と注釈が多かったと思われる。肝心の『韻府続編』については言及がなく、後の方志もこれを踏襲するが、『万姓統譜』巻三十一・肴韻の章には、包の伝を載せてなお「撰韻府續編一百二十三卷、春秋講義、周易衍義、讀史六事、讀書備忘、稽古齋集諸書、藏于家」と記している。

本書伝本のうち先行のものを見ると、後掲の如く明弘治十二年（一四九九）の張時叙および潘琴の序を存して、編者包瑜についても言及があり、その伝について少しく補うべき点がある。

先ず張序に

致政掌教青田包先生瑜、以景泰庚午鄉薦、歷建寧臨淄進賢浮梁四學教諭。自幼好學、至老不倦。常以陰氏韻府所收有未備、故爲續編、以補其畧。

とあり、弘治十二年には致仕していたこと、景泰庚午元年（一四五〇）の郷挙によって官に就いたこと、福建建寧府、山東青州府臨淄県、江西南昌府進賢県、江西饒州府浮梁県学の教諭を歴任したことがわかる。この序を記した時、張は青田県知県の職にあった。また次の福建興化府知府を以て致仕していた潘琴の序には

君名瑜、字希賢。心靜而學富。由鄉薦歷儒官四十餘年、只今行年八十、猶能書細字、盡一燭不倦。平生著述甚多、此特其一者耳。

とあり、包が四十年以上にわたり学官を勤め、景泰元年の任官から数えれば、弘治三年（一四九〇）以後に官を辞したこと、また弘治十二年には概ね八十歳で、永楽十八年（一四二〇）以前の出生であったことがわかる。このことからすると、淮王の聘を受けたのは致仕の後の七年間であったから、弘治三年（一四九〇）以後、この淮王が正統十三年（一四四八）に封を襲い

弘治十五年に薨じた康王朱祁銓に当たるとすれば、同三年から十五年の間であったことになる。[5] これを要するに、包は四十数年の間、地方教官を勤める傍ら、攷々として編著に励み、致仕の後、晩年になって淮王の幣を仰ぎ、またその著作のうちの幾つかは梓に附される機会を得たのである。

次に、辛うじて刊刻された『韻府続編』の版本を解題し、本書流通の実情を見て行きたい。本属については、現在までに二版三種の本文を実見することができた。

類聚古今韻府續編四〇巻

明包瑜編

明正徳十二年（一五一七）刊（劉宗器安正書堂）

この版本は初刊であろうと思われるものの、実際の伝本に接し得ていない。ただ中国鎮江市博物館蔵本の伝存が著録され、『四庫全書存目叢書』子部一七三、四に影印されている。その本文は四十巻を備え、後出の略本に比較すると、広本と称すべきものである。暫時書影に従い、著録し得る点のみを記す。

先ず張時叙序（二張）。首題「類聚古今韻府續編大全序」、次行より低一格諱字擡頭にて本文（影印本原欠第一張後半、この箇所同行款の重刻本に拠り《　》内に補う）「事理之在天下古今至不一也不有以會之／孰從而知之此韻／府羣玉之所以脩而續編之所以緝也致政／掌教青田包先生〈瑜〉以景泰庚午鄉薦歷建／寧臨淄進賢浮梁四學教諭自幼好學至老／不倦常以陰氏韻府所收有未備故為續／編以補其略既克成編而遇者欲作興梓／行而中遭多故弗果遂弘治丁巳之冬予奉／《（擡頭）命來宰青田知有是編因取徧閲則見其間該／載甚富自經傳子史以及百家衆説罔不畢／集一開卷間瞭然在目異聞未見多所長益／予甚悦之因令人重校繕寫發付書林劉〈宗〉／〈器〉氏刊刻以廣其傳（中略）》（中略）是編為卷凡／四十有四今日一出将與四方識者共之書／成欲有所識故書是語於首用識其所以續／之之意云／（以下擡頭）弘治十二年歳在己未秋八月吉／賜進士文林郎青田縣知縣渤海張時叙　序」。毎半張九行、毎行一八字。尾題「韻府續編大全〈畢〉」。

次で潘琴序（第三至四張）。首題「類聚古今韻府續編大全序」、次行より低一格本文「孔子象易之大畜曰（中略）陰氏韻府羣玉囊／括古今坐閲武庫或者猶病其略予友青田包君／講校之暇日取群玉之編續以所聞於經史傳記／者隨韻增入窮搜廣剔積累既久遂成大帙異聞／隠録既詳且備較之群玉蓋所謂青於藍者乃別／其集

而自成（中略）曩者僉憲盱江王公華巡土／至邑得是編而閱之甚喜慨然曰成人之美吾職／也亟給紙墨副其本欲恣閩藩舊知梓之書林而行之業以遘疾而寢無乃此志之行與否亦固有／遇不遇時耶君屢貽予書曰吾平生精力殆盡于／此凡十易稿而後定子素知我必得一言以為信／今傳後之徵乎夫君之為學志乎（中略）君名〈瑜〉字希賢心靜而學富由鄉薦歷儒／官四十餘年只今行年八十猶能書細字盡一燭／不倦平生著述甚多此特其一者耳予知之深故／不辭蕪陋而題其端／（以下擡頭）弘治十二年龍集巳未秋八月望／賜進士中順大夫福建興化府知府致仕鶴山潘琴序」。毎半張一〇行、毎行二〇字。尾題同前。

右の両序を見ると、本書は包氏の編著であり、当初先ず僉憲の王華が写し取って校正に努め、閩藩の書林から刊行しようとしたが、王の病によって頓挫した。次で明弘治丁巳十年（一四九七）に青田知県として着任した張時叙がこれを重校し、同十二年に、書林劉宗器に発付刊行する、と言うのである。張序第二張、本文末に行を接し双辺有界牌記あり、本文低一格「韻府一書自皇元大徳丁未陰氏所著經今二百／餘年今有青田包先生常觀是書其中收有未備／者故搜求玉海通考事文類聚　皇明一統志等／書續補其畧以得其全名曰韻府續編如正徳丙／子安正堂劉宗器氏得求藁本捐資謄寫刋刻類／有二千餘板今刋一東字起至鄴字匀止序目一／十餘板共四十巻姑且印行以示賢明君子便以／觀看瞭然在目　書成通行印賣以便觀覧幸甚／（擡頭）正徳丁丑孟秋之吉書林安正堂劉宗器　謹識」。

右の「大徳丁未」は十一年（一三〇七）、原編『韻府群玉』の陰竹埜（応夢）の序に拠る年紀と思われるが、既に述べたように これは原編完成以前に書かれた文章である（三稿223頁）。また「正徳丙子」は十一年（一五一六）、丁丑はその翌年。「安正堂劉宗器氏得求藁本、捐資謄寫刋刻」と言うのは、張序に「予甚悦之、因令人重校繕寫、發付書林劉宗器氏刋刻、以廣其傳」と言っていたことに合致する。しかし両序から刊記まで十七年もの隔たりがあり、張序には本書を四十四巻と言っていたのに結局四十巻とされていることは、安正書堂にとって余裕のない版刻であったことを窺わせる。包瑜の歿年は不明であるが、正徳十二年には少なくとも百歳前後の高齢という計算になり、自身はその刊行を見ることができなかったかも知れない。

次で凡例（第五張）。首題「類聚古今韻府續編大全凡例」、次行より一つ書下低一格諱字擡頭にて本文、毎条改行して第六条に及ぶ。第三条に洪武正韻に準拠することが謳われる。毎半張一

一行、毎行二〇字。尾題「韻府續編大全凡例〈畢〉」。

次で周序（二張）。首題「增廣韻府大全序」、次行より諱字改行にて本文（句圏附刻か）「（上略）自元至大庚戌。以迨／國朝正德癸酉。上下一百餘年家傳人誦無／可擬議。我鄉青田包夫子出。增續是書。總四／十卷。（中略）既有是書。弗傳／於世。不負作者之盛心。抑孤大方之渴仰／甚非不没人之良意。今建陽安正堂劉氏。徵／復校讐。梓行天下。予聞之。喜而不寐。（中略）／正德昭陽作噩之歲仲秋月哉生魄／（低三格）餘杭後學静軒周禮書于護國山莊」。毎半張一〇行、毎行一七字。尾題「序〈畢〉」。

元至大庚戌は三年（一三一〇）、原編に附する姚雲序の年紀。正德癸酉（昭陽作噩）は八年（一五一三）を指す。この段階では巻数が現状の四十巻となっている。

次で目録（四張）。首題「韻府續編大全目録」、次行花口魚尾圏発下低二格に声目を標し、次行低一格、墨囲陰刻にて巻序数を標し、同行下より低五、一一格に韻目を列す。毎巻改行。入声十葉韻に至る。尾題「韻府大全目録〈畢〉」。

巻首題「類聚古今韻府續編巻之一（―四十）（隔三格）平（―去）聲（墨囲陰刻間々欠）／（低七格）後學青田包瑜編輯」、又題「類聚古今韻府大全」、第二十九巻以下題「新刊古今韻府續編」等。次行低二格「一東」等韻目（以上大字）、同行直下より低二格にて「東冬〇通〇同童僮瞳」以下直音注、小字双行。次行より本文、先ず大字にて「東」等と字目を標し（同音字の首は墨囲）直下より注、小字双行。次で「賦河東」等と中字単行にて熟字を標し、直下より注、小字双行。注中標目字「ー」符代号、注の末尾に「韓（刻陰）」等（或は墨囲）と出典を附す。毎韻改行。

第一巻	（七三張）	平声	一東
第二巻	（六四張）		二支
第三巻	（二五張）		三齊
第四巻	（四三張）		四魚
第五巻	（三七張）		五模
第六巻	（五三張）		六皆・七灰
第七巻	（三八張）		八眞上
第八巻	（四七張）		八眞下
第九巻	（三六張）		九寒・十刪
第十巻	（四八張）		十一先
第十一巻	（二五張）		十二蕭・十三爻
第十二巻	（二八張）		十四歌―十六遮
第十三巻	（四四張）		十七陽

第十四卷　（五四張）　十八庚一―三
第十五卷　（三二張）　十八庚四
第十六卷　（四六張）　十九尤上・下
第十七卷　（三八張）　二十侵―二十二塩
第十八卷　（五五張）　上声　一董―二紙三
第十九卷　（四七張）　二紙四―三薺下
第二十卷　（三二張）　四語
第二十一卷　（三九張）　五姥上・下
第二十二卷　（四八張）　六解―十一銑
第二十三卷　（四三張）　十二篠―十四哿
第二十四卷　（二八張）　十五馬―十七養
第二十五卷　（三五張）　十八梗―二十二琰
第二十六卷　（一一張）　去声　一送
第二十七卷　（三七張）　二寘（マヽ）三―三霽下
第二十八卷　（五五張）　四御―七隊下
第二十九卷　（四三張）　九翰―十一霰
第三十卷　（五九張）　十二嘯―十七漾下
第三十一卷　（四九張）　十八敬上―二十二豔
第三十二卷　（五〇張）　入声　一屋一―四
第三十三卷　（二八張）　二質一・二
第三十四卷　（三四張）　二質王（マヽ）・四
第三十五卷　（四六張）　三曷―五屑下
第三十六卷　（四一張）　六薬上・下
第三十七卷　（二八張）　七陌一・二
第三十八卷　（二五張）　七陌三・四
第三十九卷　（三一張）　七陌五・六
第四十卷　（五五張）　八緝―十葉

四周双辺、毎半張一一行、毎行小二九字。中縫部、中黒口（接内周）、上辺題「韻府大全」、双線黒魚尾（不対向）、上尾下標「卷之幾（幾フ）」、下尾下張数。

巻尾題「類聚（新刊）古今韻府續編卷之幾」、間々同行下声目。

大尾題「新刊類聚古今韻府續編卷之四十〈終〉」。

第四十巻尾題前に双辺有界「正徳丁丑仲秋／京兆劉氏安正／書堂新増栞行」牌記あり。

本書を刊刻した安正書堂は、明前期から後期にかけて現れた建陽の書肆として知られ、概ね宣徳から万暦の間に活動の痕跡が認められる。謝水順・李珽両氏の『福建古代刻書』（一九九七年、福建人民出版社）に拠ると、歴史最長、数量最多の書肆

ということである。本書大尾の刊記に「京兆」の文字を冠するのは貫籍に拠るものであろうか、周序にも「建陽安正堂劉氏」と言っているから、右と別の者とは思われない。安正書堂は、既に解説した通り（三稿235頁）弘治七年（一四九四）に『新増説文韻府群玉』を覆刻した書肆であり、本版の開刻も一連の事業と見なすことができる。

本書は凡例にある通り、洪武韻による整序排列を採用しているが、これは明代学官の編書として当然であろう。ただ右の巻序と編目を見ると、原編の『韻府群玉』に比べ巻立と分韻がよく対応しておらず、一韻の分配も不定であり、その編集に錯雑の部分を残していたことがわかる。また字句の採録を重視するあまり、熟字としては不安定な、五字六字以上に及ぶ字句の採録が多い。本文の扱いという点から見てもやや雑駁で、原文を節略したり原拠を示していなかったりする項目も目に着くが、これは劉宗器の刊語にある通り、本書が先行の編書類書を最大限に利用して成り立っているからであり、劉の言は本文中に標目のある書を挙げたまでであって、寧ろその一端を述べたに過ぎない。後に四庫館臣が、本書を「叢脞龐雑、殊無可采」と断じて存目に止めたのも已むを得なかった。

毎巻首尾の題目について、第二十九巻以降みな「新刊」の文字を冠することが注意される。これは恐らく後述の別版に二十八巻不全本を存することと関係があり、本版も一時二十八巻の状態で行われる機会があったかと想像される。そう考える理由としてもう一点、本書には第二十八、九巻間に位置すべき去声八震韻の本文を全く欠いてしまっていることが挙げられ、これは本版の開刻が漸進的に行われたことを物語っているように思われる。張序末の劉宗器の刊記には「類有二千餘板、今刊一東字起至鄴字匀止、序目一十餘板、共四十巻、姑且印行、以示賢明君子」と本文の完備を殊に強調しているし、大尾の刊記に「新増栞行」とあることは、図らずもそうした経緯を反映しているのではなかろうか。その場合、両刊記は四十巻の完成時に附せられたということになるから、正徳十二年とは増修時の年紀である可能性がある。記して後考を俟ちたい。

なお鎮江博物館蔵本は間々本文に墨釘を有し、第十八巻などは相当甚しく、あるいは補刻を含んでいるかも知れない。また第十五巻第二十七・八、第二十一巻第二十三・四、第二十三巻

第四十一・二、第三十一巻第二十一、第三十二巻第三十三、第三十五巻第四十四・五、第三十八巻第二十三・四（影印本注記せず）、第三十九巻第二十七、三十（注記せず）、第四十巻第九・十張を欠く。

同　二八巻　原欠去声震韻至入声

〔明〕刊（日新書堂）拠明正徳十二年刊本

この版本は、上記明正徳十二年刊本と同款式の重刊本であり、字体字様もほぼ一致し、巻首に於いては覆刊と言うべき版刻である。ただ巻の途中から本文を節略して排字を異にする所があり、毎巻の張数も異なっているから、前本に対して略本と称すべきである。また標記のように、当初は第二十八巻までの不全の状態で行われた。次に底本と異なる点のみを解説する（図版一、二）。

先ず張序、現存本では第二張後半の紙葉を刪去してあるため、前版の牌記の箇所がどのような版面であるか不明。次で潘序。次で凡例。現存本には周序を欠く。

次で目録（三張）。第三張後半第一行の第二十八巻、去声八震韻に至る。第二張までは前版を覆刻したのであるが、第三張は新刻で少しく字様が異なる。これは、前版では第二十九巻以下の編目を存するが、該版には要しないからであろう。尾題「目録〈畢〉」。

巻首の題署や本文の体式は底本に同じであるが、該版では毎巻の張数を減じているので次に列挙する。

第一巻（六三張）平声　一東
第二巻（五二張）　二支
第三巻（一九張）　三齊
第四巻（三四張）　四魚
第五巻（第一―二十四五―二十八張）五模
第六巻（三九張）　六皆・七灰
第七巻（二五張）　八眞上
第八巻（三五張）　八眞下
第九巻（二七張）　九寒・十刪
第十巻（三七張）　十一先
第十一巻（二一一張）　十二蕭・十三爻
第十二巻（二二三張）　十四歌―十六遮
第十三巻（三四張）　十七陽

第十四卷　（三七張）　十八庚一―三
第十五卷　（二一張）　十八庚四
第十六卷　（三四張）　十九尤上・下
第十七卷　（二七張）　二十侵―二十二塩
第十八卷　（三六張）　上声　一董―二紙三
第十九卷　（三五張）　二紙四―三薺下
第二十卷　（第一―二十至二―二十四張）四語上・下
第二十一卷　（二八張）　五姥上・下
第二十二卷　（三八張）　六解―十一銑
第二十三卷　（三〇張）　十二篠―十四哿
第二十四卷　（二一張）　十五馬―十七養
第二十五卷　（二六張）　十八梗―二十二琰
第二十六卷　（　八張）　去声　一送
第二十七卷　（二七張）　二寘三―三霽下
第二十八卷　（四四張）　四御―七隊下

四周双辺（二〇・八×一二・九糎）。

大尾題「新刊類聚古今韻府續編卷之二十八〈終〉」。

本文後、右の尾題前に双辺「日新書堂校正刊」牌記あり。

本版を刊刻した日新書堂は建陽の書肆、元末の至正年間前後に出版を行った劉錦文の末裔とされる。この劉氏は至正十六年（一三五六）に、原本の『韻府群玉』に増編を加えた『新増説文韻府群玉』を世に送り出した者でもある。劉氏には元末以降、出版の事績が数多くあって著名であるが、明代の半ば、弘治正徳の間に最も活発であり、既に著録したように、明弘治六、七年（一四九三、四）には『新増説文韻府群玉』を覆刻し「説文」の増入を完成している（三稿233頁）。この時、日新書堂刊本は、ほぼ同時に安正書堂によって覆刻されているから、両者の間には何等かの相互関係があり、前記『韻府続編』安正書堂版と本版の重刻も、この事業に連続していたと思われる。

本版では、目録も本文も一書を閉じる体裁に作られているが、その本文は去声の末と入声の全てを欠いており、目録の終わる去声八震韻にも至らず、直前の七隊韻下「政事十縣最」の語句を以て終わっている。これは前版の末に述べたように、当初底本の刊行に支障があったためかと思われる。

明正徳十二年安正書堂刊本と、当該日新書堂重刊本の本文を比較すると、毎巻の始めには覆刻関係と見えるのに、重刊本に於いては巻の途中から本文を節略し、巻の末尾までには本文が

追い込まれて、毎巻十張前後の減少を示している。該版に於ける節略には二通りの方法があり、先ず底本にはあった熟字の項目を、附注共々除くことが行われている。例えば第一巻の「通」字に於いては、底本にある「福與備通」の項目を欠いて約一行を減じ、次の「同」には「偪同」「不異尚同」「姓氏不同」「祇與只同」「情性不同」「祖孫父子賢否不同」の六項を欠いて約五行を減じ、巻尾に向かって次第に節略を増していく。またもう一には、底本と同じ熟字を掲げても附注の文章を略することが行われている。一例を挙げれば、第一巻「宗」字の項、正徳刊本には（＜　＞小字、一　一　陰刻）

（上略）**泰山岱宗**〈書、歳二月東巡守至岱宗　二舜典二。〇五經通義曰、泰山一名岱宗。王者受命易姓、報功告代於岱宗。岱者代也。東方物之始交代之処也〉。**魂遊岱宗**〈遊岱之魂〉。**陰陽之宗**〈張衡為一、郎顗処徴最密　二方術傳叙二〉。**祈穀天宗**〈天子以元日祈谷于上帝。季冬天子乃蜡百神於南郊、為來年一一於一一。注、蜡、臘日祭也。百神、自神農至昆虫也。天宗、日月星辰之属也　二月令二〉。（下略）

とあるのに対し、重刊本では

（上略）**泰山岱宗**〈書、歳二月果巡守至岱宗　二舜典二。**魂遊岱宗**〈遊岱之魂〉。**陰陽之宗**〈張衡為一、郎顗処徴最密〉。**祈穀天宗**〈天子以元日祈谷于上帝。季冬天子乃蜡百神於南郊、為來年一一於一一　二月令二〉。（下略）

とあり、「泰山岱宗」の項で『五経通義』の引文を、「陰陽之宗」で「（後漢書）方術傳叙」の標目を、「祈穀天宗」では「月令」の注を省いている。このような節略が重なった結果、第一巻末尾までには底本に対して九張を減じ、他巻に於いても同様の略本となっている。こうした節略が如何なる規矩を以て行われたか、ほとんど体例を認め難く、恣意的に字数を削減したとしか評し得ないようである。相前後するが、抑もこの重刊本で、底本をどの程度正確に写しているかと言えば、右の引文中「泰山岱宗」の『書経』舜典中に「東」を「果」と誤っている如く、十分に正確とは言い難い。このような例は、覆刊と言うべき巻首にあまり見られないのに対し、節略によって排字の動いた後には、相当頻繁に現れるようになる。総じて節約のために本文を劣化させたということになろう。

この形の版本は次の一本を知るのみである。

〈東京大学東洋文化研究所大木文庫　経部小学類三一〉　一四冊

後補縹色裂表紙（二六・一×一四・七糎）左肩黄檗染裂題簽を貼布し双辺中「韻府續編　〈五（夜漏聲催曉箭以下、杜甫「奉和賈至舍人早朝大明宮」七絶の字句）〉〈巻幾〉何聲」と書し、右肩より同工の目録簽を貼布し同筆にて双辺中に声目、巻序数、韻目を列記す。裏打改装。張序（第二張後半部刪去、新紙を継いで匡郭界線のみ鈔補）、潘序、凡例、目録の順に綴し本文。第一、二、十五―十七、二十六―二十八巻を各一冊とする他は毎冊二巻。第二十七巻第五・六張を欠く。

首尾に無辺方形陰刻「曾數／卷殘／書」朱印影を存す。

又　増修　四〇巻

巻二十一―四十覆明正徳十二年刊本

上記の版を用いながら不足の本文を増修した後印本である。但し増修は第二十九巻以下ではなく、溯って第二十一巻の上声五姥韻以下を新刻し、全四十巻とした版本である。増修の部分に関しては明正徳十二年刊本をそのまま覆刻したので、前本と異なり第二十一―二十八巻の本文も節略がない。つまり前半の第一―二十巻は略本、後半の第二十一―四十巻は広本になっているが、これは版木の襲用と覆刻増修の複合した結果である。また底本に従って去声八震韻を欠く。これに伴い目録は四張に復して、第四十巻入声十葉韻に至る。また二十八巻本と同様に、現存本はみな周序を存しない。[6]

〈台北・国家図書館　三〇九・〇八〇二九〉　三六冊

白棉紙印　清翁同龢　民国劉承幹旧蔵

香色表紙（二六・三×一六・六糎）。本文白棉紙、襯紙改装。張序、潘序、凡例を欠き、目録のみを存して本文に入る。第三・四、七・八、十一・十二、十九・二十、二十六・二十七巻の各二巻を一冊に収め、第三十巻を二冊に分かつ他は毎冊一巻。第三十巻第五十七・五十八張を欠き、界線のみを鈔する白紙二葉を補う。第四十巻第五十五張（大尾）後半、刊記を存する部分の紙葉も刪去されている。匡郭二〇・七×一二・九糎。

首に無辺方形陰刻「玉人／心鏡」、単辺方形陽刻「問古／草堂」、首尾に無辺方形陰刻「沈浸醲郁／含英咀華／作爲文章／其書滿家」朱印影、巻首に単辺方形陽刻「去／平」、無辺方形陰刻「同龢／印」朱印影（二顆翁同龢所用）、単辺楕円形陽刻「半〈潭秋／々（水）／一房山〉」朱印影（李洞「山居喜友人見訪」

七絶結句による、丁福保所用か)、毎冊首に単辺方形陽刻「呉興劉氏／嘉業堂／藏書印」朱印影(劉承幹所用)を存す。

〈国立公文書館内閣文庫楓山官庫本　子一二〇・二〉　一〇冊

白棉紙印

後補淡茶色梅花亀甲繋龍文空押艶出表紙(二四・二×一五・七糎)左肩題簽を貼布し「韻府續編大全〈幾之幾〉」と、首冊のみ題簽下に打付に同筆にて「共十冊」と書す。押八双。本文白棉紙印、虫損修補。張序、潘序、凡例、目録を存し本文に入る。第一巻第六、八、九、七張と、第十九巻第五、二十五張を相互に、第三十二巻第三十九張を第三十・三十一張間に錯綴。第二十八巻第四十五張、第二十九巻第二十九・三十張を欠き補紙。第三十三巻第二十三、二十五、二十七張を欠き、第二十六張を重綴。第三十四巻第二十二張、第四十巻第九・十張をも欠く。匡郭二〇・七×一二・九糎。

右の他、孫星衍の『平津館鑑蔵書籍記』に類本を著録して類聚古今韻府續編四十巻、題後學青田包瑜編緝。前有弘治十二年張時敍序、弘治十二年潘琴序、韻府續編凡例、正德癸酉周禮序。張時敍序後有正德丁丑書林安正堂劉宗器題識、末巻後有正德丁丑仲秋京兆劉氏安正書堂新增栞行木長印。此本元陰氏韻府羣玉原編、明包氏改依洪武正韻增添至四十巻、故稱續編。佩文韻府本此而増廣之。黒口板、毎葉廿二行行廿九字。收藏。有嘉興呉萬里氏印朱文方印。

と記してある。これは四十巻本であるが、正德十二年刊広本か、覆版増修広略本か、また別版か不明。[7]

類聚古今韻府續編羣玉三二巻

明包瑜編

明嘉靖三年(一五二四)刊(劉氏)

巻二―二十八覆〔明〕刊本

この版本は純粋な『韻府続編』ではなく、前記二十八巻本を基に、第一巻と第二十九巻以降には原編の新増直音説文本を合した本文を有する。中間の巻は前版の覆刻に係る。主として『韻府続編』から派生した点を重んじ本属に収めた。版種としては全張新刻のものである。

先ず目録(二張)。首題「韻府群玉大全目録」、次行花口魚尾圏

発下低一字半格に声目を標し、次行低一格に巻序数（墨囲陰刻）を標し、同行下より低四、九、一四格に韻目を列す。第三十二巻、入声十七洽韻に至る。尾題「新刊韻府群玉大全目録〈畢〉」。

巻首題「類聚古今韻府續編羣玉巻之一　上平聲（墨囲陽刻）／（以下低七字半格）晚學　陰　時夫　勁弦　編輯／新呉　陰　中夫　復春　編註」「類聚古今韻府續編巻之二　平聲（墨囲陽刻）」、又題「類聚古今韻府續編大全巻之十三」「類聚古今韻府大全巻之十四／（低一〇字半格）青田包　瑜　續編」「新刊類聚古今韻府續編巻之十五」「新刊類聚古今故事韻府大全」「類聚古今故事韻府大全巻之十七」「古今韻會海篇直音韻府羣玉巻之二十九」「増補韻會海篇直音韻府羣玉巻之〈三十〉」等。首巻、題署次行低一字半格に「一東」等と韻目を標し、直下より直音注、小字双行。次行より本文。体式同前。第二―二十八巻の間は二十八巻略本と同排字であるが、前後の接属を明示するために重ねて掲げる。

第一巻　（二九張）　上平声　一東・二冬・三江
第二巻　（五二張）　平声　二支
第三巻　（一九張）　三齊
第四巻　（三四張）　四魚
第五巻　（第一―二十四五―二十八張）五模
第六巻　（三九張）　六皆・七灰
第七巻　（二五張）　八眞上
第八巻　（三五張）　八眞下
第九巻　（二七張）　九寒・十刪
第十巻　（三七張）　十一先
第十一巻　（二一張）　十二蕭・十三爻
第十二巻　（二三張）　十四歌―十六遮
第十三巻　（三四張）　十七陽
第十四巻　（三七張）　十八庚一―三
第十五巻　（二一張）　十八庚四
第十六巻　（三四張）　十九尤上・下
第十七巻　（二七張）　二十侵―二十二塩
第十八巻　（三六張）　上声　一董―二紙三
第十九巻　（三五張）　二紙四―三薺下
第二十巻　（第一―二十至二―二十四張）四語上・下
第二十一巻　（二八張）　五姥上・下
第二十二巻　（三八張）　六解―十一銑
第二十三巻　（三〇張）　十二篠―十四賀
第二十四巻　（二一張）　十五馬―十七養

第二十五巻　（二六張）　十八梗―二十二琰
第二十六巻　（　八張）　去声　一送
第二十七巻　（二七張）　二寘三―三霽下
第二十八巻　（四四張）　四御―七隊下
第二十九巻　（三四張）　入声　一屋―三覺
第三十巻　（四四張）　四質―九屑
第三十一巻　（四一張）　十藥・十一陌
第三十二巻　（四〇張）　十二錫―十七洽

四周双辺（二〇・六×一二・九糎）毎半張一一行、毎行小二九字。中縫部、粗黒口（接内周）上辺題「韻府大全（巻三十以降間々「韻府羣玉」）」、双線黒魚尾（不対向）、上尾下標「巻之幾」、下尾下張数。

巻尾題「古今韻會海篇直音韻府羣玉巻之一」「古今韻府大全巻之六〈終〉」「類聚古今韻府大全巻之九〈終〉」「新刊韵府大全巻之十」「類聚古今続編韻府大全巻之十二」「新刊類聚古今韻府大全巻之十三」「類聚古今韻府續編巻之十六」「新刊類聚古今故事韻府續編巻之廿一」「新刊類聚古今故事韻府大全巻之廿三〈終〉」「増補海篇直音韻府羣玉巻之廿九終」「増補韻會海篇直音羣玉大全巻之三十一終」「新増説文韻府羣玉巻之三十二終　入聲（墨囲陰刻）」等区々。

第三十二巻尾題前に宝器瑞雲「福（墨囲）」下、童神捧持双辺「嘉靖甲申劉氏重刊」蓮牌木記あり。甲申は三年（一五二四）。

本版解題の冒頭に記したように、右の第一巻と第二十九―三十二巻の五巻は原編の新増直音説文本に基づくから（同本の第一巻と第十七―二十巻の五巻に相当）、声韻目も原編採用の礼部韻に拠っている。また『韻府続編』二十八巻本は去声七隊下韻を以て中絶しているが、それ以降、去声末に至るまでの部分は補わなかったので、八震韻に関しては諸本に欠くため已むを得ないが、八震―二十二豔間の本文は不足のまま放置されている。首尾の題目にも定式がなく、如何に杜撰な本文であるかが窺い知れよう。[8]

〈成田山仏教図書館　四三・一三四〉　一〇冊

後補香色表紙（二三・九×一五・六糎）左肩打付に「説文韻府羣玉（〈大全〉）（隔三格）〈幾〉」と書す。裏打改装。天地截断。目録を欠き室町末近世初の筆にて鈔補、本文に入る。第十三―十六巻、第二十三―二十六巻を各一冊に収める他は毎冊三巻。第

四巻第二十一張、第七巻第十三張、第八巻二十七張、第九巻第二十三―二十七張（尾）、第十巻第一張、第二十九巻第四張をも欠き目録同筆にて鈔補。

鈔補同朱にて竪句批点、批圏、同朱墨にて本文磨滅部等鈔補、欄上標注校注補注書入。縹色、淡紅色不審紙。毎冊首に単辺方形陽刻不明墨印影、重鈐して単辺円形陽刻不明墨印影を存す。

〈宮内庁書陵部　二一四・一四八〉　二〇冊

徳山藩主毛利家旧蔵

後補香色表紙（二三三・二×一四・〇糎）左肩に淡青地題簽を貼布し「韻府續編［　］幾」と書す。押八双。先ず目録を存し本文に入る。第一、四、九、十四、二十八、二十九、三十、三十一、三十二巻を各一冊に収め、第十五―十七巻を一冊に収める他は毎冊二巻。第五巻第二十三・「二十四五」張巻に白紙一葉を挾み、第十六巻第三十三張、第十八巻第十八張を欠く。匡郭二〇・五×一二・九糎。

毎冊首に無辺方形陰刻「德藩／藏書」、双辺方形陽刻有界「明治二十九年改濟／德／山／毛利家藏書／第　番／共　冊」朱印影を存す。

〈Harvard University, Harvard-Yenching Library　T9305/7323.2〉　八冊

清丁裕旧蔵

後補白雷文繫文空押艶出表紙（二三三・七×一四・一糎）左肩双辺摺枠題簽を貼布し「韻府續編［　］〈天（―蛇）〉」と書す。天地截断。目録を欠き清人鈔補。本文に入り、第一―三、四―七、八―十二、十三―十七、十八―二十一、二十二―二十五、二十六―二十九、三十―三十二巻と分冊す。匡郭二〇・四×一二・九糎。

第六冊尾に「甲午十二月初五日閲此」墨識あり。毎冊首に無辺方形陽刻「石門／山人」「丁第／傳芳」朱印影（丁裕所用）、単辺方形陽刻「稲田／福堂／圖書」朱印影を存す。

〈上海図書館　T四一六〇八〉　一冊

存巻一

後補藍色金砂子散表紙（二四・五×一四・五糎）。目録を存し本文に入る。

該本については草卒の間に閲覧したのみにて、詳細に亘る暇を得なかった。

右の他、中国雲南大学図書館に「新刊類聚古今故事韻府大全四十巻、明嘉靖四年劉氏日新書堂刻本」を存すると伝え、また楊以増の『海源閣書目』子部類書類に「明翻元本類聚古今韻府大全續編四十巻　二十冊」と見えるものは、題目から本属に当たるものと思われるが、如何なる版本か不明である。

以上の知見に基づき本属本文の展開を整理すると、先ず明弘治十二年（一四九九）頃に、劉宗器安正書堂によって本書の版刻が図られた。しかしその進みは順調でなく、一旦は去声の末と入声を欠く二十八巻本として行われた可能性がある。この版刻は明正徳八年（一五一三）以前に四十巻の形が定まり、同十二年には、ほぼ完具の本文が刊行された。それと相前後して、未完の二十八巻本が日新書堂から重刊されたが、これは節略を伴う本文とされた。この版本はのちに正徳十二年刊本を覆刻する形で増修され、同じく四十巻本とされたが、前半の二十巻は略本のままで行われた。また嘉靖三年（一五二四）、主として二十八巻略本を覆刻し、不足の部分を原編の新増直音説文本によって補うという、混態にして不完全な形の三十二巻本が刊行された。凡そ本属刊行の経緯は複雑で、実際の事業は支障の多い過程であったと想像される。

以上の関係を図示すれば次のようになろう。

（続編）

明正徳十二年刊（二十八至）四十巻広本（→増続会通本）

↓〔明〕刊　二十八巻略本→明嘉靖三年刊三十二巻本

↓又　増修四十巻広略本　　（→新増直音説文本）

明代後葉の私家蔵書目を見ると、当該の『韻府続編』と思わしき書目を録することがあり、[9] 実際にある程度本書の流布した様子が窺われる。しかし包瑜の伝にも見た通り、本書が包の著作であったことは次第に忘れられ、『千頃堂書目』を見ると、巻十五、子部類書類に「續韻府羣玉四十巻」と録しながら、既にその編者の名を佚している。このために、四庫館臣が本書を『提要』の存目に載せて

韻府續編四十巻〈内府／藏本〉

舊本題元青田包瑜撰。考括蒼彙紀、包瑜、字希賢、青田人、景泰庚午舉人、官教諭、著有周易衍義。黄虞稷千頃堂書目載包瑜周易衍義、註曰成化中浮梁知縣、則瑜實明人。觀書

中所列部分已用洪武正韻、是其明證。蓋鬻書者以其板似麻沙本故割去原序、僞爲元刻耳。其書補陰氏韻府羣玉之遺、叢脞龐雜、殊無可采。惟間附考證案語、與韻府羣玉體例小有不同。

と、撰者と成立年代の著録に筆を費やしていることは、本書の伝存とその認知が比較的微弱な情況にあったことを反映する。これには、版刻の支障が重大な原因を成したかと見られるが、四庫館臣も本書を存目に止め、その流布を促すことはなかった。諸件相俟ち、本書の伝存は稀であって、原編の『韻府群玉』に比較すると微弱な情況にある。しかし本書の編集は後掲の増続会通本に引継がれ、もとの中国では早くに忘れ去られても、朝鮮と日本に却って広範な受容者を得るという形で、その意義を顕したのである。

○増続会通本之属

本属は巻首に「増続会通韻府群玉」と題し、三稿に解説した新増説文本を基に、上述の続編を合した本文を有するが、いずれの伝本も、その合編がいつどこで何者によって成されたかを明示しない。ただ現存伝本による限り明清の間に版本を見ず、朝鮮と日本にのみ刊行の事実が認められる。また朝鮮と日本に行われた諸本の中では、朝鮮での刊出が先行するため、[10] 先ず朝鮮で編集された可能性がある。合編の行われた時期についてはある程度限定することができ、基となる『韻府続編』の四十巻本が刊行された正徳十二年（一五一七）以降、また後述のように、現存本中に隆慶二年（一五六八）の朝鮮朝の内賜記を有する伝本があり、少なくともそれ以前と見られるから、概ね十六世紀の中頃に成立したものと判ぜられる。この時期に当たる『中宗実録』三十五年（一五四〇）十一月乙卯条に

韻府羣玉最要於述詩、合新增、而設局令能文堂上郎官主之、以大字刊出、七律五律以韻類聚、如雅音會編、亦設局刊出、則切於救時之急也。傳曰、啓意知道。漢吏之科、雖非祖宗之法、關於事大之事、則尚可設也。而況祖宗之舊章乎。韻府群玉雅音會編印出事、皆依啓。

という記事があって『韻府群玉』印出のことが見え、もし啓中「合新增」の語を、新輯の『韻府続編』を合する意に解し、啓中「以大字刊出」の語を、後述する乙亥字本刊行の意に解し得れば、[11] この時に初めて増続会通本が編まれたと考えられる。

これまでに伝本の調査を行った結果、本属本文には五種の刊本、即ち朝鮮乙亥字初刊本、同再刊本、戊申字刊本、日本の古活字刊本、整版本が知られる。さらにもう一種、同じ題目の朝鮮訓鍊都監字刊本を存するが、これはさらなる増編本に当たるため、本属の後に一項を設けて別に述べたい。

増續會通韻府群玉三八巻
元陰時夫編　陰中夫注　欠名増　明包瑜続
朝鮮刊（乙亥字初刊）
拠明弘治刊新増説文本・続編明正徳十二年刊本

本版については著録が全巻に及んでいないため、知り得た限りの実態を記すに止める。大概については、次の再刊本をも参照されたい（図版三、七）。

巻首題「增續會通韻府群玉巻之幾」、次行低二格「〈冬〈與鍾同用〉」等韻目、次行より本文。先ず大字単行にて「（冬）」等と字目を標し（同音字の首のみ墨囲）直下より注、小字双行。先ず反切（同音字首のみ）、次で字義を例証し（墨囲、説文のみ墨囲陰刻）（引書目前掲）（標出字「ー」格代号）、直下に大字単行にて「上冬」等熟字、直下より注、小字双行（体式同前、但し引書目後掲）（以上、新増説文本）。又大字単行にて「續（陰刻）」と標し、直下に「穴冬」等と熟字を示し、直下より注、小字双行（体式同前）（以上、続編）。又「活套（墨囲陽刻）」等と類目を標し注、小字双行。間々続編の補入あり。異音字間圏発隔、毎韻改行。

第一巻（五四張）上平声　一東
第二巻（四〇張）　二冬・三江
第三巻（九七張）　四支
第四巻（六一張）　五微・六魚
第五巻（七七張）　七虞
第六巻（存第一―七十三張）八齊―十灰
第七巻（五〇張）　十一眞
第八巻（六一張）　十二文・十三元
第九巻（五三張）　十四寒・十五刪
〔第十巻　下平声　一先〕
第十一巻（五五張）　二蕭―四豪
〔第十二巻　五歌・六麻〕
第十三巻（九五張）　七陽
〔第十四巻　八庚〕

第十五卷　（三〇張）　九青
第十六卷　（二五張）　十蒸
〔第十七卷　十一尤—　〕
〔第十八卷　—十五咸　〕
第十九卷　（九九張）　上声　一董
第二十卷　（八五張）　五尾—七麌
第二十一卷　（存第一—五十五張）八薺—十三阮
第二十二卷　（五八張）　十四旱—十八巧
第二十三卷　（六三張）　十九皓—二十一馬
〔第二十四卷　二十二養—　〕
〔第二十五卷　〕
〔第二十六卷　去声　—四寘　〕
第二十七卷　（五一張）　五未—七遇
第二十八卷　（四八張）　八霽—十卦
第二十九卷　（八一張）　十一隊—十六諫
〔第三十卷　十七霰—二十號　〕
第三十一卷　（七〇張）　二十一箇—二十四敬
第三十二卷　（四六張）　二十五徑—三十陷
〔第三十三卷　入声　一屋—　〕
〔第三十四卷　—八黠　〕
〔第三十五卷　〕
第三十六卷　（六八張）　九屑・十藥
第三十七卷　（六五張）　十一陌・十二錫
第三十八卷　（存第二—七十八張）十三職—十七洽

四周双辺（第二卷首二三・六×一六・五糎）毎半張一〇行、毎行一八字。乙亥字、稀に木活字を交える。また「續」「活套」等、本書に必要な特殊活字は木製と思われる。中縫部白口、双花口魚尾（不対向）間題「群玉幾」、下尾下張数。巻尾題「增續會通韻府群玉卷之幾」。

本版の第十、十二、十四、十七・十八、二十四—二十六、三十、三十三—五の十二巻については伝本に接していないため、存在を仮定して〔　〕内に記し、前後から推定される韻目を補った。また第六、二十一、三十八巻については、末尾を欠く伝本にしか接し得ていないため、存する張子の序数のみを記した。その限り、本版は三十八巻を擁し、分韻は礼部韻に従っているが、新増説文本二十巻に対し、洪武韻に従う『韻府続編』四十巻を合する都合上、対応関係を維持するため新たに三十八巻としたことが窺われる。

該本の新増説文本引用の部分に関して、上声七麌韻「堵」字より去声十七霰韻「霰」字の間、第二十巻より第二十九巻に至る間（底本の第十—十五巻）の本文にも「説文」の増入が見られるため、新増説文本の中でも明弘治刊本に拠っていることがわかる。また標目「續」以下の『韻府続編』引用の部分に関しては、入声の末尾まで続補を存することから、全四十巻本に拠っていることがわかる。ただ本属が『韻府続編』の記事全てを継承するかと言うとそうではなく、例えば第一巻の「同」字について『韻府続編』は「和同」以下「祖孫父子賢否不同」に至る五十二項目を挙げているが、このうち当該の乙亥字初刊本に引かれるものは、三乃至四字句の二十三例のみで、二字句と四字句の後半、五字以上の句は省かれており、詩韻の摘索に不向きな長語は採録されなかった。また『韻府続編』の四十巻本には広本と広略折衷本の二種があったけれども、本属がそのいずれに拠るかと言えば、例えば「同」字の項で、略本には省かれていた「不異尚同」等を存し、折衷本はこの箇所略本に当たるから、広本に拠っていることがわかる。さらに、『韻府続編』と本属続編部分を比べると、必ずしも本文の一致しない箇所が見受けられる。一例を挙げれば、第二巻「宗」字の項、『韻府続編』の正徳十二年刊本では（＜　＞小字、［　］墨囲陰刻）

（上略）**泰山岱宗**〈書、歳二月東巡守至岱宗［舜典］。〇五經通義曰、泰山一名岱宗。王者受命易姓、報功告代於岱宗。岱者代也。東方物之始交代之処也〉。**魂遊岱宗**〈遊岱之魂〉。**陰陽之宗**〈張衡為ー、郎顗処徴最密［方術傳叙］〉。**祈穀天宗**〈天子以元日祈谷于上帝。季冬天子乃蜡百神於南郊、為來年ーー於ーー。注、蜡、臘日祭也。百神、自神農至昆虫也。天宗、日月星辰之属也［月令］〉（下略）

とあったが、当該の乙亥字初刊本では

（上略）**泰山岱宗**〈（書）東巡狩至岱宗。（五經通義）泰山一名岱宗。岱者代也。東方物之始交代之處也〉。**魂遊岱宗**〈遊岱之魂〉。**陰陽之宗**〈張衡事見（後方術傳）〉。**祈穀天宗**〈季冬天子乃蜡百神於南郊、爲來年ーー於ーー。註、天宗、日月星辰之屬（月令）〉（下略）

とある。このうち先ず「泰山岱宗」の項で『五経通義』を引き、「陰陽之宗」で「方術傳」の標目を存し、「祈穀天宗」で「月令」注の引文を存することから、乙亥字初刊本の続編部分も、節略のない広本の系統に属することが確認される（262頁引文参照）。一方、両者は全く同一ではなく、傍線部のように元の記事を約

した箇所が認められる。これらは、形式的な相違を除けば一方行的な関係であり、別本に拠ると推定し得るような隔たりはないから、その限り四十巻広本に拠り、独自に取捨を加えたものと見ても支障がない。ただ一つ付け加えなければならないことは、現存する『韻府続編』の諸本に欠いていた去声震韻に関して、本属では当該の箇所に「續」の標示以下に本文を存するという点である。これは本属続編部分の底本が現存の形とは異なることを示唆するから、右に述べた熟字の採択や本文の節略に関しても、未知の底本に拠っている可能性がある。ここではそれが、『韻府続編』四十巻広本に属する本文であろうと指摘するに止めたい。

〈延世大学校中央図書館　貴五二二〉　三冊

存巻一―三

新補香色表紙（三三・〇×二二・二糎）仮綴、第三冊後補黄檗染卍繋文空押艶出表紙。第一巻第一―五張、第三巻第一―十九、八十五・六、八十八―九十七張欠。第一巻第五十四張（尾）を第二冊首に綴す。本文墨批点書入。

〈高麗大学校中央図書館晩松文庫　貴五五C〉　六冊

存巻四、八、十三、十五・十六、三十六・三十七

〈同　貴五五E〉　一三冊

存巻六、十一、十九―二十三、二十六―二十九、三十一、三十二、三十八

後補丁子染雷文繋蓮華唐草文空押艶出表紙（三一・〇×二五・二糎）左肩打付に「韻府羣玉〈巻之幾〉」と、右肩より声韻目を書す。後筆にて打付に「書」「詩義」「易乾」「礼義」等と題するもあり。表紙紙背「萬暦二年」（一五七四）と記す公印文書。改糸。本文紙背公印文書。首冊見返し書経の編目を列す。前副葉。毎冊一巻。第六巻首尾半葉、第二十一巻第五十五張後半以下、第三十八巻第七十八張後半以下を欠く。この本、毎葉書口を開き後から五経の注書を写してある（中書稿本）。第四巻首匡郭二三・七×一六・四糎。

朱墨標批点書入。整理番号貴五五Cの第六冊前後見返しに詩草の他、書込。またこの六冊は毎冊首尾に単辺方形陰刻「□全／氏□□」「□嚴／病□」朱印影、第二冊前見返しに単辺方形陽刻「□□□／□書堂」墨印影を存す。

〈同　　貴五五D〉　一冊

存巻三　朝鮮朴檜茂旧蔵

丁子染雷文繋蓮華唐草文空押艶出表紙（三〇・五×二〇・五糎）。後見返しに詩草。第三巻首匡郭二三・五×一六・三糎。首に単辺方形陽刻「錦城朴／氏檜茂／書畫寶」朱印影を存す。

朴檜茂、字仲植、号六友堂。潘南の人。朝鮮宣祖三十九年（一六〇六）司馬試に中り、仁祖朝の兵事に関与した。晩年は閉居し、顕宗七年（一六六六）に卒す。

〈同　　貴五五A〉　三冊

存巻五、七、十三　朝鮮朴檜茂旧蔵

丁子染雷文繋蓮華唐草文空押艶出表紙（三一・七×二〇・六糎）左肩打付に「韻府羣玉〈巻幾〉」と、右肩より声韻目を書す。首冊のみ左下方打付に「五」と書す。首冊後見返しに詩草。毎冊一巻。第五巻首匡郭二三・五×一六・三糎。朱標批句点、字目朱囲、別手墨批点書入、稀に欄上墨補注、字目標注鈔補。毎冊首に鼎形陽刻「六／友／堂」、単辺方形陽刻「朴檜／茂仲／植章」、同「錦城後／裔剛州／世居」朱印影、重鈐して単辺方形陽刻「間／閣」墨印影を存す。

前本（貴五五D）と旧蔵者を同じくするが、装訂や書入、印文の相違を考慮して僚冊とはしなかった。

〈同　　貴五五B〉　二冊

存巻二十、二十七・二十八　朝鮮権文海旧蔵

丁子染雷文繋蓮華唐草文空押艶出表紙（三二・〇×二〇・四糎）左肩打付に「續韻府羣玉〈幾〉」と、右肩より韻目を、右下方「共三十（七）」と書す。左下方に後筆にて巻数を記す。前後見返し詩草。第一冊に第二十巻、第二冊に第二十七・八巻を収む。第二十巻首匡郭二三・七×一六・五糎。本文墨批点、朱標号、欄上緑標注書入。毎冊首に単辺方形陽刻「襄陽／權氏」、同「文海／灝元」朱印影を存す。

権文海、字灝元、号静澗。醴泉の人。朝鮮中宗二十九年（一五三四）生、明宗十五年（一五四八）文科登第、左副承旨に至る。李滉門生。宣祖二十四年（一五九一）卒。権文海は本書を範として『大東韻府群玉』二十巻を編集しているから、[12]該本の伝存は、残本と雖も重要な意義を有する。

〈ソウル大学校奎章閣　中一六八二〉

欠巻二十三・二十四　巻一―七、十―二十二、二十五―三十八配朝鮮戊申字刊本　朝鮮弘文館　朝鮮総督府旧蔵

第八・九巻を存す（二六冊のうち二冊）。補配の都合から上辺に補紙を加え、料紙の高さを増してある。

第六冊首に単辺方形陰陽刻不明朱印影を存す。全体に関わる事項は戊申字刊本の節に後掲する。

同

朝鮮刊（乙亥字再刊）　翻乙亥字初刊本

前記乙亥字初刊本に対し、同種活字を用いて再刊した本も伝存する。[13] これは基本的に同款式の翻印本であるが、本文を仔細に検討すると異同も認められ、それが蓄積して、巻末までには排字や張数の異同となって現れる。これを翻印と称すべきかどうか判断に苦しむが、本文の継承関係が明らかであること、異同の程度が微少であることから、敢えて右のように標記した。ただ両者の異同を明らかにする必要と、初刊本には首尾の著録を欠いていたことから、以下の解説にはその詳細を再述したい（図版四、六、八）。

巻首題「増續會通韻府群玉卷之一（―三十八）（隔五格）上平（―入）聲（墨囲陰刻）／（以下五格低）晩學　陰　時夫　勁弦　編輯　／新呉陰　中夫　復春　編註　／青田　包瑜　希賢　續編（第一―四行は首のみ）」、次行低二格「一東〈獨用〉」等韻目、次行より本文。体式は初刊本に同じ。但し「續」の標目は墨囲陰刻の齣を用いる。

第一巻（五四張）　上平声　一東
第二巻（三九張）　二冬・三江
第三巻（九四張）　四支
第四巻（五八張）　五微・六魚
第五巻（七二張）　七虞
第六巻（六九張）　八齊―十灰
第七巻（四九張）　十一眞
第八巻（六一張）　十二文・十三元
第九巻（五三張）　十四寒・十五刪
第十巻（五三張）　下平声　一先
第十一巻（五五張）　二蕭―四豪
第十二巻（六〇張）　五歌・六麻
第十三巻（九五張）　七陽

第十四卷（七〇張）　八庚
第十五卷（三〇張）　九青
第十六卷（二五張）　十蒸
第十七卷（七四張）　十一尤
第十八卷（六〇張）　十二侵—十五咸
第十九卷（九九張）　上声　一董—四紙
第二十卷（八五張）　五尾—七麌
第二十一卷（五五張）　八薺—十三阮
第二十二卷（五九張）　十四旱—十八巧
第二十三卷（六三張）　十九皓—二十一馬
第二十四卷（四一張）　二十二養—二十四迥
第二十五卷（六四張）　二十五有—二十九豏
第二十六卷（六九張）　去声　一送—四寘
第二十七卷（五一張）　五未—七遇
第二十八卷（四八張）　八霽—十卦
第二十九卷（八一張）　十一隊—十六諫
第三十卷（五九張）　十七霰—二十號
第三十一卷（七〇張）　二十一箇—二十四敬
第三十二卷（四六張）　二十五徑—三十陷
第三十三卷（七七張）　入声　一屋・二沃
第三十四卷（六一張）　三覺—五物
第三十五卷（四〇張）　六月—八黠
第三十六卷（六八張）　九屑・十藥
第三十七卷（六四張）　十一陌・十二錫
第三十八卷（七八張）　十三職—十七洽

四周双辺（二三・五×一六・一糎）毎半張一〇行、毎行一八字。乙亥字、「續」「活套」等標目の特殊活字は木製であるが、初刊本と字様が異なり、新たに製作されたものと思われる。中縫部白口、双花口魚尾（不対向）問題「群玉幾」、下尾下張数。巻尾題「增續會通韻府群玉卷之幾（〈終〉）」。

右に列挙したように、該本も三十八巻からなり、分巻の様子は初刊本と変わりがない。ただ各巻の張数を比較すると、屡々初刊本と異なっていることが指摘される。その相違はいずれも、初刊本に比べ再刊本が数張少ないという関係にあり、相違の分布から見ると、主として首尾の数巻に現れている。これら張数の相違は本文の異同に由来する。両本の異同について一例を挙げると、第二巻「宗」字の項に、初刊本では

（上略）**泰山岱宗**〈［書］東巡狩至岱宗。［五經通義］泰山一名岱宗。岱者代也。東方物之始交代之處也〉。**魂遊岱宗**〈遊岱之魂〉。**陰陽之宗**〈張衡事見［後方術傳］〉。**祈穀天宗**〈季冬天子乃蜡百神於南郊、爲來年ーー於ーー。註、天宗、日月星辰之屬［月令］〉（下略）

とあったのに対し、再刊本では

（上略）**泰山岱宗**〈東巡狩至岱宗［書］。ーー一名ーー。岱者代也。東方物之始交代之處也［五經通義］〉。**祈穀天宗**〈季冬天子乃蜡百神於南郊、爲來年ーー於ーー。［註］天宗、日月星辰之屬［月令］〉（下略）

とある。この両本には次のような違いがある。先ず「泰山岱宗」の項目について、原典を示す「書」「五經通義」の標目が、初刊本では引文の前に置かれるのに対し、再刊本では後に附されている。また初刊本では、標出字「泰山」「岱宗」に当たる箇所に本来の文字が残されているのに対し、再刊本では「ーー」と代号されている。この二点について考えると、引書標目を後掲し、また標出字を代号する再刊本の形が、本書通用の表記であり、一貫した形式と言うことができる。これに加え、初刊本に存する「魂遊岱宗」「陰陽之宗」の二項を、再刊本には全く欠いている。この箇所、元の『韻府続編』ではどうかと見れば、262頁引用の如く広略両本とも二項を存し、節略を伴いつつ引用した初刊本の方が『韻府続編』に近い。この二項について、元の形によく注意すると、「魂遊岱宗」は、注には「遊岱之魂」とあるばかりで原拠がわからないし、抑も「魂遊岱宗」の例句があるのかどうかも不明である。[14]「陰陽之宗」は、注中の代号「ー」格が標出字のどの文字を指して句を成すのかわからない。[15]

つまりこの二項では『韻府続編』の表記自体に問題があり、標出の字句は得られても十分に例証を得ることができない。「泰山岱宗」について、再刊本では『韻府続編』の形に反し表記の統一が図られていることを勘案すると、再刊本は本文整理の進んだ形であって、参考に堪えない項目は除いたと考えるのが穏当と言えよう。抑も初刊本と再刊本の先後関係について、自明のこととして述べて来たが、実はこのような本文異同によって、その先後が推定されるのである。

両本の先後について、上述のこととは別に考えるべき材料がある。増続会通本第三巻「箕」字の項に関して、初刊本では第八十六張後半の第五行から本文が始まるけれども、再刊本には「箕」以前のいくつかの項目を存しないため本文が二行ほど少

なく、「箕」は同第三行から始まっている。こうした異同の情況は上述した第二巻の場合と変わらないが、欄上の標字注記「箕」に注意すると、初刊本では正しく第五行に掛けられているのに対し、再刊本では本文開始より二行後、つまり初刊本と同じ第五行に置かれている（図版七、八）。瑣末な事柄ではあるが、これをもし、一方が『韻府続編』に基づいて補入した結果と考えれば、他方は補入後の開始行に当たる第五行に偶然に誤植していたということになるが、そのような解釈は極めて不自然である。これはやはり、再刊本が『韻府続編』に由来する不確実な項目を整理刪去した結果、本文が圧縮されて二行を減じたが、標注には校正が及ばず、初刊本と同じ位置にそのまま残されたと見るべきであろう。

右のように考えると、乙亥字初刊本と同再刊本間の本文異同は、形式的修整、不明瞭な記事の除去といった、再刊時に於ける本文の整理に起因するものであり、これらは大抵、本文の圧縮に結びついているようである。前に張数の微減として捉えられた現象は、この種の本文整訂に依っていると認められ、初刊本と再刊本とで張数の等しい巻々に於いても、数行の減少を呈している場合が、第一巻以下に屢々見受けられる。

〈建仁寺両足院　第九十四番函〉　三七冊

朝鮮明隆慶二年（一五六八）内賜安方慶

後補淡茶色卍繋蓮華唐草文空押艶出表紙（三二・五×二〇・六糎）。天地截断。首冊前見返しに内賜記を存し、低二格諱字双擡にて「隆慶二年十月　日／（双擡）内賜行永興府都護使安方慶増續韻府／羣玉一件／（以下双擡）命除謝／恩／（低六格）左承旨〈臣〉尹（花押）」と書し、巻首に鈐し単辺方形陽刻「宣賜／之記」朱印影あり（図版五、六）。第十五・六巻を一冊とする他は毎冊一巻。毎冊本文料紙、間々印面中に横接し、後世その下半を脱して鈔補を加えた箇所がある。また第一巻を中心に、本文中の文字を刪去し紙背より紙片を貼附、同種活字にて印し校改した箇所が見受けられる（後述）。

間々江戸初期の邦人の朱筆にて句竪点批圏と校注を加え、稀に同朱墨補注標注書入。朱点朱引は釈家の経文に多い。巻首に印影刪去の痕跡あり。[16]

安方慶、字善応、号炙背軒。竹山の人。朝鮮中宗八年（一五一三）生、同三十五年に生員より大科及第、明宗朝に累進し、内職では承政院同副承旨工曹参議に至る。晩年出て咸鏡道の永興都護府使に任じ、卒去の前年に当たる宣祖元年（明隆慶二年）

に内府より件の書を賜った。この内賜記により、乙亥字再刊本は、宣祖元年をあまり溯らない時点で印出されたと推知される。

〈高麗大学校中央図書館薪庵文庫　貴五五〉　一冊

存巻十一

丁子染雷文繫唐草文空押艶出表紙（三三・七×二〇・九糎）左肩打付に「□□〈巻之幾〉」等と書するも不分明。見返し詩草。本文中印字校改あり。第十一巻首匡郭二三・六×一六・三糎。首に単辺円形陽刻不明朱印影を存す。稀に墨批点、欄上補注。

〈延世大学校中央図書館　〇三一・〇一〉

巻一―二十、二十三―三十八配朝鮮戊申字刊本

朝鮮李時発旧蔵

第二十一・二十二巻を存す（二四冊のうち二冊）。丁子染雷文繫蓮華文空押艶出表紙（三一・四×二〇・四糎）左肩打付に「韻府羣玉〈幾〉」と書し、右肩より細筆にて韻目を列記す。毎冊一巻。全体に関わる事項は戊申字刊本の部に後掲する。毎冊首に単辺方形陰刻「月城後／人李時／發養久」朱印影を存す。

李時発、字養久、号碧梧。慶州の人（月城は慶州の古名）。朝鮮宣祖二年（一五六九）生、同二十二年文科登第。外職兵事に携わること多く、三南道検察使に終わる。仁祖四年（一六二六）卒、謚中翼。

乙亥字刊本二種の伝存情況を見ると、何名かの旧蔵者が判明する。初刊本では朴檜茂、権文海の名を挙げることができ、特に後者は『大東韻府群玉』の編者でありその意味から注目すべきであるが、権は明宗、宣祖朝の廷臣であり、該本の印出時期を十六世紀の半ばとする推量をも支持しよう。また再刊本では安方慶、李時発の名を得るけれども、前者の旧蔵は内賜記によって判明する事柄であり、これによって、該本の宣祖朝初年に印出されたことが知られる。

同

朝鮮明崇禎再丁酉（一七一七）刊（戊申字、校書館）

翻乙亥字再刊本

乙亥字再刊本の翻印であり行款排字も同じ、但し巻首題字

「増」「羣」、首題下声目擡一格等の小異がある（図版十一）。第二十二巻は五十八張で底本よりも一張を減ずるが、これは別張にあった尾題を本文末行下に追い込んだからである。

単辺（二五・二×一七・〇糎）、四鑄甲寅字に当たる戊申字を以て刊行した。中縫部、双花口魚尾（対向）。

末尾に南秀文の旧跋を附印（一張）。首低二格題「韻府羣玉跋」、次行より本文。前出（三稿205頁）朝鮮明正統二年跋江陵原州刊本と同文であるが、これには「宣統乙卯秋〈即　世宗／十七年〉」の双行注がある。

右の末、改行低一格にて「崇禎紀元後再丁酉八月　日校書館重印」記を存す。「再丁酉」は朝鮮粛宗四十三、清康熙五十六年（一七一七）に該当する。

戊申字本には、どの伝本も同じ箇所に同料同字の貼紙印字校改があり、第二巻第七張第六・七行、第五巻第十張第一・二行、第十三巻第二十八張第三行等はほぼ全行を改めてある。

〈ソウル大学校奎章閣　中一六八二〉　二六冊

欠巻二十三・二十四　巻八・九配朝鮮乙亥字初刊本

朝鮮弘文館　朝鮮総督府旧蔵

後補淡黄色卍繋文空押艶出表紙（三二一・四×二一・三糎）左肩打付に「増續會通韻府羣玉〈幾〉」と、右下方綫外「共二十七」と書す。第一・二、六・七、十・十一、十四・五、十六・七、二十一・二、二十七・八、三十・三十一、三十二・三、三十四・五巻を各一冊に収める他は毎冊一巻。

毎冊首に単辺方形陽刻「弘文館（楷書）」、同「帝室／圖書／之章」、同「朝鮮総／督府圖／書之印（楷書）」、同「京城帝／國大學／圖書章」（大小二種）朱印影を存す。

〈延世大学校中央図書館　〇三一・〇一〉　二四冊

欠巻十九、三十五・三十六　巻二十一・二十二配朝鮮乙亥字再刊本　朝鮮李聖肇旧蔵

黄檗染卍繋文空押艶出表紙（三二一・一×二一・一糎）左肩打付に「韻府羣玉〈幾〉」と、右下方綫外に「共二十五」と書す。墨標圏標点、首のみ藍字目標圏書入。第十、十二―四、二十、二十六、三十一巻首に単辺方形陰陽刻「全義李／氏聖肇／□□印」朱印影を存す。

李聖肇、字時仲。全義の人。朝鮮顕宗三年（一六六二）生、粛宗十九年（一六九三）文科登第、承旨府尹に至る。

〈韓国国立中央図書館　古三三三三四・一八〉　三冊

存巻一・二、二十九、三十八　巻三十八配同刊本

丁子染蓮華文空押艶出表紙（三四・〇×二一・九糎）左肩打付に「韻府羣玉幾」と、右肩より声韻目、右下方綫外に「共二十六」と書す。首冊前見返しに表紙別筆にて「癸酉春自丹邱持来二十六巻／内六巻落在二十巻」墨書。第一・二巻を一冊とする他は毎冊一巻。

欄上又別手墨字目標柱書入。毎冊首に「□心金／相良□／輔之印」朱印影を存す。配本次掲。

〈韓国国立中央図書館　古三三三三四・一八〉

巻一・二、二十九配同刊本

第三十八巻を存す（三冊のうち一冊）。丁子染宝繋文空押艶出表紙（三五・〇×二二・一糎）左肩打付に「韻府羣玉〈幾〉」と、右肩より韻目を書す。紙背官文書。

末尾に「廣原冊」墨識。詳細前掲。

〈韓国精神文化研究院蔵書閣　K三・六八五〉　二八冊

李王家旧蔵

丁子染亀甲繋文空押艶出表紙（三二・〇×二一・〇糎）左肩打付に「韻府羣玉〈幾〉」と書し、右肩より同筆にて韻目を列記す。改糸。見返し新補。

墨筆にて欄上補注、本文批点批圏書入。首に単辺円形陽刻「呉」、及辺瓢形陽刻不明茶印影、単辺方形陽刻「李王家／圖書之／章」朱印影を存す。

〈延世大学校中央図書館　〇三一・〇一〉　一七冊

欠巻三・四、八、十二、十五、二十　巻十一配同刊本

丁子染水魚鳥花文空押艶出表紙（三二・七×二一・五糎）左肩打付に「韻府羣玉幾」と、右肩より韻目を書す。紙背官文書。破損修補。首冊、剥離した前見返し前半に「存十七巻」墨識、後半に同墨にて陰幼遇並に銭全容の小伝を書す。紙背詩草。毎冊一巻。第一巻第一―三十八、四十一、四十三張、第十七巻第一張欠。

首に同墨「首三十八板落　〈又序文落〉」識語、尾冊見返しに「存十七冊」識語。墨筆にて欄上校注補注、本文標点（藍黄茶筆を交う）書入。配本次掲。

〈延世大学校中央図書館　〇三一・〇一〉

欠巻三・四、八、十二、十五、二十　巻一・二、五―十、十三・四、十六―九二十―二十三配同刊本

第十一巻を存す（一七冊のうち一冊）。新補淡黄色菱花文空押艶出表紙（三二・八×二一・一糎）、次で丁子染雷文繋蓮華文空押艶出表紙。見返し詩草。

首に「散失於回禄中只遺此一巻而此冊七世傳来幸敬而勿毀焉」墨識、尾に「冊主常主覧者為主／誰為冊主我然其主／（低三格）吟隠書」墨識、鐘形中単辺方形陽刻「□山／後人」、首に鼎形中単辺方形陽刻「守／拙」墨印影を存す。

〈The Library of Congress　C236/Y.58.3〉　三六冊

後補縹色亀甲文空押艶出表紙（三三・七×二二・〇糎）左肩打付に「韻府羣玉幾」と、右下方綫外「共三十六」と書す。紙背「通鑑巻二十一（題柱）」朝鮮整版本。第一・二、十五・十六巻を各一冊とする他は毎冊一巻。旧跋欠。

毎張版心上貼紙藍筆韻目標注、欄上墨字目標注書入。毎冊首に単辺方形陽刻「西／原」、無辺方形陰刻「韓氏／百衍」、単辺方形陽刻「孝／家」茶印影、又は同「無盡／臧」、同「吟壺／在喜／氣懽／喜酒」、無辺方形陰刻「聖／氣」朱印影を存す。

〈台北市・国家図書館　三〇九・〇七九四〇〉　二五冊

巻十八配同刊本

黄檗染蓮華唐草文空押艶出表紙（三四・一×二一・四糎）左肩打付に「韻府羣玉幾」と、右肩より韻目、右下方綫外「共廿五」と書す。紙背「大學諺解（題柱）」漢字諺文交り、一〇行一九字白口双花口魚尾（向対）問題並張数の朝鮮版。同版本附巻と思しき「讀中庸法」「讀大學法」をも認む。第一・二、四・五、六・七、八・九、十・十一、十四・五、十六・七、二十一・二、二十三・四、二十七・八、三十・三十一、三十二・三、三十四・五巻を各一冊に収める他は毎冊一巻。

毎張版心上朱韻目標注、本文朱標点批点批圏、傍線、校注書入、間々欄上朱墨字目標注鈔補、別手にて第二冊前後見返し、本文欄上朱墨補注書入。毎冊首及び第二、十二冊尾に単辺方形陽刻「聽興李／觀喆國／士甫印」朱印影を存す。配本次掲。

〈台北市・国家図書館　三〇九・〇七九四〇〉

巻一―十七、十九―三十八配同刊本　朝鮮洪象漢旧蔵

第十八巻を存す（二五冊のうち一冊）。丁子染雷文繋蓮華唐草文空押艶出表紙（三四・〇×二一・四糎）左肩打付に「増續韻府羣玉十三」と、右肩より声韻目、右下方綫外「共二十□」と書す。後表紙背官印官文書、

首に単辺方形陽刻「豐山洪／氏象漢／雲章印」朱印影を存す。

洪象漢、字雲章。豊山の人。朝鮮粛宗二十七年（一七〇一）生、英祖十一年（一七三五）文科登第、官吏曹参判都承旨に至る。同四十五年卒、諡靖忠。

右の他、同印と思われる伝本に高麗大学校中央図書館蔵三冊本（A12/A8C）、同一冊本（A12/A8E）がある。

本属朝鮮本三種の伝存について、韓国での調査を尽していないが、その限り海外への伝存は稀で、米国・台湾所在の戊申字本も近代の流出と考えられる。それ以前ということになると、わが国に伝来した建仁寺両足院蔵乙亥字再刊の一本を見るのみであるが、しかしこの江戸初に於ける本属伝来の僅かな証跡は、次に解説する日本の翻印本及びその覆刻本を見る時、本文の連属を示す傍証として、両朝を結ぶ枢要の位置を占めていることが知られる。

同

日本寛永二年（一六二五）刊（古活字　京・田中長左衛門）

翻朝鮮乙亥字再刊本

朝鮮朝の戊申字による翻印に先立ち、日本でも乙亥字再刊本の翻印が行われた。款式はほぼ完全に底本のままであるが、首題下の声目牌記を上下平声及び上声に欠き、巻首第二―四行の署名が下辺に接する等の小異がある（図版九）。また第二十二巻を五十八張、第二十八巻を四十七張とし、それぞれ底本に対して一張を減じているが、これは両者とも、底本では尾題を別張としていたのを、該本では本文末行下に追い込んだ結果である。このために後者の第二十八巻尾に於いては題目が節略され、底本別張に存した欄上「呰」字標注が失われた。微細な事柄ではあるが、刊行主体が移ったことによる変化として注目される。

題簽、双辺「増續韻府〈声目／幾〉（毎冊同版、双行部分のみ活字にて組み換え）」。

四周双辺（二二・〇×一六・三糎）有界、中縫部中黒口（接内周）双花口魚尾（向対）。第二十二巻第三十五張の張数を「卅二」と誤り、鈔補して「卅五」と改む。

巻尾題「增續會通韻府群玉巻之幾終（大尾）」。
大尾題後隔一行低一格半にて「寛永二年〈乙／丑〉初春吉日／（低四格）洛陽玉屋町田中長左衛門開刊」記あり。

該本の字様について、底本の乙亥字に比べると些か和様を帯び柔弱の印象を与えるものの、基本的には底本を模していることが窺われる。このことから、田中長左衛門は本書の翻印を契機として木活字を製作した可能性がある。尚、該本は柱題の植字の傾きにより四台の匡版と認められる。

第一、三十八巻の尾題について、伝本によって微細の変異が認められる。即ち第一巻尾題末に「終」字を植えるものと欠くものがあり、第三十八巻尾題後「大尾」二字を下辺より一格擡するものと下辺まで低するものがあって、両件の組合せ四通りの全てに実例がある。例の数も調査の伝本を見る限りでは偏差がなく、強いて挙げれば「終」有って「大尾」を擡する伝本が比較的多い。しかし印出綴合の手順によってどの組合せも可能となるから、これによって先後関係を定めることはできない。この点は、各伝本の項に尾題有（無）「終」擡（低）「大尾」等と略記して参考するに止めたい。

田中長左衛門は、寛永から延宝の間に出版の事跡が認められる京都の書肆で、寛永元年（一六二四）刊『祥刑要覧』、同六年刊『本朝文粋』、同八年刊『新刊多識編』、寛文八年（一六六八）刊『儒仏合編』、延宝三年（一六七五）刊『周張二子書』、刊年不明『国語』の刊記にその名が見える。後掲の伝本中、刊記後に「正／重」印記を鈐するものがあり、これは『本朝文粋』の伝本にも同種の印影が認められるから、名を正重と称したと思われる。また上記の諸本も、寛永八年と寛文八年の間に三十七年の隔たりがあるから、前後同一人でない可能性がある。このうち『祥刑要覧』『本朝文粋』のみが古活字本で、これらは本書と同種の活字によって印出されている。前者は本書の刊行に先立つものの、乙亥字との関係は知られないし、刊行の規模から言って、やはり字種の多様な本書乙亥字本を基に活字を作り、両書印出の作業は並行して為され、本書は遅れて完成されたのではなかろうか。ともかくも本書の翻印によって木活字印刷の準備が整い、『本朝文粋』の刊行に繋がった。しかしこの頃から日本の営利出版は整版を主体とする方向に傾くこととなり、この活字がさらに印本を生むことはなかった。ただ本書と『祥刑要覧』『本朝文粋』のいずれも整版附訓の覆刻本を生じていることは、[17]古活字本刊行の意義をよく体現している。

該本の本文について、次のような点に注意を要する。該本と乙亥字再刊本の本文を審さに比較した場合、基本的には一致しつつ、特徴的な異同をも存することに気付かされる。それは乙亥字本中、元の料紙を切り抜き紙背から同種活字にて印せる紙片を貼付した箇所、つまり一度印出した後に校改した箇所に於いて、古活字本には必ず異文を存する、というものである。この異同は、古活字本が校改前の本文に拠っていることを容易に想像させるが、乙亥字再刊本の現存本に未校改のものが発見されないために、これを例証することができない。ただ本文の総体に於いては排字の合致しない乙亥字初刊本の該当箇所を見ると、ほとんどの場合、古活字本と同文になっている。以下、校改の多い第一巻中の数例を挙げる（［　］貼紙校改部）。

（張・行）　（乙亥字初刊本）　（同再刊本）　（古活字本）

10後10右　孔子病商瞿卜期日中　［商］瞿　商瞿

19前3左　八十一御妾一宮　御［妻］　御妾

29後8左　豈遇ーーー邪　［打頭風］邪　ーーー邪

36前4左　後世無叛由ーー　由［杜公］　由ーー

このうち第一の例は『論衡』別通篇の字句であり、商瞿は人の名であって「商」が正文である。第二の例は『周礼』天官冢宰「九嬪」鄭玄注「昏義曰、古者天子后立六宮、三夫人、九嬪、二十七世婦、八十一御妻」を節略した先行類書の記事を引くもので「妻」が正文である。前二例は原拠に照らして乙亥字再刊本が正文と認められ、古活字本と乙亥字初刊本は校改前の文字を残していると見られる。また後二例は代号符の使用に関する異同と見られるが、第三の例は標字「怕打頭風」、第四の例は「人稱羊公」にて、乙亥字初刊本及び古活字本の形では本文が正しく復原されないため、乙亥字再刊本の方が整った形と考えられる。古活字本と乙亥字初刊本は必ずしも同一というわけではないので、その例も挙げておく。

（張・行）　（乙亥字初刊本）　（同再刊本）　（古活字本）

41後10左　此ー但是樊龍　但ー［ーー］　但ー樊龍

52前5左　食采ー川因氏　［通］川　氏川

前例の標字は「官是樊龍」、後例は「通（姓氏）」であり、前例では、標出の四字を代号する方向で考えれば乙亥字初刊本、古活字本、乙亥字再刊本の順に整えられたと見られ、後例では、初刊本の形は必ずしも間違っておらず、古活字本の形を前提として再刊本の校改が為されたと考えられる。このような例を見ると、乙亥字本の再刊時には印出前と印出後の二段階の校正が

加わっており、古活字本はその第一段校正後、即ち初印時の本文を反映しているということがわかる。これを要するに、日本の古活字本は、朝鮮乙亥字再刊初印未校改本を翻印したものということになる。乙亥字再刊本と古活字本とはほぼ同一の本文を有するとは言え、厳密には少しく異なる位相を今日に伝えているのである。なお例証は省するが、前出の戊申字刊本は乙亥字再刊校改後の本文を反映する。

〈陽明文庫　一六三・一〉　三八冊

丹表紙（三〇・九×二一・七糎）左肩打付に「増續韻府巻之幾〈声目〉」と、右肩より韻目を書す。押し八双。毎冊一巻。第十八巻第四十二・四十一張錯綴。尾題有「終」擡「大尾」。極稀に朱筆を以て竪句点を加えてある。

該本の料紙は楮打紙にて、その意味では以下の伝本と変わりないが、この本のみは特に精白で平滑化も徹底されている。また明らかに原装ながら表紙に文様の空押しなく、打付書の題目等は他に例を見ない。蓋し献上本の類であろう。

〈神宮文庫　三・二二四四〉　三七冊

欠巻五　新宮城主水野忠央旧蔵

丹雷文繋菊花文空押艶出表紙（二九・〇×二〇・六糎）左肩題簽を貼布し「増續韻府」と書す。改糸。毎冊一巻。尾題無「終」擡「大尾」。刊記次行下に無辺方牌中円形陽刻「正／重」墨印影を存す。

朱竪点、朱墨校注書入、欄上墨字目標注鈔補。縹色等不審紙。毎冊首に単辺方形陽刻「新宮城書藏（楷書）」朱印影（水野忠央所用）、双辺方形陽刻「林崎文庫（楷書）」朱印影を存す。

〈京都大学附属図書館谷村文庫　四・八七・イ・三〉　三〇冊

後補淡茶色雷文繋雨龍文空押艶出表紙（二九・六×二〇・九糎）右肩に小簽を貼布し声韻目巻序数を書す。押し八双。改糸。虫損修補。第七・八、九・十、十五・六、二十四・五、二十七・八、三十一・二、三十四・五巻を各一冊とする他は毎冊一巻。第六巻第五十五張欠、鈔補。第三十六巻第六十六張天地錯綴。尾題有「終」低「大尾」。第一・二巻尾に双辺鼎形陽刻「田仲／長左／衛門」墨印影あり、大尾、前本に同じき「正／重」墨印影あり。

朱合竪句批点批圏、欠字鈔補、稀に墨校注、別朱欄上字目標注

書入。淡茶、代赭色不審紙。首、第十九巻尾、第二十巻首、尾に無辺方形陰刻「全／派」朱印影を存す。

〈国立国会図書館　WA七・八一〉　三八冊

濃縹色雷文繋雨龍文空押艶出表紙（二九・一×二〇・六糎）左肩摺り題簽貼附。改糸。虫損修補。見返し間々新補。毎冊一巻。尾題無「終」低「大尾」。第一巻尾に同前「田仲／長左／衛門」墨印影を存す。

毎冊首に単辺方形陽刻「明治九年文部省交付」、双辺円形陽刻「TOKIO LIBRARY／東京書籍館（下略）」朱印影を存す。

〈盛岡市立中央公民館郷土資料室　和四三八九〉　三八冊

盛岡藩主南部家旧蔵

丹雷文繋蓮華文空押艶出表紙（二八・八×二〇・九糎）左肩摺り題簽貼附、右肩より打付に韻目を書す。毎冊一巻。尾題無「終」低「大尾」。第一巻尾「田仲／長左／衛門」墨印影を存す。第十三巻首朱句点書入。尾に「右群玉韻府全部三十八巻志春軒之流求之皆享保十三〈申〉初冬吉旦」墨識。毎冊首に雷文辺欄方形陽刻「奥御／藏書」朱印影（南部家所用）を存す。

〈京都府立総合資料館　特〇五〇・三一〉　三八冊

丹雷文繋雨龍文空押艶出表紙（二八・七×二一・三糎）左肩摺り題簽貼布、題目下方に韻目墨書。中央に小簽を貼布し「雲」と書す。毎冊一巻。尾題有「終」低「大尾」。

稀に欄下墨校注、極稀に朱批点書入。第三巻第二十八・九張間に表紙別筆にて「雲之箱　／の第卅三号」墨書剪紙、第六巻第二十・二十一張間に双辺陰刻「後漢書」題簽を差挟む。毎冊首に双辺円形有界陽刻大「江／南」朱印影を存す。

〈陽明文庫　ソ・六〉　三八冊

渋引表紙（二八・八×二一・一糎）左肩摺り題簽貼附。右肩より打付に近衛尚嗣の筆にて[18]韻目を列す。押し八双。毎冊一巻。尾題有「終」擡「大尾」。

僅かに細簽を貼附し書入を施した箇所が見出される。首に単辺方形陽刻「近衛藏」朱印影を存す。

〈龍門文庫　七―七・八・五〇八〉　三八冊

今出川家旧蔵

渋引表紙（二八・九×二一・二糎）左肩摺り題簽貼附。押し八

双。毎冊前見返しに韻目張数を書す（間々欠く）。毎冊一巻。第三十巻第五十三張欠。尾題無「終」低「大尾」。

縹色不審紙。毎冊首に単辺方形陽刻「今出／河／藏書」朱印影を存す。

〈国立公文書館内閣文庫　別二八・二〉　三八冊

美濃立政寺旧蔵

後補淡茶色表紙（二九・二×二〇・六糎）左肩打付に「増續韻府　幾」と書す。縹色包角。虫損修補。毎冊一巻。第六巻第五十五張欠、鈔補。尾題有「終」擡「大尾」。

毎冊首に無辺方形陰刻不明墨印影に重鈐して単辺方形陽刻「亀甲山／立政寺」墨印影、無辺方形陰刻不明朱印影に重鈐して単辺小判形陽刻「立政寺常住」朱印影を存す。

〈早稲田大学図書館　イ一七・五一三〉　三八冊

渋引表紙（二八・六×二〇・九糎）左肩摺り題簽貼附。右肩より打付に声韻目を書す。押し八双。毎冊一巻。尾題有「終」擡「大尾」。

欄上墨字目標注鈔補、縹色不審紙（共に上声以下欠）。夾紙墨補注書入。

〈北京大学図書館（マイクロフィルム）二八六六〉　三八冊

表紙無文、左肩摺り題簽貼附。毎冊一巻。尾題有「終」低「大尾」。

欄上墨字目標注鈔補。前見返し中央に単辺方形陽刻不明印影に重鈐して単辺方形陽刻有界「（上層毎字改行）子孫永保／（下層）共〔三十八〕／雲煙家／藏書記／（楷書）（〔　〕内手鈔）」印影（安西雲煙所用）を存す。

〈天理大学附属天理図書館　八二一・イ五五〉　二一冊

〈家蔵〉　二冊

欠巻三、六、十二、十九、二十二、二十四、二十八、三十、三十三―三十八　大通宗密旧蔵

縹色雷文繋蓮華唐草文空押艶出表紙（二八・五×二〇・四糎）左肩摺り題簽貼附。右肩打付に韻目を書す。押し八双。前後副葉。第十五・六巻を一冊とする他は毎冊一巻。尾題有「終」。極稀に江戸初朱竪句点、同墨欄上補注、欄上後墨補注（広韻、朱子語類、通鑑注、字典、明史、明紀事本末、香祖筆記、唐詩

鼓吹、清異録等引証）、下小口貼紙補注（解題及び参同契引証）書入。毎冊首尾に短編円形陽刻「大／通」、毎冊首に無辺座布団形陽刻「宗／密」朱印影、第一、三十一・二巻首に無辺方形陰刻「白雲堂／圖書記」、単辺方形陽刻「古家實三／愛藏之書」朱印影、天理分の第二十三巻首に無辺方形陰刻「賓／南」、単辺楕円形陽刻「殘花書屋（行書）」、同「戸川氏／藏書記」朱印影（戸川浜男所用）、家蔵分の第一・三十二巻前見返しに単辺方形陽刻「鯨舎／藏記」朱印影を存す。[19]

〈鶴岡市立図書館　字書之部第五函〉　三七冊

莊内藩校致道館旧蔵

栗皮表紙（三〇・四×二一・七糎）左肩摺り題簽貼附。右肩より打付に声韻目を書す。押し八双。改糸、一部虫損修補。第十五・六巻を一冊とする他は毎冊一巻。尾題有「終」擡「大尾」。朱筆にて毎韻首張版心上標柱（上声紫色）並に韻目標注、本文稀に竪句点、句圏、返り点、送り仮名（上声以下欠）書入。欄上墨字目標注鈔補。極稀に淡茶色不審紙。首に単辺方形陽刻「芥／舟」朱印影、毎冊首に「致道館／藏書印」朱印影を存す。

〈県立長野図書館　八二一・二一一〉　一六冊

後補淡茶色卍繋蓮華唐草文空押艶出表紙（二八・二×一九・四糎）。改糸、虫損修補。見返し新補。前副葉。第七―九、十―十二、十五―七、二十六―八、三十一―三、三十四―六を各一冊に収める他は毎冊二巻。第三巻第五十二、五十八張鈔補。尾題無「終」擡「大尾」。

毎韻首張版心上朱標柱（不全）、欄上朱墨字目標注鈔補校改、極稀に墨校注補注書入。縹色不審紙。毎冊前副葉及び冊首に双辺方形陽刻「岩下／家印」朱印影を存す。

〈東北大学附属図書館狩野文庫　阿一〇―一一・一四五〉　三八冊

武蔵瑞聖寺旧蔵、鉄牛道機手沢

後補渋引漉目表紙（二八・七×二〇・〇糎）左肩打付に「韻府群玉　　巻之幾」と書す。前副葉。毎冊一巻。第十九巻第一張欠。尾題無「終」低「大尾」。

首のみ欄上墨字目標注鈔補。稀に江戸初朱筆にて批圏竪句点、返り点、連合符、送り仮名（上声以下欠）、毎韻首張版心上朱標柱書入。香色不審紙。毎冊前副葉に単辺方形陽刻「了翁上座請大蔵及百家／書置之武州紫雲山／我微笑塔院庖府中永／為學

者不敢許出院内／當山二世鐵牛機謹誌（楷書）」（紫雲山瑞聖寺鉄牛道機所用）、毎冊首に無辺方形陰刻「臨濟／三十六世」（同）、単辺方形陽刻「鐵牛／機印」朱印影を存す。第二十巻第十二、三張間に末尾題「□大史編輯國朝獻朝録巻之十八〈終〉」明末刊本残葉を差挟む。

〈東北大学附属図書館　八二一・五八　八二一・一一八〉　一六冊

存巻一―五、七―十一、二十三―二十八

後補香色雷文繋蓮華唐草文空押艶出表紙（二八・七×二一・一糎）。改糸。毎冊一巻。尾題有「終」。

間々欄上墨字目標注鈔補。第一巻尾に寛永二年田中長左衛門開刊記を鈔補、直下に双辺方形陽刻不明小朱印影、毎冊首に単辺方形陽刻「宮城中／學校圖／書之印」朱印影を存す。

〈亀岡市文化資料館　第二十一箱〉　三八冊

亀山藩校邁訓堂旧蔵

丹雷文繋雨龍文空押艶出表紙（二九・〇×二一・三糎）左肩摺り題簽貼附、右肩より打付に韻目を書す。毎冊一巻。第六巻第六十五張欠、延宝三年刊本補配。尾題無「終」擡「大尾」。

欄上朱墨字目標注鈔補、毎韻首張版心上朱標柱、朱校注書入。黄檗染附箋。毎冊首に単辺方形陽刻「尊陽求本」朱印影、同「亀山／學校／之記」朱印影を存す。

〈刈谷市中央図書館村上文庫　一二三三五〉　合一六冊

元治元年（一八六四）村上蓬廬修理識語並に外題

後補濃縹色菱花繋文空押表紙（二八・〇×一九・六糎）左肩単辺摺り枠題簽を貼布し村上蓬廬の筆にて「増續會通韻府群玉（隔三格）韻目」と書す。五針眼、改糸、合装。天地截断。毎冊二乃至三巻。第二十九巻第二十八張欠、第二十七、六十八、二十九張と錯綴。第六十八張は本来の位置にも重綴。第三十五巻第十五張重綴。尾題無「終」擡「大尾」。

江戸前期朱墨欄上補注（五車韻瑞に拠る）、別朱竪批返句点批圏、音訓送り仮名（後人胡粉改正）校注校改、極稀に同朱墨欄上補注、別墨欄上補注、字目標注補記、別朱墨欄上補注、別朱墨貼紙補注書入。第十二巻第二、三張間に「尾張恩田先生自筆書入全部不殘」墨書剪紙を差挟む。尾に「〈元治元年甲子冬十月十八日修理之〉村上蓬廬藏」墨識。毎巻首に無辺方形陰刻「源〈信／命〉」、単辺方形陽刻「逸山／道高」朱印影、毎冊首

に「大正記念／藤井圖書（書行）」朱印影を存す。

〈愛知教育大学附属図書館　名八二一・四・W二〉　三八冊

名古屋藩校明倫堂旧蔵

丹雷文繫雨龍文空押艶出表紙（二九・三×二〇・七糎）左肩摺り題簽貼附、右下方打付に「讃」と書す。首冊のみ題簽右傍打付に「真〈共卅八〉」と白書、第二冊以下右肩打付に「六三七六」と墨書。改糸。毎冊一巻。尾題有「終」擡「大尾」。

間々欄上墨字目標注鈔補。極稀に同補注、平声のみ毎韻首張版心上朱標柱書入。毎巻尾に「前永平日損之」「閑損叟」「損々子」「楠氏子閑損日損叟」「洞上末流日損叟」「武陽産日損叟」等墨識、識語中法諱に重鈐して単辺方形陽刻「日損」、単辺三日月形陽刻「閑／損」朱印影を存す。又毎冊首に双辺円形陽刻「悟明」墨印影、無辺方形陰刻「明倫堂圖書」朱印影を存す。

〈愛知教育大学附属図書館　名八二一・四・W一〉　三七冊

名古屋藩江戸屋敷弘道館旧蔵

標色表紙（二八・八×二〇・四糎）左肩題簽剥落痕、中央に方簽を貼布し声韻目を書す。第七冊等左肩打付に後筆にて「増續會通韻府群玉」と書す。右肩打付に「六三七八」朱書。改糸。第十五・六巻を一冊とする他は毎冊一巻。尾題有「終」擡「大尾」。

上平声四支五微韻のみ間々朱竪句点批圏、欄上並貼紙墨校注書入。標色不審紙。毎冊首に単辺方形陽刻大「弘道館／圖書印」朱印影を存す。

〈台北市・国家図書館　三〇九・〇七九三九〉　二五冊

後補香色表紙（二九・五×一九・三糎）。改糸、虫損修補。見返し新補、又元の見返しを存す。毎冊一乃至二巻。尾題有「終」擡「大尾」。

僅かに標色紅色不審紙を貼附。首に単辺方形陰刻「蘆六所／臧書印」朱印影を存す。

右の他『弘文荘古活字版目録』三五四に同本の巻首書影を見、[20] 大英図書館の書目にも同刊記本の著録がある。また個人蔵の伝本についても仄聞するが、いずれも調査を尽していない。

該本の伝存情況を俯瞰すると、先ずその伝本の多さに驚かされる（著録二十一本）。これは『韻府群玉』諸版の中でも、四

稿に解題した明万暦十八年王元貞校刊本『新増説文韻府群玉』に次ぎ、こちらは活字本であり一時に印出されたであろうことを勘案すると、その多さは際立っている。このことは『韻府群玉』を離れ、古活字本全般の中で考えても同様であり、正確な数字等は持ち合せないが、恐らくは最も伝本の多い部類に含まれるであろう。該本は古活字本といっても坊間の刊行に係るが、規模の大きさや様式の完備という意味でも、慶長以来成熟してきた新たな出版事業の、一の頂点を成す刊行であったと言える。[21] ただそれは、書肆の側が活字印刷の技術を以て事業の拡大を目論んだ結果であって、真にわが国の学問を潤したのかどうかという点は、別に問われるべき事柄であろう。今少しく伝本を渉猟した限りに於いて、敢えてこの点に触れるとすれば、旧蔵や書入の情況が一の材料となる。

南北朝以来、本書『韻府群玉』の主たる受容者であったのは五山禅僧であるが、古活字本の受容者は必ずしも同じではない。右の伝本中にも禅僧の受容例を見出すけれども、それらは林下の者であり黄檗の系統であり、五山派の受容は確認することができない。これは社会的勢力としての五山派の衰退を背景に、五山禅僧の学問傾向、即ち禅理の他に雅文を弄し、また書記としての社会的機能を分担するための修練が、既に第一義とはされなくなったことを示している。かつて本書は正にそうした修練と準備に於いて恰好の教材を提供し、実際、五山僧の所持した版本を見ると、集約的増補を加えるような関与を常套としていたし、遂に本書を本文とする抄物や、本書を基にする新たな編書までも作り出したのであったが、古活字本の受容者には、五山僧の如き本書本文との濃密な関わりは見出されない。蔵書印等から判明する古活字本の受容者は、前代に比べ拡散する傾向にあり、公家や大名、延いては藩校の旧蔵が目に着く。これらの旧蔵者が伝本上に遺している痕跡は比較的微弱であり、韻目字目の標識を加え、折に触れ繙かれた部分に朱墨を指すか附箋を副える程度のことであって、漢学を専業とし、孜々として参考する者の手に渡っていたのではないことがわかる。

ここで本文の由来について想起してみると、恐らくは朝鮮朝に於いて成された合編校正の結果を、ほぼそのままに翻印したものが本書古活字本の本文であり、元の乙亥字再刊本で印出後も入念に改められた点については、反映することがなかった。該本では字様についても底本に負っており、整版本で言えば覆刻に近い精神で行われた事業というべきである。抑も本文の採

択という点で、朝鮮では雅交の他、挙業に資するという観点から本書の増編が試みられたに違いないが、挙業ではなくとも擬似的に漢文製作の修練を自らに課した五山僧の時代が去り、そのような脈絡を失ったわが国に本文のみを移植した所で、にわかに受容を喚起するような情況にはなかったであろう。伝本の数のみを取上げると、該本は広く流布して盛んに学ばれたように見えるが、これはむしろ事業の拡大を試みた刊行者の意図が顕れたもので、受容の実態としてはやや空疎であったと言わなければならない。元々古活字本の性格には、古典を取上げ、書物を高級な調度として取扱うような傾向も認められるが、田中長左衛門が一歩を踏み出し、本書の如き類書の翻印を手掛けたことには既にある種の矛盾が孕まれており、その印面は本文複製技術としての古活字の盛期を示している一方、伝本に見られる受容の実態は、その時代が終息に向かっていることをも窺わせる。ただ水面上にはそのようなことであっても、複製によって連属する本文の伝流は、なお次の展開を呼び起こした。

同　欠名点

日本延宝三年（一六七五）刊（京・八尾勘兵衛）

覆寛永二年古活字刊本

本版は前記古活字本を覆刻した整版附訓本であり、文字の筆画に至るまで前本を写している（図版十）。

題簽双辺「増續韻府〈声目／韻目〉幾（行書）」。

四周双辺（二一・三×一六・一糎）無界。但し間々単辺の張子や、有界の箇所を含む。後者は韻目の行の前後等によく現れるが、これは底本の残映かと思われる。欄上字目有郭。

巻尾題「增續會通韻府群玉卷之一」等、

大尾題「增續會通韻府群玉卷之三十八終　大尾　」。

右に行を接し低四格にて「延寳三歳乙卯仲冬日／（以下又低二格）〈京寺町本能寺前〉／八尾勘兵衛板行」記あり。

八尾勘兵衛、名を友久と言い、江戸前期を代表する出版書肆の一人である。漢籍について見ると慶安から延宝にかけて出版の事跡があり、[22]〔江戸前期〕刊慶安五年（一六五二）印『六臣註文選』[23]、慶安五年刊『大明三蔵法数』、明暦二年（一六五六）刊『新刻増補円機活法全書』、万治二年（一六五九）刊『五車韻瑞』、寛文三年（一六六三）刊『釈氏稽古略』、同六年刊『新編古今事文類聚』等が伝存する。仏書の他は大部の漢籍を取上

げ、本書を含む類書の刊行に特色がある。殊に『五車韻瑞』には伝本が多く、『韻府群玉』に対して同工後出の書であるから、本版刊行との関係が思われる。

本版の刊行時期について、延宝三年に先立つ寛文六年頃刊行の『〈和漢〉書籍目録』を見ると、字書の項に、員数を示す上欄は空白のままで「増續韻府」の題目が見え、続く寛文十年刊『〈増補〉書籍目録』には上欄に「五十」と刻されている。これは本版の実情に合ないが、別版について著録したものではなく、延宝三年刊『新増書籍目録』になると正しく「卅八」と刻されているから、前者は八尾版の出版予告の意であり、「五十」とは概数を言ったものであろうと思われる。そう考えると、本版の刊行は寛文年間から予定されていたことになる。なお出版書籍目録類では元禄年間のものまで当初の員数が引継がれ、例えば元禄九年（一六九六）刊行の『〈増益〉書籍目録大全』には「〈五十／八尾〉／／増續韻符　金弐兩」等と登録されている。

本版には一貫して返り点、連合符、送り仮名が附され、間々難訓、難音字に振り仮名が加えられている。しかし和刻本漢籍の多くがそうであるように、本版についても点者の名を明らかにすることができない。八尾勘兵衛の他の出版書を見ると、『円機活法全書』『五車韻瑞』『事文類聚』の三書は、林羅山門下の儒医菊池耕斎の点と判明し、本書も同じ類書であるだけに、耕斎関与の可能性が考えられるけれども、版本自体にそのような徴証はない。本版の訓点を見ると、仄声以降に難訓、難音字の振り仮名が殊に増加するが、このような現象は分掌による附訓の可能性を示唆し、複数の点者が関わったということも考えられる。または、増続会通本以前に日本に将来されていた元明版とその覆刻諸本に対する書入の情況を見ると、その多くが実用を踏まえ平声に止まっているから、平声には在来の点本を用い、平仄に点法を異にしたという見方を取り得るかも知れない。記して後考を俟ちたい。

〈慶應義塾大学附属研究所斯道文庫　〇三二一・ト四〉　三八冊

貞享四年（一六八七）感得識語

黄檗染表紙（二八・〇×一九・五糎）摺り題簽貼附。五針眼、改糸、虫損修補。毎冊一巻。

稀に行間欄上朱校注補注書入、欄上朱墨字目標注鈔補。極稀に欄上別朱補注書入。毎冊尾「沙門蓮□」「周温蓮□」等の墨識

あるも全て墨滅、第一冊尾墨滅右傍に「貞享四龍集丁卯十一月穀旦求之」墨識。毎冊首に単辺方形陽刻「蕙齋／圖書」朱印影、その上に「山崎」墨書、毎冊尾に単辺方形陽刻「山崎／臧書」朱印影を存す。

〈無窮会図書館真軒先生旧蔵書〉　三八冊

後補渋引卍繋菱花唐草文空押艶出表紙（二七・八×一九・八糎）左肩題簽を貼布し「増續韻府幾卷〈韻目　幾〉」と書す。五針眼、改糸。毎冊一巻。

毎巻首題下朱韻目、墨巻中韻目鈔補。巻中毎韻首張版心上朱標柱、間々欄上朱墨補注（数筆）、墨字目標注、稀に行間朱竪句批点批圏書入。縹色等不審紙。ほぼ毎冊尾「韻府群玉全部三十八冊之内／（低三格）　三（一）冊寄附／在春桂塾　高山龍之助（ほか二十一名）」墨識、各筆。毎冊首に単辺方形陽刻「石／齋」朱印影、同「眞軒／臧書」朱印影（三宅真軒所用）を存す。

〈天理大学附属天理図書館古義堂文庫　一二〇・一〉　三八冊

丹波常照寺旧蔵

浅葱色雷文繋唐草文空押艶出表紙（二七・四×一九・五糎）左肩摺り題簽貼附。首冊のみ剥落、素紙題簽を貼布し「増續韻府〈平一／東〉」と書す。押し八双。五針眼。前副葉。毎冊一巻。

間々朱批圏批点合点書入、毎韻首張版心上標柱書入、版本圏発朱顛、稀に欄上墨字目標注鈔補、補注書入。縹色不審紙。毎冊首に単辺方形陽刻「衣笠山／□慶□（隷書）」朱印影、重鈐して同「丹波州／大雄山／常照寺（楷書）」墨印影を存し墨滅[24]。

〈国立公文書館内閣文庫林家旧蔵書　三六六・三三〉　二五冊

林錦峰手沢　昌平黌旧蔵

首尾冊後補香色表紙（二七・六×一九・六糎）、第二―五冊後補淡縹色卍繋雨龍文空押表紙、第六―十二冊同香色菱繋牡丹花文空押表紙、第十三、十五―十七冊同雷文繋宝文表紙、第十四、十八、二十冊同渋引表紙、第十九、二十一冊同縹色雷文繋蓮華唐草文空押表紙、第二十二―二十四冊同香色雷文繋文空押表紙、左肩打付に「增續韻府群玉　幾　幾」と書し、右肩より韻目を列す。右肩単辺方形陽刻「昌平坂／學問所」墨印影。毎冊一乃至三巻、区々。第十三巻第九十四張欠。

毎冊首に単辺方形陽刻「闊齋圖書」朱印影（林錦峰所用）、同「林氏／藏書」朱印影、毎冊尾に表紙同墨印影、毎冊首に双辺

方形陽刻「淺草文庫（楷書）」朱印影を存す。

〈名古屋市蓬左文庫　一五四・一〉　三八冊

縹色表紙（二七・三×一九・四糎）左肩摺題簽貼附、首、第十七、三十五、第三十七冊は剥落、首、第三十七冊には題簽を後補し「増續韻府　幾」と、第十七、三十五冊には打付に別筆にて「増續韻府〈声目／韻目〉幾」と書す。五針眼。一部改糸。毎冊一巻。

首葉中に「〈御時代不知〉増續韻府〈和板〉卅八冊」と墨書せる剪紙を差挟む。

〈東京大学総合図書館南葵文庫　D四〇・五八三〉　合一三冊

和歌山藩主徳川家旧蔵

新補洋装、旧三八冊、縹色艶出表紙（二七・二×一九・三糎）左肩摺り題簽貼附、右下方南葵文庫蔵書票貼附。毎旧冊一巻。欄上朱墨字目標注鈔補、補注（文選による例証多し）、稀に朱句批点批圏、音訓送り仮名鈔補、校改校注、毎韻首張版心上標柱書入。縹色等不審紙。毎冊首に単辺円形陽刻「弐／白」墨印影、単辺方形陽刻「慶之／黄稱」朱印影、同「山井氏／圖書記」朱印影、無辺陽刻「松秀齋」朱印影、葵文辺欄「紀／伊／悳／川」方形陽刻「南葵／文庫」朱印影を存し、首尾冊後見返しに明治四十年九月十二日山井良氏寄贈印影並に墨書を存す。

〈大阪府立中之島図書館　一三三六・一八六〉　三七冊

欠巻二

淡茶色艶出表紙（二七・六×一九・三糎）左肩摺り題簽貼附。書背「共卅八」等墨書。一部虫損修補。毎冊一巻。

間々朱句点、校注校改、附訓改正、毎韻首版心上標柱書入、同音首字合点、字目朱囲、欄上朱墨字目標注鈔補、破損鈔補（第四巻以下は稀）、稀に欄上朱墨補注書入。毎冊首に単辺円形陽刻「抱寂亭臧」朱印影、同「原臧／書證」「黄微原／正修氏／圖書記」朱印影、同「悾々齋／岡邨氏／臧書印」朱印影を存す。

〈台湾大学総図書館　二一―一―六／一九三四一〉　三八冊

新補香色表紙（二七・〇×一九・四糎）、第二十三冊以下香色旧表紙左肩打付に「増續會通韻府群玉　幾」と書する部分を刪出貼附す。裏打改装。天地截断、首冊未截、小口（毎字改行）増續韻府」墨書。毎冊一巻。第十八巻第五張、第二十九巻第一張

欠。三八年四月一九日付の購入記録小札を差挟む。

又　後印

本版伝本のうちに、末尾刊記部分の年紀を残し書肆名のみを削り取った後印本がある。

〈愛知大学附属図書館簡斎文庫　二三八〉　三八冊

秋田藩校明徳館旧蔵

縹色表紙（二五・四×一八・八糎）左肩摺り題簽貼附。右肩打付に「共三十八」と書す。天地截断。改糸改装。毎冊一巻。欄上墨字目標注鈔補、校注書入。極稀に本文朱鈔補。桃色不審紙。毎冊首に無辺方形陰刻「明徳／館圖／書章」朱印影、単辺円形陽刻「根本／氏臧（隷書）」朱印影、同有界「（上層毎字改行）賣捌所／アキタ／岡田惣兵衛／クボタ」朱印影を存す。

右の他、山口大学附属図書館棲息堂文庫、出雲大社日隅宮御文庫にも同版本を存する模様であるが、実見を果していない。

本版は古活字本に訓点を附して覆刻した整版本であるから、一応は本書の普及を目指して版に附したと仮定することができる。しかし本版の伝本について指摘しなければならないことは、前出の古活字本に比べてもその数が少ないという点である。伝本数を評価することには慎重でなければならないが、古活字に二十一本を数えるのに対し、それを覆刻した整版が十本程度というのは、普及を図ったはずの版刻が、実際にはそれを成し遂げていないことになる。伝本の印面を見ると磨滅した本がほとんど見られないのも、そのことと揆を一にしている。これは金二両という高値が災いしたためかも知れないが、一つには本書に対する需要が既に下火となっていたことが顕れたのだろうと思われる。八尾勘兵衛版刻（または求版）書の『五車韻瑞』や『六臣註文選』『事文類聚』などが非常に多く刷られているのに比較しても本書の伝本は乏しく、のちに本書の版木を手放していることが、書肆名を削り取った後印本の存在からわかる。また江戸時代の書林の出版書籍目録類を見渡すと、元禄九年（一六九六）刊、正徳五年（一七一五）修『〈増益〉書籍目録大全』に見える（八尾蔵版の標示あり）のを最後に、その跡を絶ってしまうのである。書肆の側には普及の準備が整った時、既に受容者の関心は本書から離れつつあったと見るべきであろう。

○増続会通増編本之属

朝鮮朝に、増続会通本の記事をさらに増編した本文が認められる。ただ、現在まで首尾完好の伝本を著録し得ていないために正確を期し得ないのであるが、他の属と違って、元々上声以下仄声の本文を成さなかった可能性がある。

増續會通韻府羣玉□□卷

元陰時夫編　陰中夫注　欠名増　明包瑜続　欠名新増

朝鮮刊（訓鍊都監字）　拠乙亥字再刊本

巻首題「増續會通韻府羣玉卷之幾（声目欠）／（以下低三格）晩學　陰　時夫　勁弦　編輯／新呉　陰　中夫　復春　編註／青田　包　瑜　希賢　續編」（第二―四行首のみ）、次行低二格標「一東〈獨用〉」等韻目、次行より本文。体式は乙亥字本に同様である。毎韻後改行低一格にて「詩譜（双辺陰刻）〈新増〉」と標し、次行より小字双行二段にて「光升必自東（日）」以下例句、先ず五言句、次で七言句を列挙す。これらは名句を集めたのではなく新案のものであろうが、一見して深刻な措辞は認められない。

〔
第一巻　（七五張）　上平声　一東（至「風」）
第二巻　一東二
〕
〔
第三巻　（六九張）　二冬・三江
第四巻　（八〇張）　四支
第五巻　四支二―
〕
〔
第六巻　―六魚
〕
第七巻　（七六張）　六魚二・七虞
第八巻　（七四張）　七虞二（自「雛」）
第九巻　（六七張）　八齊・九佳
第十巻　（六二張）　十灰
第十一巻　（存第一―七十七張）十一眞（至「巾」）
第十二巻　（六八張）　十一眞二・十二文
第十三巻　十三元
第十四巻　（存第一―七十七張）十四寒・十五刪
第十五巻　（七八張）　下平声　一先
第十六巻　（七六張）　一先二・二蕭
第十七巻　（六二張）　三肴・四豪
第十八巻　五歌・六麻
〔
第十九巻　（八〇張）　七陽（至「装」）
〕

〔　第二十卷　　七陽二　　〕

第二十一卷（七一張）　　八庚（至「清」）

四周双辺（二四・八×一五・九糎）毎半張九行、毎行一七字、甲寅字体。中縫部、白口（接内周）双花口魚尾（対向）間題「羣玉幾」、張数。巻尾題「増續會通韻府羣玉巻之幾」。

著録の伝本に拠る限り、第二十一巻・下平声八庚韻の「清」字に至り、上声以下には伝本を見ない。従って二十数巻、下平声の末まで刊行されたかと想像されるが、確証を得ない。該本の本文は、増続会通本の部分については乙亥字再刊本に拠ると見て支障がない。九行十七字の款式は他に例がなく、「詩譜」を新増した関係からも、行款は特有の形である。使用の木活字から、概ね十七世紀初の刊行と推定される。該本についてはなお完本の著録を期したい。

〈高麗大学校中央図書館　A一二・A八〉　　一二冊

存巻一、三・四、七、九・十、十二、十五―十七、十九、二十一

丁子染雷文繋蓮華唐草文空押艶出表紙（三五・七×二一・九糎）左肩打付に「韻府羣玉〈幾〉」と、右肩より韻目、右下方綫外「二十一」と書す。毎冊一巻。第十巻第五十七張欠。本文字目、熟字墨批点書入。

〈誠庵古書博物館　三・一〇六一（三四一）五冊のうち〉　三冊

存巻七、十一、十七

黄檗染雷文繋蓮華文空押艶出表紙（三四・三×二二・〇糎）左肩打付に「韻府羣玉」と書す。毎冊一巻。第十一巻第一―八、十、十一張、第七十八張以下欠。本文墨字目批点書入、稀に欄上墨字目標注鈔補。首に単辺方形陽刻「□山曹／氏家藏」藍印影を存す。

〈誠庵古書博物館　三・一〇六一（三四一）五冊のうち〉　二冊

存巻七、十七

丁子染艶出表紙（三三・二×二〇・九糎）左肩打付に「韻府羣玉〈幾〉」と書す。紙背官文書。毎冊一巻。本文墨字目批点書入。第十七巻本文紙背、詩句の鈔写稠密。

〈延世大学校中央図書館　〇三一・二一・二二〉　　一冊

存巻八

表紙（三四・二×二一・三糎）表面剥離、右肩に題簽を貼布し「韻會」と書す。
首に鼎形中単辺方形陽刻「守／拙」、尾に鐘形中同「□山／後人」墨印影を存す。

〈韓国精神文化研究院蔵書閣　A一〇C・八〉　一冊

存巻十四

後補黄檗染雷文繋蓮華文空押表紙（三六・七×二一・〇糎）。
首に単辺方形陽刻「安東／世家」「權／懷」、無辺方形陰刻「公／潤」朱印影、単辺方形陽刻「安春根／臧書記」朱印影を存す。

右の他、高麗大学校中央図書館に十八冊本（A12/A8D）を存する由であるが未見、沈慶昊氏「《大東韻府群玉》의구조」（『국문학연구와문헌학』二〇〇二年、太学社）に巻首書影掲載の晩松文庫本と同じであれば、これも同刊本と認められる。

元代に成立した原編『韻府群玉』に対し、元明の書肆がこれを増補した新増説文本と、明代中葉の学官の編集に係る『韻府続編』とを合した増続会通本は、恐らくは朝鮮朝に於いて初めて編集され、三十八巻本として流布し複製された。この本文は、先ず本書の増編本として最大の規模を有すること、また中国には及ぶことなく朝鮮と日本に於いてのみ行われたという点に特色がある。その展開につき年代を逐って整理すると、十六世紀の半ば頃、乙亥字によって印出されたのが初刊であり、その後、さらなる校改を経て、宣祖元年（一五六八）以前に、異植字本とも見るべき乙亥字再刊本が出されている。十七世紀初葉、壬辰倭乱（文禄慶長の役）により失われた銅活字に代わって、訓鍊都監から甲寅字体の木活字本も出されたが、この際には実用を重んじて例句を附した代わりに、仄声については印出されることがなかった。日本ではやや遅れて、寛永二年（一六二五）田中長左衛門の製作した木活字により、新たに将来された乙亥字再刊本を基とする本書の翻印が為され、これは字様のレヴェルに於いても元の乙亥字を模したものであって、書肆による古活字本刊行の一典型を成した。この本は、古活字本としては最大級の伝本を擁し、ある程度流布したことも窺われるが、新たに勃興した民間の学者にとっては手の及ぶ所でなかったから、半世紀を経た延宝三年（一六七五）、京の書肆八尾勘兵衛によって覆刻され、整版附訓本として普及が図られた。また朝鮮では

粛宗四十三年（一七一七）校書館に於いて、壬辰倭乱を含む一世紀以上の時を経て、戊申字による乙亥字再刊本の翻印が成されたのである。以上の関係を図示すると、次のようになる。

（新増説文本）・（続編）
←明弘治刊本・明正徳刊本系統
（増続会通本）
朝鮮乙亥字初刊本
↓朝鮮乙亥字再刊本→（増編本）朝鮮訓鍊都監字刊本
↓日本寛永二年古活字刊本→日本延宝三年刊附訓本
↓朝鮮戊申字刊本

本属の日本に於ける普及について考えてみると、現存本中に朝鮮本四種の伝来はほとんどなく、乙亥字再刊本に建仁寺両足院蔵本一例を見るのみであるが、同本が将来された江戸時代の初め、商業出版が勃興して古活字本から整版附訓本へと移行していく時節に際会し、大部の書ではあるがようやく書肆の取上げる所となって、複製拡大され一定の流通を見たのである。先ず古活字本を刊行した田中長左衛門の方法は、翻印でありながら字様に於いても底本に負い、相当数の印本を供給したという意味では、覆刻の精神に近いものがあり、本文の提供という点でも強く底本に依存している。続く八尾勘兵衛の覆刻は、全編に附訓を施し新たに版に附す努力が払われたものであるから、版本一般から言うと高級な部類に属するであろうが、これも古活字本刊行の上に成り立つ事業であったことは疑えない。そう考えると、本属の展開は、元明坊刻の類書が、朝鮮朝の再編集と校訂を経て、わが国近世の学者に供された一の過程を示しており、朝鮮で加えられた本文の整訂は、大王の権威を戴する校官の学力によって成されたものであるだけに、明代に坊刻の繰返しによって劣化していた本来の面目を相当程度回復していたのであり、日本の書肆が本書を翻印、覆刻する時には、工程上の消極的校正を加えさえすれば、さしたる問題もなく整った本文を得ることができたのである。実際、本書の整版本を古義堂に収蔵し、狩谷棭斎が校読の際に本書を繙き、本書によって補注を書入ている様を見ると、[25] 版本を通じ学問の潤されたことがよく実感される。江戸中期以降はわが国で本書に対する需要がやや低下したかに見えることは、古活字本に書入や受容の痕跡が乏しく、八尾版に於いては伝本自体がそれ程多くないという

ことからも窺われ、前稿に、明清版の新増説文王元貞校本の受容について述べた所とも揆を一にする。ただ需要に於いて低下の道をたどったとは言え、版本の流通と堆積がわが国の学問に一定の影響を与え続けたことは無視できないし、その来源が朝鮮本にあることを考えると、朝鮮朝に於ける本文の流通、取捨、整訂とその刊行について知ることは、近世の日本漢学を研究する上で欠くことのできない要件の一であり、日本書誌学にとっても大きな課題であろうと思われる。

三　増刪本・摘要本　解題

○増刪本之属

明万暦十八年前後に初めて刊行された新増説文王元貞校本は、万暦以降の江南地域の出版情況に後押しされ、非常な勢いを以て普及し、本書流布本の地位を占めた。この王本は直接間接の覆版を生んで、中国のみならず朝鮮や日本にも行われたが、その盛期は概ね明末から清前期の間にあったと思われる。しかし長く行われてきた『韻府群玉』に対し、明代に同工の書である『五車韻瑞』が編まれ、清朝康熙年間に至り、『韻府群玉』と『五車韻瑞』の両書を包含する形で『佩文韻府』が編まれると、長きにわたった『韻府群玉』の影響力も衰えを見せるに至った。この頃、清前期にも王本の覆刻は続いていたが、清刊本の封面を見ると「重鐫韻府群玉原本」「重鐫韻府羣玉約編」等と称するものが現れてくる。これらはその本文を正しく説明するものではないが、実は、康熙年間以降に行われたと思しい、本属を含む約編諸本との競合関係から生まれた標題と考えられる。「原本」とは、約編本ではない旨を強調するために題せられたものであるし、後者に至っては、実際には約編されていないにも関わらず自ら約編を謳っているのである。このような他本への反映にも見られるように、本属を含む約編本は、『韻府群玉』流布の末節、清前期に一定の普及を見た本文である。『四庫提要』の本書の解題中に

康熙中河間府知府徐可先之妾謝瑛又取書其重輯之、名增刪韻玉定本。今書肆所刊皆瑛改本。[26]

と記すのはこの間の事情を証言したもので、謝瑛の増刪韻玉定本とは、後述の本属清康熙十九年序刊本の系統に触れたものである。

増刪韻府羣玉定本二〇巻
元陰時夫編　陰中夫注　清徐人鳳増刪　徐可先等校
清康熙十九年（一六八〇）序刊　拠新増説文本

先ず徐序（三張）。首題「序」、次行より本文「（上略）歳己未予補守滄瀛盛暑／披襟簿書稍間兒子人鳳手／捧一函曰此母氏于東牟郡署／所密授而諭勿輕示人者（中略）予／曰異哉是予久忘増刪者而母／顧先我而成之見其裒益皆備／節省得宜補不病繁裁不害簡／丹黄燦若魚豕較然擊節嘆／興呼人鳳而詔之曰（中略）此爲鴻寶之秘而不示人者而母／之闡範梓而公于世者予老人之夙願爰命剞劂氏而授之梓／　旹／康熙歳次庚申孟夏上澣／晉陵徐可先梅溪氏識」次行下より無辺方形陰刻「良々／千石」、単辺方形陽刻「徐印／可先」印影摸刻（跨行）。毎半張六行、毎行一二字。

己未は清康熙十八年（一六七九）、山東方面の郡守を務めていた徐可先が、子の人鳳からその母の遺品である本書を示されて版刻を命じた機縁を記し、且つ「裒益皆備、節省得宜。補不病繁、裁不害簡。丹黄燦若、魚豕較然」と増刪の完備を謳った内容である。母の名は謝瑛と、凡例後の識語に見える。

次で原序（六張）。首題「韻府羣玉舊序」、次行より陰竹埜（応夢）序、改張同題後陰幼達序、又改張同題後陰時遇序。毎半張八行、毎行一五字。

次で謝序（二張）。首題「韻玉定本小引」、次行より本文「（上略）徐君未釋褐時也於／制擧藝之外更為詩古文詞計韻玉一／書所由早正（中略）徐君不欲掩其苦心付梓行世／將見咏雪遺徽不又継道韞而増一佳／語也哉（中略）／（以下低一格）旹／（擡頭）康熙庚申夏五之吉謝倬雲章／氏識（行書）」、次行下双辺方形陽刻「東山／之後」、単辺方形陽刻「雲章／倬」印影摸刻。無界、毎半張七行、毎行一四字。

次で凡例（三張）。首題「増刪韻府羣玉定本／　凡例」、次行より本文。毎条第二行以下低一格、至第十一条。行を接し低二格諱字双擡「旹／（擡頭）順治歳己在亥清和既望偶檢程君房崑崙玄／實試海上金星硯因誌於東牟官署之壽／藤軒／（低六格）蘭陵謝瑛玉英氏譔」、次行下に単辺方形陽刻「謝／瑛」、無辺方形陰刻「道韞／遺徽」印影摸刻。

順治己亥は十六年（一六五九）、謝氏は山東登州府東牟郡の官舎にあって、この凡例を作ったと言う。

次で韻選類従凡例（三張）。首題「韻選類従／　凡例」、次行

より本文、毎条第二行以下低一格、句点附刻。第六条の後、低八格「南蘭後學徐人鳳識」と署す。無界。

次で目録（毎声第一或は第一・二、計八張）。首題「増刪韻府羣玉定本目録」、次行低二格標声目、次行低一格標巻序数、次行より低二、一〇格に標韻目、毎巻改行、毎声改張同題。

毎巻先標「詩韻類從」、次行低二格標「一東〈獨用　古通冬轉江〉」等韻目、次行より「東（墨囲）蝀〈蝃ー／虹也〉」以下字目及び双行注を列す。了て改張。

巻首題「増刪韻府羣玉定本巻一（一二十）（隔四格）上平（一入）聲（墨囲亀甲）／（以下低一格）新呉陰竹埜先生定例　男一時夫勁弦編輯／中夫復春編註／古呉徐可先梅溪甫訂正男一人鳳子威増刪／人鶚子雲較閲／（低八格）同里謝　倬雲章氏參訂」、次行低二格標「一東〈古（墨囲）二冬通用三江轉用〉」等韻目、次行より本文。字目並に事目墨囲、注小字双行。

第一巻（目三・四二張）上平声　一東―三江
第二巻（目五・七〇張）　四支上―六魚
第三巻（目五・七五張）　七虞上―十灰
第四巻（目五・八二張）　十一眞―十五刪
第五巻（目五・八二張）下平声　一先―五歌
第六巻（目三・六六張）　六麻・七陽
第七巻（目三・六二張）　八庚―十蒸
第八巻（目四・六五張）　十一尤―十五咸
第九巻（目四・六三張）上声　一董―六語
第十巻（目五・六三張）　七麌―十四旱
第十一巻（目五・六四張）　十五潸―二十二養
第十二巻（目四・五六張）　二十三梗―二十九豏
第十三巻（目五・七八張）去声　一送―七遇
第十四巻（目五・五三張）　八霽―十二震
第十五巻（目六・七三張）　十三問―二十一箇
第十六巻（目六・六七張）　二十二禡―三十陷
第十七巻（目三・五六張）入声　一屋―三覺
第十八巻（目六・七〇張）　四質―九屑
第十九巻（目三・六六張）　十藥・十一陌
第二十巻（目四・六一張）　十二錫―十七洽

四周双辺（一二・一×九・三糎）毎半張九行、毎行一八字、方刻体。中縫部、白口、上辺題「韻玉定本」、単線黒魚尾下標「巻幾〈韻目〉」、下方張数。

巻尾題「増刪韻府羣玉定本巻幾〈終〉」。

右のうち謝序と凡例については、後掲の内閣文庫蔵本に欠いているが、覆刻本には存し、その内容から原存と認められるので、本版の解題中に掲げた。これらの記事を総合すると、本属本文は徐可先とその妻謝瑛、その子人鳳、人鶚の一族によって編集されたもので、同里の謝倬（瑛の族か）もこれに加わっている。その経緯は、先ず謝瑛が順治十六年（一六五九）に凡例を作って編集を始め、後年、康熙十八年（一六七九）になって子の人鳳が遺稿として発見し、それを示された徐可先が版刻を試みたということになるが、巻首等の題署を見ると、人鳳が詩韻類選を附すなど増刪を加え、徐可先、人鶚、謝倬が校閲に当たり、康熙十九年頃に梓に附したということのようである。その巻立は、本書原編以来、基となる新増説文本の採用した二十巻の組織を、韻目もそのままに保存しており、その本文は増刪と言っても、底本の記事を一方的に節略したまでであって、加えた所は毎韻の首に附した詩韻類選と称する韻字の一覧のみであって、その実態は単なる約編本である。ただ本書版刻史の上では、最も早く現れた約編本であり、却ってその点を重んずる必要があろう。なお本版の韻選類従凡例は、張付の形から見て毎声の首に綴合されるべきものであるかも知れないが、そのような体裁の伝本を見ていない。

〈国立公文書館内閣文庫　三六六・二七〉　一〇冊

昌平黌旧蔵

香色表紙（二二・一×一一・九糎）左肩打付に「増刪韻府群玉定本〈幾幾〉」と書す（両手）。右肩に単辺方形陽刻「昌平坂／學問所」墨印影を存す。康熙綴。版面は料紙内下方に印出される。封面、双辺有界「景昔堂鑒定／増刪韻府羣玉／定本（大書跨行半隷体）〈按是編原本韻玉遺珍悉採冗累咸芟卷帙／雖約而記載彌詳誠學海之舟航藝林之琬／琰至於較讐之密剞劂之工其餘事也閲者鑒諸［　］〉」、白紙印。謝序、凡例を欠く。毎冊二巻。毎冊尾に表紙同墨印影、無辺陽刻「文化丙子」朱印影、毎冊首に双辺方形陽刻「淺草文庫（楷書）」を存す。

右の他、香港中文大学図書館、韓国成均館大学校中央図書館に同版本を存する模様。また『彰考館図書目録』に「増刪韻府群玉定本〈陰勁弦編輯　康熙甲申　一〇　刊〉」と録する焼失本は康熙庚申の誤りで本版か。

同

清康熙二十六年（一六八七）序刊

覆清康熙十九年序刊本

前版の覆刻であるが、徐序末の「康熙歳次庚申」の年紀を「康熙歳次丁卯（二十六年）」と改変してある。本文中、文字を挖改した痕が目立つ。版式同前、匡郭一一・八×九・四糎。

〈北九州市立中央図書館　経一〇―三・#二〇五〉　二〇冊

豫章四友堂印

後補渋引表紙（二二一・七×一二・四糎）。縹色包角。改糸。封面、双辺有界「景昔堂鑒定／増補韻府羣玉／定本（大書跨行半隷体）〈按是編原本韻玉遺珍悉採冗累咸芟卷帙／雖約而記載彌詳誠學海之舟航藝林之琬／琰至於較讐之密剞劂之工其餘事也閲者鑒諸（隔五格）豫章四友堂〉」、黄紙印。毎冊一巻。第三巻第十三・三・十四張、第十九・十五・二十張、第四巻第三十五・三十七・三十六・三十九張と錯綴す。

稀に朱欄上補注、行間校注、別朱批圏書入。毎冊後見返しに単辺方形陽刻「毛利／藏書（隷書）」朱印影を存す。

〈韓国精神文化研究院蔵書閣　A一〇C・二八〉　一六冊

欠巻一、十五、十八、十九

後補丁子染雷文繋蓮華文空押艶出朝鮮表紙（二二一・三×一二・五糎）左肩打付に「韵府羣玉幾何聲之幾」と、右肩より韻目、右下方「共二十」と書す。毎冊一巻。第三巻第二十九張鈔補。毎葉前半欄上墨藍韻目標注、間々後半別墨同注、補注書入、本文破損鈔補、字目朱囲、熟字藍批点書入。

右の他、延世大学校中央図書館に蔵する本も同版か。

○摘要本之属

本属も約編本の一種に当たり、前記増刪本の直接の影響下に成立した本文である。

韻府羣玉二〇巻　韻府羣玉輯要一巻

元陰時夫編　陰中夫注　清欠名摘要

清乾隆七年（一七四二）序刊（明善堂）　拠増刪本

怡親王序（二張）。首題「韻府摘要序」、次行より本文「（上略）
／乾隆七年歳次壬戌孟春和碩／怡親王撰（楷書）」。毎半張六行、
毎行一二字。
輯要（四七張）。首題「韻府羣玉輯要〈声目〉／（低八格）明善堂重
梓」、次行低二格標韻目、次行より字目を列す。毎韻改行。
巻首題「韻府羣玉巻幾（一二十）／　上平（一入）聲」、次行低
二格標「一東〈古（墨囲）二冬通用三江轉用〉」等韻目、次行よ
り本文。字目陰刻、事目引書目墨囲、注小字双行。

第一巻（一四張）上平声　一東—三江
第二巻（一六張）　四支—六魚
第三巻（三〇張）　七虞—十灰
第四巻（二六張）　十一眞—十五刪
第五巻（三三張）下平声　一先—五歌
第六巻（二一張）　六麻・七陽
第七巻（一六張）　八庚—十蒸
第八巻（一七張）　十一尤—十五咸
第九巻（二六張）上声　一董—六語
第十巻（二一張）　七麌—十四旱
第十一巻（二五張）　十五潸—二十二養
第十二巻（一九張）　二十三梗—二十九豏
第十三巻（二五張）去声　一送—七遇
第十四巻（一九張）　八霽—十二震
第十五巻（二八張）　十三問—二十一箇
第十六巻（二六張）　二十三禡—三十陷
第十七巻（二三張）入声　一屋—三覺
第十八巻（二九張）　四質—九屑
第十九巻（二五張）　十藥・十一陌
第二十巻（二四張）　十二錫—十七洽

四周双辺（一〇・三×七・四糎）毎半張九行、毎行一六字、方
刻体。中縫部、白口、上辺題「韻府羣玉」、単線黒魚尾下標
「巻幾〈声目　韻目〉」、下辺張数。
巻尾題「韻府羣玉巻幾〈終〉」。

本版に序を記した怡親王は、怡僖親王弘晥。聖祖康熙帝の孫、
怡賢親王允祥の第七子で雍正八年に怡親王を襲い、乾隆四十三
年に薨じた。明善堂と称す。「明善堂重梓」とある本版は怡親
王府刊本ということになるが、同じ怡府刊本に同年の『集千家
註杜工部詩集』が知られる。又本書原本に属する〔明前期〕刊

本のうち台北・国家図書館蔵本は「明善堂珍藏書畫印記」「明善堂覧書画印記」の印影を存する怡僖親王弘曉の旧蔵書であった。ただ本版の本文は原本ではなく新増説文本の系統を節略したもので、直接には前記増刪本に拠っている。本版に附刻する「韻府羣玉輯要」も、増刪本の各巻首に附された「詩韻類從」を集めたものに過ぎない。本版は増刪本を受けてさらに約編を進め、それに応じて版面も縮小した形である。

〈上海図書館　五九九三四七〉　一〇冊

文光堂蔵版

後補焦茶色表紙（一七・九×一二・六糎）。淡青包角。金鑲玉装。封面、双辺無界「／韻府羣玉（大書）／（低二格）文光堂藏板」牌記、黄紙印。第一冊輯要、第一―三、六―八巻を各一冊とする他は毎冊二巻。

右の他、台湾師範大学国文研図書室蔵趙蔭棠旧蔵書中に同種本を存する由[27]、又佐伯毛利家の善本献上後の蔵書を録した『以呂波分書目』[28]に「明善堂韻府群玉　六本」とあるのは本版を指すかと思われるが、現在は残存しない模様である。

同

清同治十三年（一八七四）刊（京都・宝経堂）

覆乾隆七年序刊本

封面、匡郭版心あり、前半有界「古香齋仿本／袖珍韻府群玉（大書）／（下辺）天禄閣藏版（以上隷書）」、後半無界、中央に「同治十三季京／都寶經堂重栞（隷書）」記を存す。

怡親王序、輯要、本文同前。匡郭一〇・二×七・四糎。

〈南京図書館　三〇〇六五五三〉　八冊

清丁丙旧蔵

香色表紙（一五・一×九・二糎）。本文白紙印。前記の封面を存す。毎冊二乃至三巻。

序首に単辺円形陽刻「錢唐丁／氏正修／堂藏書」朱印影（清丁丙所用）を存す。

本属伝本に関してはなお中国に多く存するものと思うが、当面右の二本を著録したに過ぎない。ただ『佩文韻府』の登場によって本書検閲の意義が薄れたにも関わらず、明代には増補一

辺倒であったものが踵を返すように約編本の形を取り、細々とした版刻ではあるが清末に及んでいることを知ると、本書の宿した生命の強さに驚かされる。なお清代には『韻府約編』と題する書も行われているが、これは『佩文韻府』の約編本であり、本書と直接の関係はない。以上、一先ず版本の解題を終える。

四　総説

本稿を閉じるに当たり、本書版本の展開につき一望して見ると、元の世に陰時遇、陰幼達の兄弟が、先行の編書に学び、類書を韻書の体裁に仕立てる新案を以て刊行した『韻府群玉』は、科挙再興の時宜に投じ、また建安書肆の働きによって世上に容れられ、元統二年（一三三四）の刊行から五百年以上にも及ぶ版刻の伝流を生み出し、朝鮮や日本にも波及して、稀に見る規模を以て行われた。殊に現存最古版の元統二年刊本は、それ自体長く行われ、中国の他、日本南北朝期に一種、朝鮮朝の前半期に二種の覆刻を生じてその力を顕し、実質的な始発を遂げた。中国に於ける本書版刻の営為は、常に出版書肆の活動によって支えられたが、当初から本書本文の複製については、安易な覆刻または粉飾とも言うべきわずかな増補を伴う重刻という形で行われ、新たな版刻が旧刻の地位を奪うという経緯の連続でもあった。早くも元至正十六年（一三五六）に『新増説文韻府群玉』が現れ、これは原版を利用した表面的な増修であったにも関わらず、原本の衰退に影響を及ぼし、明代の前半に覆刻を重ねて、原本から新増説文本へと版本の交代を現出した。これと雁行する形でさらに『新増直音説文韻府群玉』等、再増の亜種を生じたが、直音の増入はあまりにも安易な形で行われ、また本文の劣化が災いして、先行の他本と拮抗するには至らなかった。これら一連の覆刻増補とは別に、明代の半ば、地方教官によって本書の続編『類聚古今韻府続編』が作られたことも、本書浸透の意味を知る上で注目され、その版刻と流通は比較的繊弱なものであったが、結果的に海外への波及について独特の意味を持った。

右に触れた明代半ば以前の諸版はみな建安の坊刻本と見られ、例外として明初洪武年間に、原本に基づく南京国子監洪武韻改編本が刊行されているが、これは洪武韻自体の不振とも関係して流布しなかった。しかし万暦十八年（一五九〇）に至り、南京の監生王元貞が、旧刻の不良に鑑み、嘉靖前後から江南に勃

興した家刻本に範を取って『新増説文韻府群玉』の新校本を刊出すると、時と場を得て非常な勢いで行われた。この王元貞校本は、増補を止め校刊を標榜した点で本書の版刻史に画期を成したが、版刻の場が江南に、版刻の主体が士人社会周縁の者に移り、清初に掛けて多数の覆版が作られ、より広範囲に普及していったという意味で、中国に於ける版刻一般の転換を体現しているし、印本の数と流通の広さ、つまりその規模に於いて前代の版本とは格段の相違があった。続く清初には王本の覆刻が続いていたが、その飽和状態を受けて新たな版刻が促され、『増刪韻府群玉定本』と称する事実上の約編本も考案された。康熙末年に至り、本書版本の消長にとって決定的となる『佩文韻府』の編集が成されたが、同書の弘通に従う広本の衰退に反して約本が存在の意義を増し、増刪本を基に摘要本も刊刻された。清代後半、本書の版刻は終息に向かい、新たな版刻は稀となったが、その営為は実に清末にまで及んでいる。

本書編集の歴史的意義は、類書に摘錦の属を確立して文人の検閲に便宜を加え、明初の『永楽大典』の編集に範型を垂れ、明末の『五車韻瑞』の並存を経て『佩文韻府』に吸収され、大略その生命を終えたかに見える。例えば『四庫提要』が本書の来歴に触れ、『佩文韻府』に引較べて本書の粗漏を指摘した末に

然元代押韻之書、今皆不傳、傳者以此書爲最古。又今韻稱劉淵所併、而淵書亦不傳。世所通行之韻、亦即從此書録出。是韻府、詩韻皆以爲大輅之椎輪。將有其末、必擧其本。此書亦曷可竟斥歟。

と採録の意を述べているのは、[29] 詩韻の書一般または『佩文韻府』の祖としてのみ本書伝存の意義が認められるということであり、当時の情況からして已むを得ない側面も認められるが、本文内容を問題とした場合に取られる見識がよく集約されている。しかし書目を頼りとして版本に取材して見ると、諸本の消長に特有の因果関係があり、その展開の中に諸版開刻の意義を見出すことができ、狭義の学術とは別の論理によって一の偏流が形成されていった様子を窺うことができる。本書の場合、編集の当初、類書の列に一の範型を加えたことと同じように、あの手この手と本文の増修を企てた末、新校本を標榜し却って格段の成功を勝ち得た経緯の上にも、その真価が備わっていたと見なければならない。従って、有名無名の旧蔵者が版本を手に取り学んだこと、あるいは手にし得たこと自体もまた、看過し難い内容を含んでいる。そうした版本の流通は、漢籍に対する曝露の

比較的散漫な中国の外に於いては、より深刻な意味合いを含み、同じ本文が複製されても地域の条件が作用して、版刻の意義は様々に変容した。

朝鮮朝に於ける本書の刊行はいずれも内府の主導により、二度にわたる原本の覆刻と、四度に及ぶ増続会通本の翻印とに分けて考えることができる。前者については明正統二年即ち世宗十九年（一四三七）の江原道の版刻がその初刊であるが、これは世宗朝に於ける冊板普及事業という脈絡に於いて理解すべきものであり、地方版と言っても内府との連繋によって成された複製である。その覆刻は直接中央で行われ、いずれも校官の関与した点に本文上の特色がある。朝鮮で本書がよく実用に供されたことは、字句検出の準備に怠りない書入の様子が濃かに語っているけれども、これには両板の雅交と科業とが背景としてあろう。その意味で当時本書に対する依存は比較的強く、十六世紀半ばに至り、乙亥字による『増続会通韻府群玉』の刊行が試みられる。これは恐らく将来の明版二種、即ち新増説文弘治刊本と続編の正徳刊本を朝鮮で合編したものと思われ、さらに広い収録を求めることが、銅活字による一定数の印出と頒布という条件の下、中国よりも先鋭な形で現れている。その意図が極めて実用に近しいものであったことは、字目標注が欄上に組み込まれたことや、壬辰倭乱後の荒廃中に増編刊出された際、例句を附して仄声を廃する改編を加えたことによく認められるし、乙亥字本の受容者の手により『大東韻府群玉』が編まれ、並行して朝鮮朝の文章を集めていることも、同じ脈絡中の事柄であろう。この増続会通本も内府の刊行であり、その翻印は十八世紀の前半に及んだ。

日本に於ける本書受容の契機は五山禅僧の活動にあり、夙く中巌円月の「文明軒雑談」上巻に

蒲室詩、題佛智歸仰山、其詩首句云、早發扶輿拜。或問扶輿二字所由。予云、佛智師八十餘歳之老、冒曉出行、笑隱早起、扶掖令坐輿中而拜別也。或者乃持韻府云、扶輿猗靡、相如賦注云、佳氣貌、又韓文送廖道士序、中州淑氣、蜿蟺扶輿、豈不取焉哉。予不答。

とあり、本書を用いて司馬相如「子虚賦」と韓愈「送廖道士序」を参照し、笑隱大訢の詩句[30]を読み解く者があったことを載せ、この記事は排列から見て貞治（一三六二―八）初年頃の事実を伝えているから、南北朝の中頃には本書の参考が広がっていたことを窺わせる。この時にはまだ中国にも元元統二年（一三三

四）刊原本と元至正十六年（一三五六）刊新増説文本の二種しか行われていないから、当初は将来の元版を以て行われたに相違なく、入元僧、来朝僧の蔵本が受容の対象であったかと思われる。今一つ、本邦では始めから字句の引証に本書が用いられ、習学のための工具書として迎えられた様を顕している点で、その後の受容を理解する上からも象徴的な記事と言える。尤も例証に対し答えることを拒んだ中巌は、後日再び来室し例証を重ねた或者に対し、『漢書』注を参考として反駁した後、独自の文字観を記し、世人のみだりに文字を詮索することを難じて「今以猗靡爲疊字是也、扶輿亦爲疊字非矣。扶持乗輿之義不据焉、而引韓文蜿蟺扶輿爲證、吾莫奈之何而已」と批判しているから、本書の濫用についても一家言を含んでいたに違いない。年紀の確かな例を挙げると、やや後輩の義堂周信が応安二年（一三六九）に「韻府注」を検したことが『空華日用工夫略集』の追抄に見え、ここでも熟字を解するために例証を検出する目的で本書が繙かれているから、やはり前例と同様の受容かと理解される。以後禅僧の日乗や抄物中にはしばしばそうした例を得ることができ、概して日本では漢語を読むために本書の用いられた傾きが強く、事態は中巌の危惧する方向に流れていった。

上記「雑談」の例は元版の流通を示す記事と見られるが、日本に於ける本書の受容に大きな進捗を齎した版本は、南北朝に行われた原編の覆刊本で、同版は貞治六年（一三六七）に来朝した刻工集団の手に成り、応安三年（一三七〇）から永徳二年（一三八二）の間、同名の刻工が他版に名を顕しているから、本書の開刻もこの時期に為されたと思われる。この版本は複数の元版を校合した点に特色があり、その一方は新刻の至正二十八年（一三六八）刊本と推定されるから、[31] 五山に於ける敏捷濃密な元版の流通とそれに伴う需要の勃興が、新刻の条件を成したと言える。以後室町期を通じ、元明の建刊本と本邦南北朝刊本の潤沢な流通を基礎として本書の受容が広がっていき、主に五山禅僧の検閲に便宜を齎した。また書入に見る限り本書自体の一通りの解読が習慣化した模様であり、読解例証に本書を用いた上、漢語の表現を蓄積して随時取り出すための準備が図られた。室町の後半に向かって事態はさらに進み、本文解読の方面では惟高妙安が本書を本文とする抄物『玉塵』を成し、[32] またその機能を強化する目的からは、行間、欄外や貼紙、夾紙の上に夥しい補注を施した伝本が増加し、これは本書を包含する形での新たな禅林類書編集へと向かったと思われ、その直前の飽

和状態を示す特異の伝本も認められる。[33] こうした事態は、友社の雅交や一山の禅儀に加え、能文の書記として公私の文事に参与し職掌を広げていった五山僧の活動と関係があろうけれども、本書や他の工具書に極端に依存し、字句の彫啄に腐心する傾向が広がって形骸化に陥り、近世の到来と共に、宋代の古風を標榜する林下の禅門や新興の儒者に高下の信服が移された時、新たに学問を振い興こすだけの実態は失われていた。

日本ではその需要の広がりに反して、自ら刊行した版本は長く南北朝刊本一種のみであったが、その背景には一定量の元明版将来の事実があった。これは来朝僧や入元、入明僧を中心に、受容者や同門の者が海峡を往来し、自ら手に入れる行き方であったから、五山派の中では比較的潤沢な状態が保たれていたのである。本書の版本が劣化して明代の中頃までに不振の状態を引起こすと、その供給も乏しくなったので、本邦に於いては明中期よりも元末明初の版本に蓄積が厚かったが、そうした閉塞は万暦の王元貞校刊本によって打破され、わが国の近世初以降に流入した。近世になって五山の文事が形骸化すると本書の需要も衰勢に転ずるが、林下の禅僧や儒者文人も、当初、学問の素地に於いては五山に倣っていたから、暫くは本書を繙く習慣も残存し、江戸前期に至るまでの間、なお相当の受容が認められる。また文禄慶長の役（壬辰倭乱）を経て多数の朝鮮本が将来されると、幾つかの書目は、同時に学んだ活字印刷の技術を以て複製されるが、本書増続会通本もその中に含まれ、寛永二年（一六二五）に田中長左衛門が朝鮮乙亥字再刊本を翻印した。これ以降わが国では、在来の元明建刊本とその覆刻の旧刊本、明末江南刊行の新校本、朝鮮朝に由来する広編本の三種が重層して行われる。ただ明末刊本の供給は日中交易の一環として為され、前代とは比較にならない規模で行われたし、古活字本の刊行は出版書肆の勃興する過程に於いて為されたのに対し、その需要に於いては総じて退潮にあったから、些か供給過剰の気味を帯び、受容の実態が疎略に遷ったことも伝本に顕れている。従って延宝三年（一六七五）に整版附訓本が開刻され、明版に淵源する朝鮮朝由来の本文に、わが国南北朝以来の本書解読の経験が結び着き、近世社会に本格的な普及を図る用意が調った時、実際に求められ広く伝播する情況は既に失われていたのである。ただ表層に於いてはそうであっても、諸伝本の分厚い堆積が、近代に及ぶまで一定の影響を保ったこともまた伝本に明らかである。これは何もわが国に限ったことではないが、本書

が広義の学術に与えた影響は底堅い基盤的なものであって、版本を作り出す側と手に取る側と、時々に双方の意志を映しながら展開し、学術の偏流を規定する力となって働いたのである（了）。

注

（1）本稿も柳田征司氏「『玉塵』の原典『韻府群玉』について」（山田忠雄氏編『國語史學の爲に』昭和六十一年五月・笠間書院、『室町時代語資料としての抄物の研究』（平成十年・武蔵野書院）に追補再録）に負うところが非常に大きい。

（2）『万姓統譜』巻三十一、『栝彙蒼紀』巻十二、『尚友録』巻七、『両浙名賢録』巻二、康熙『青田県志』巻十、雍正『処州府志』人物志、雍正『敕修浙江通志』巻百七十七等に伝記を載せる。

（3）南京図書館に「資治通鑑綱目事類一百二十一巻／存四七巻／明刻本」を存する由、未見、淮府刊本であるかどうかも不明。

（4）『千頃堂書目』に「周易衍義」「春秋講義」「通鑑綱目事類一百二十一巻」「讀備忘一百卷」の四書を包瑜の著作として挙げる。しかし、『経義考』に「周易衍義」と「春秋左傳（マヽ）」四十巻を録するが、いずれも佚書とされている。

（5）康王の次の淮王とすると、弘治十八年（一五〇五）に襲封した定王朱祐棨の時ということになるが、これは包瑜八十六歳以降の七年間に当たる。康王に好文の事績があり（『文翰類選大成』の編刊を督する等）、定王に横暴の事績を伝える（『明史』諸王伝）こと、包の歿年はわからないが、相当の高齢にあることを勘案すると、康王の聘であったように思われる。

（6）この日新書堂刊二十八巻略本と四十巻広略本について、注（1）柳田氏論文追補11に、後掲の三十二巻本を加えた三種の関係が詳しく述べられている。ただ柳田氏は、四十巻広本には触れず四十巻広略本を安正書堂の版刻とされ、また日新書堂刊二十八巻略本と四十巻広略本を別版と見ておられるが、本稿では二十八巻略本と四十巻広略本の第二十巻以前を同版と見て、前者の方が比較的早印であるという認定から、日新書堂刊二十八巻略本及びその増修四十巻広略本と考えた。

（7）同じ孫星衍の『廉石居蔵書記』巻上、類書の項にも簡略な著録が見える。

（8）本版の韻目が錯雑たるものであること、これが元来不足のある二十八巻本に拠ったためであることについては、既に注（1）柳田氏論文追補11に指摘がある。

(9) 晁瑮『晁氏宝文堂書目』類書に「韻府續編〈十本〉」と、明李廷相『濮楊蒲汀李先生家蔵目録』中間朝西、三櫃二層に「韻府續編〈二十本〉」、中間朝東、二櫃三層に「韻府續編〈十五本〉」と、趙用賢『趙丁宇書目』沈浜荘に「續韻府〈十五本〉」と、明徐炒撰『徐氏家蔵書目』子部韻類に「續韻府羣玉四十卷」とある等。

(10) 本属本文は活字によって印出したものであるが、その行為につき、本文組成と印出の意を以て「刊」「刊行」等と表記することを諒とされたい。このことは旧時の慣例であるとともに、「印」「印行」と記した際に、既存の版木を重印するのみである場合と、新たに本文を構成し、かつ複製印出する活字本の場合との相違を明確にし難く、文字を借りて「刊」と記した方が実態に近いと判断するからである。

(11) この記事を原本『韻府群玉』の版刻に関わるものとする説がある（金斗鍾氏『韓国古印刷技術史』〈一九七四、探求堂〉官板書目、沈暎俊氏『日本訪書志』〈一九八八、韓国精神文化研究院〉）。それらの説は『中宗実録』の記事によって、私に言う〔朝鮮前期〕刊本を、中宗三十五年（一五四〇）の刊刻と見なしている。確かにそのように解すると、記事中「刊出」とあることに整合する。しかし私見によると、件の版本は、伝本の紙背文書や識語から十六世紀末年の刊行と推定されるから（詳しくは住吉「『韻府群玉』版本考（三）」〈「斯道文庫論集」第三十七輯、平成十五年二月〉を参照されたい）、これは必ずしも当たらないように思われる。また『実録』の記事が原本の版刻を指すのだとすると「合新增」と称している点が腑に落ちないし、「以大字刊出」と言うのは活字を以て印刷する意に解すべきで、中宗の答に「印出」とあるのは、そのことの反映なのではなかろうか。乙亥字には大中小の三つの活字があり、件の『增続会通韻府群玉』に用いられたのは中字と小字であって、その点に不審を抱かれる向きもあろうが、これは他種の活字に比較した表現で、大字と言って乙亥字を指したかと思われる。実際、『韻府群玉』と同時に印出されたと考えるべき『雅音会編』について、甲辰字刊本の伝存が確認され（知見韓国国立中央図書館蔵本〈貴五四九〉、なお『実録』中「七律五律以韻類聚」の語は、唐詩を韻目下に排列した内容の『雅音会編』に係る）、この甲辰字は成宗十五年（一四八四）に、従来の活字が大きすぎる点を補うために鑄造された活字であるから（千恵鳳氏『韓国古印刷史〈日本語版〉』〈一九七八、韓国図書館学研究会〉参照）、これに比べて乙亥字は「大字」と称するに相応しかったのではなかろうか。記して後考を俟ちたい。

(12) 権文海の『大東韻府群玉』については、沈慶昊氏「『大東韻府群玉』의구조」(『국문학연구와문헌학』〈二〇〇二年、太学社〉)に詳しい。

(13) 乙亥字再刊の語について、注(10)に述べたように、本稿では刊の字を、本文組成の意を以て、整版本に於ける開版の如くに用いており、この場合も、乙亥字再刊は活字の再鑄を意味しない。初鑄の乙亥字によって再度印行したという意である。

(14) 『文苑英華』巻六百等に収める駱賓王「爲齊州父老請陪封禪表」に「儻允微誠、許陪大禮、則夢瓊餘息翫仙闕以相驩、就木殘魂遊岱宗而載躍」の句があり、『白氏六帖』巻十九・死門に「魂遊岱宗〈遊岱之魂〉」とある。

(15) 『後漢書』方術傳の叙には「張衡爲陰陽之宗、郎顗処徴最密」とあって、『韻府続編』では一格を以て四字を代号したのである。

(16) 建仁寺両足院蔵本について、注(1)柳田氏論文追補16に著録がある。ただ該本を明版と、また尾一冊欠とされている点については稿者と見解を異にする。

(17) 『祥刑要覧』の寛永四年松岡作左衛門刊本、『本朝文粋』の正保五年跋刊本を念頭に置いている。

(18) 名和修氏の指教に拠る。

(19) 該本は『天理図書館稀書目録 和漢書之部 第四』によると、書帙貼紙に岡田真の朱筆にて昭和十六年に購得、同十七、十九年に第二十五、三十一巻を別途購入した意の識語を存するという(未見)。昭和三十年の東京古典会主催、弘文荘受託出品『岡田文庫入札目録』二九七番に「増續韻府〈慶長中古活字本〉三十七冊」とあるのはこれに当たるものか。

(20) 該本は学習院大学の有に帰した由(未見)、注(1)柳田氏論文補注16参照。

(21) 同様の大事業として、三史諸本や那波本『白氏文集』の刊行等も想起されるが、古典としての認知の広さ、本邦に於ける受容の歴史を考えると、成されるべくして成ったとも言え、韻書と類書を相兼ね、工具書として用いられてきた本書の場合、一層広範な利用を目途としていた可能性がある。

(22) 国書では元禄、正徳の頃まで活動の跡があるようである。矢島玄亮氏『徳川時代出版者出版物収覧 続編』(昭和五十一年、万葉堂書店)、井上隆明氏『改訂増補近世書林板元総覧』(平成十年、青裳堂書店)参照。

(23) この版本は従来慶安五年刊本として知られているものであるが、無刊記本の先行する由。芳村弘道氏「和刻本の『文選』について—

版本から見た江戸・明治期の『文選』受容―」（『学林』第三十四号、平成十四年一月）に拠る。

(24) 該本の第三十八冊については未見、刊記部分の書影を拝するのみであるが、田淵正雄氏に指教を得た。

(25) 斯道文庫収蔵の『続日本後紀』に移録された梜斎の補注書入に本書の引用が見られる等。梜斎は自ら編集した『活字板書目』に本書を著録としているから、具体的には寛永二年刊古活字本に拠っているかも知れない。

(26) 文淵閣本『総目』に拠る。同「書前提要」は「妾」作「婦」、「改本」作「書」。

(27) 高橋智氏の指教に拠る。

(28) 磯部彰氏編『東北大学所蔵豊後佐伯藩『以呂波分書目』の研究』（二〇〇三年、東北大学東北アジア研究センター）に拠る。

(29) 「大輅之椎輪」は「文選序」に「椎輪爲大輅之始、大輅寧有椎輪之質。增冰爲積水所成、積水曾微增冰之凛、何哉。蓋踵其事而增華、變其本而加厲。物既有之、文亦宜然。隨時變改、難可詳悉」と、五臣注に「向曰、椎輪、古棧車。大輅、玉輅。寧、安。質、樸。增、厚。積、深。曾、則。微、無。凛、冷也。言玉輅因椎輪生、增冰由積水成。然玉輅無質、積水無寒、何哉。言何故如斯哉。蓋自設疑問、以發後詞」と見え、「將有其末、必擧其本」とは、『春秋穀梁伝』荘公十七年に「春、齊人執鄭詹。（傳）人者衆辭也。以人執與之辭也。鄭詹、鄭之卑者。卑者不志、此其志何也。以其逃來志之也。逃來則何志焉。將有其末、不得不録其本也。鄭詹、鄭佞人也」とある。同年に「秋、鄭詹自齊逃來」の記事あり。『提要』の解義については、「四庫提要読書会」に於いて稿者が担当し、席上、近藤光男先生を始め、会合の諸氏に指教を得た。

(30) 『蒲室集』巻四に収め「佛智師歸仰山」と題する五絶「早發扶輿拜、鐙明愛白頭、故郷元自好、游子獨淹留、壯業眞何用、孤懐未忍休、始終存衆望、不敢畏離憂」の首句。『韻府群玉』には巻二・上平声六魚韻「扶輿」に「―― 猗靡「相如付」、佳氣貌。○中州清淑之氣、蜿蟺――「韓送廖道士」」とある（新増説文本同）。

(31) 東山秀岩書堂刊本を指す。この版の牌記には干支のみを記すから、同年の明洪武元年刊本と著録する場合がある。いずれにしても一三六八年が、同版を用いた南北朝刊本開版の上限ということになる。

(32) 『玉塵』については注（1）柳田氏論文を参照されたい。

(33) お茶の水図書館成簀堂文庫蔵仙台東昌寺旧蔵元元統二年刊四修原本等。四稿238頁参照。

〔附記〕

本稿は平成十六年度文部科学省科学研究費補助金による特定領域研究「東アジア出版文化の研究」計画研究「和漢の辞書・類書の書誌的研究」に基づく成果の一部である。

本稿の第二章は、平成十六年十一月二十日に韓国・震檀学会創立七十周年紀年国際研究集会「東北アジア諸地域間の文物交流」の一環として行った住吉の研究発表「『韻府群玉』の版本について ―東アジアにおける文物交流の一例―」を基にしている。韓国精神文化研究院の安美璟氏を始め、当日貴重なご意見を下さった列席の皆様に御礼申し上げる。

図版

類聚古今韻府續編卷之一

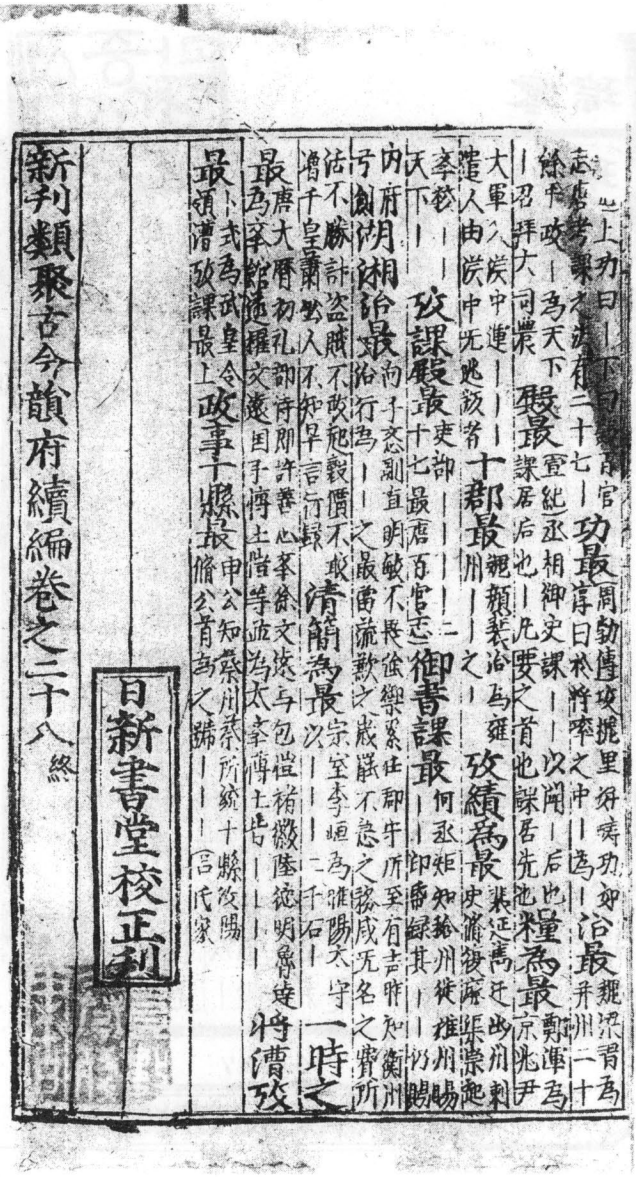
後學青田包瑜編輯

一東

東冬○通○同童僮瞳銅桐筒簡○龍龍龔聾朧籠○
隆窿○蓬逢○蒙蒙幪○恩囱葱聰揔○宗騌綜鬃○樅
踪○叢○從○淇紅鴻虹○烘○空○公功工攻○翁○風枫豐
蠭蠭羊蜂烽峯蜂蜂蠭封○馮逢縫○祕蔡菜尚○弘○充冲衝○
中表忠終蟲鍾鐘○我茸○崇○蟲重○融容蓉庸墉鎔鄘傭○
顒隅○弓躬宮恭共供龔○穹○窮躬○農儂濃醲禮○春○胷
匈凶兇訟○訟雍
雍饔離○雄熊

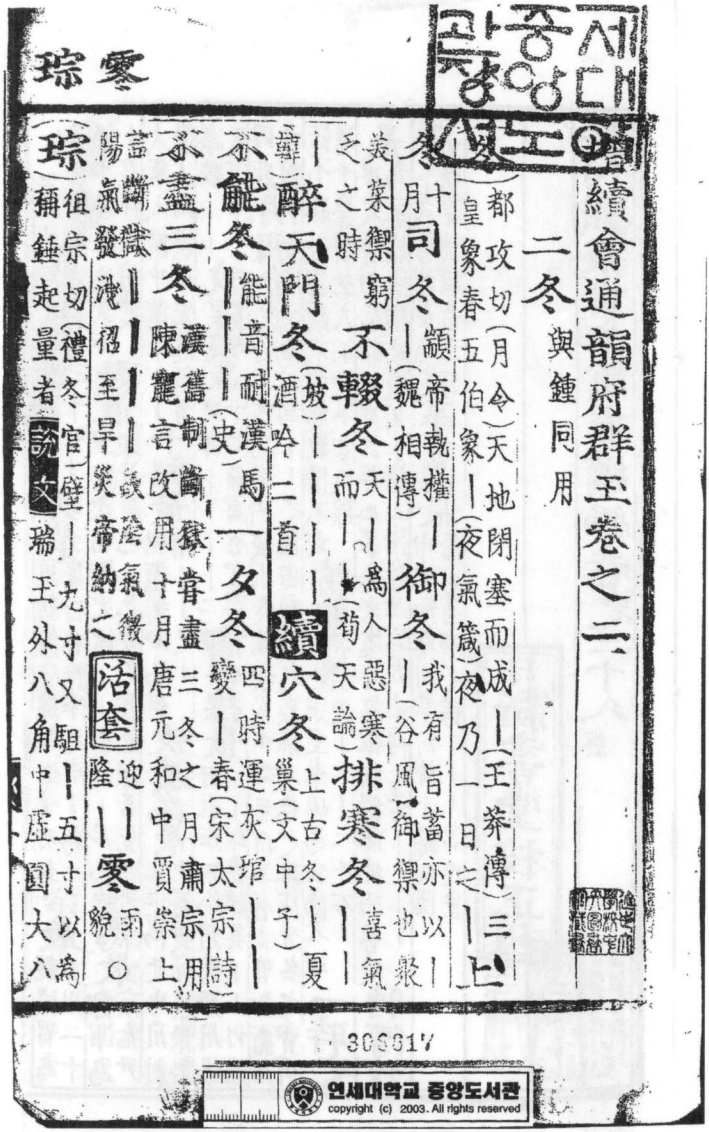
東德紅切春方也動也陽氣動於將為春 賦河東揚雄更有河東惟
待次蹇迹上天 水折東夫其方
宛在東 園所以必方者謂養明月見東晉安義熙九年十二日
方物東方物所生也 賈誼 猶方見謂之
又匿則侯王其肅是時刘裕輔政刑自已出又
匿之應又匿者行遲在日後不進之象 賈忠貞 賈不省東毛玄為東曹掾与
不行時人憚之時設所并省咸欲省東省太祖知其禮樂皆東 郗玄拿於馬
精今日日生於東月盛於東何以省東曹之宜 賈忠貞 禮樂皆東 郗玄拿於馬
馬曰 馬首欲東諸侯之大夫從晉侯伐秦濟涇而次秦人毒涇上流
師人多死郤司馬子喬帥師次於王城皆從 至于

類聚古今韻府續編〔明〕刊　28巻略本　巻首
東京大学東洋文化研究所蔵



同　巻尾

図版三



零琮

續會通韻府群玉卷之二

二冬 與鍾同用

冬 都攻切（月令）天地閉塞而成｜（王莽傳）三｜上皇象春五伯象｜（夜氣箴）夜乃一日之｜十月司冬｜（魏相傳）御冬 我有旨蓄亦以｜（谷風）御禦也聚菱菜禦窮之時 不輟冬 天｜爲人惡寒而｜｜（荀天論）排寒冬 喜氣｜｜醉天門冬（坡）｜｜｜｜酒吟二首 續穴冬 上古冬｜夏巢（文中子）

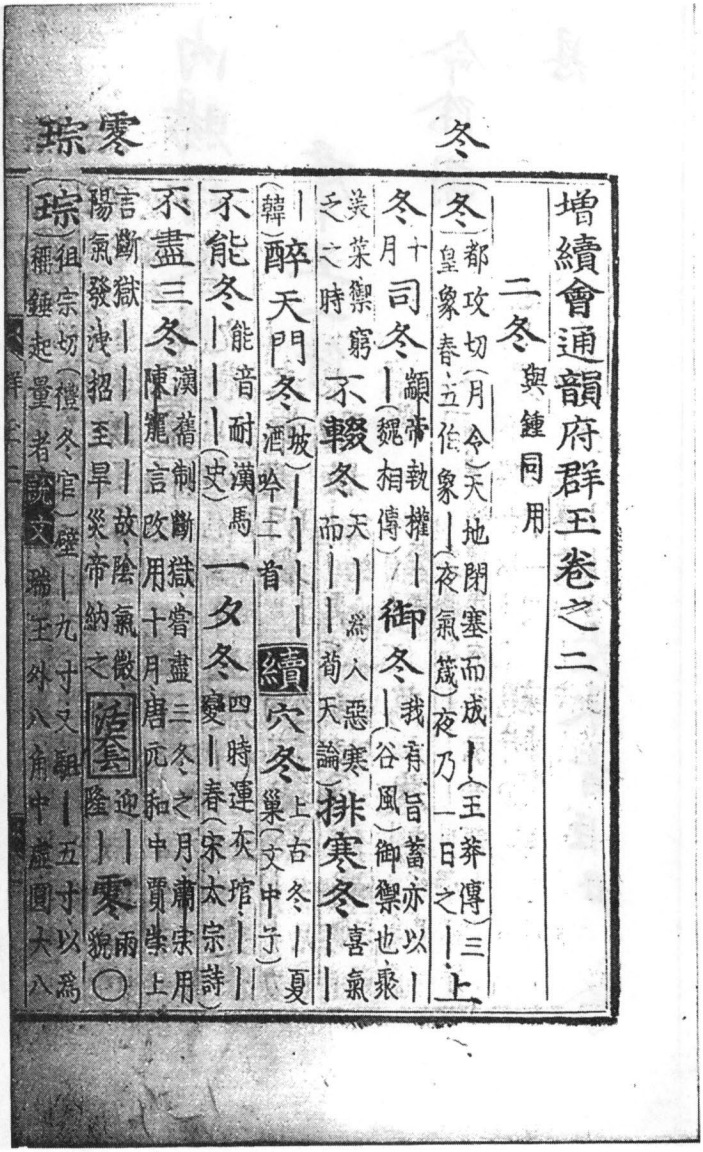
不能冬 能音耐漢馬｜（史）｜ 一夕冬 四時運灰琯｜｜變｜春（宋太宗詩）

不盡三冬 漢舊制斷獄嘗盡三冬之月肅宗用陳寵言改用十月唐元和中賈崇上言斷獄｜｜｜｜｜氣陰氣微陽氣發澤招至旱災帝納之 活套 迎｜隆｜零雨貌○

琮 徂宗切（禮冬官）璧｜九寸又駔｜五寸以爲稱錘起量者 說文 瑞玉外八角中虛圓大八

연세대학교 중앙도서관
copyright (c) 2003. All rights reserved

増続会通韻府群玉　朝鮮乙亥字初刊本　第２巻首
延世大学校中央図書館蔵



冬　　零琮

增續會通韻府群玉卷之二

二冬與鍾同用

冬（冬）都攻切（月令）天地閉塞而成｜（王莽傳）三皇象春五帝象｜（夜氣箴）夜乃一日之｜上

冬十月司冬｜（魏相傳）顓帝執權｜御冬（我有旨蓄亦以｜（谷風）御禦也聚菜禦窮之時）不輟冬（天｜爲人惡寒而｜｜（荀天論）排寒冬｜｜

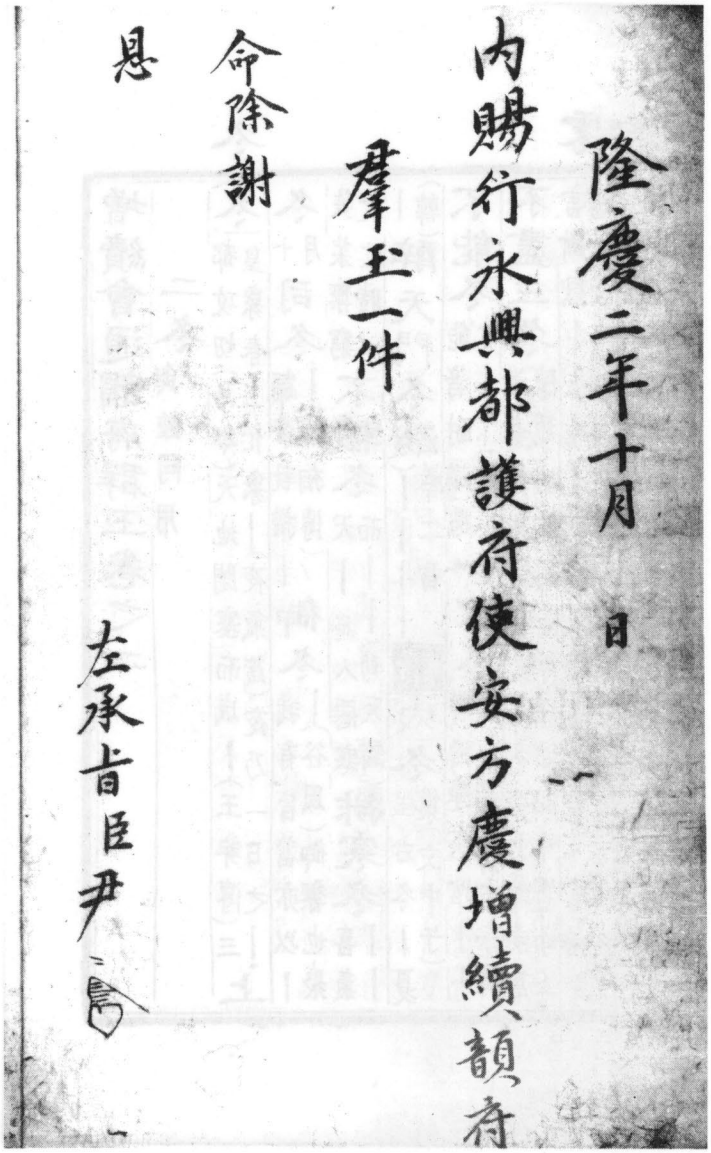
（韓）醉天門冬（坡）｜｜｜｜｜（酒吟二首）續穴冬（上古冬｜夏巢（文中子）

不能冬（能音耐漢馬｜｜｜（史）一夕冬（四時運交瑋｜｜變｜春（宋太宗詩）

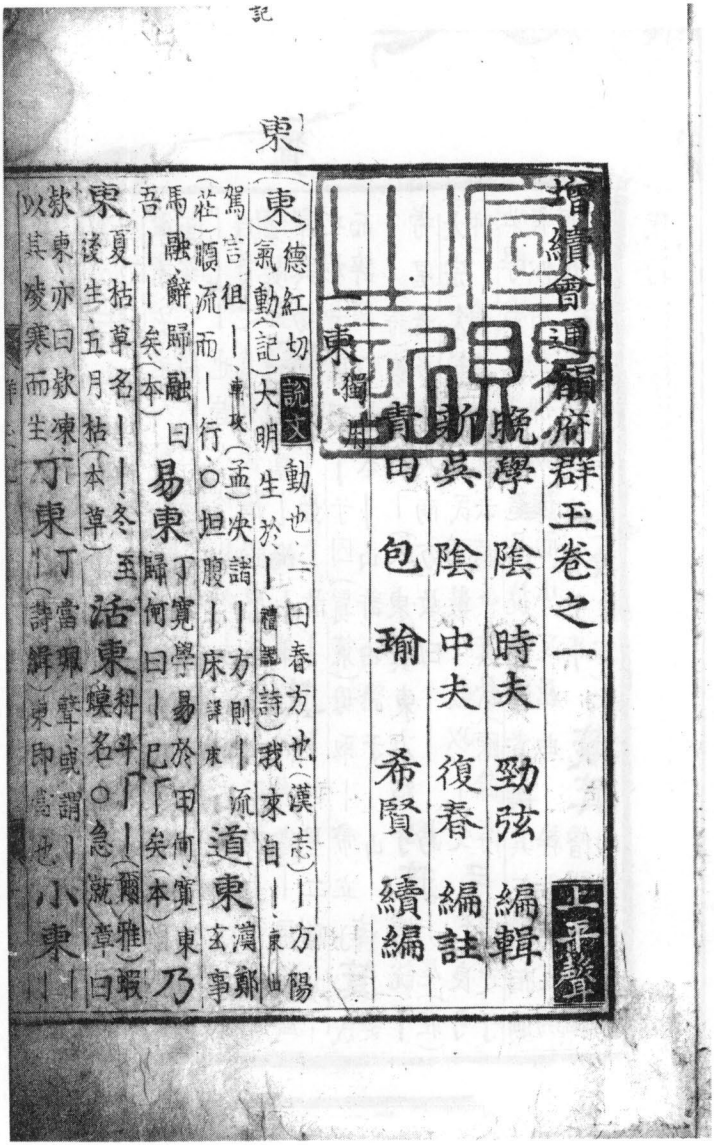
不盡三冬（漢舊制斷獄嘗盡三冬之月蕭宋用陳寵言改用十月唐元和中賈柒上言斷獄｜｜｜｜故陰氣微陽氣發洩招至旱災帝納之）結套（迎｜隆｜）零（雨貌○）

琮（徂宗切（禮冬官）璧｜九寸又瑞｜五寸以爲繅藻起量者說文瑞玉外八角中蓋圓大八

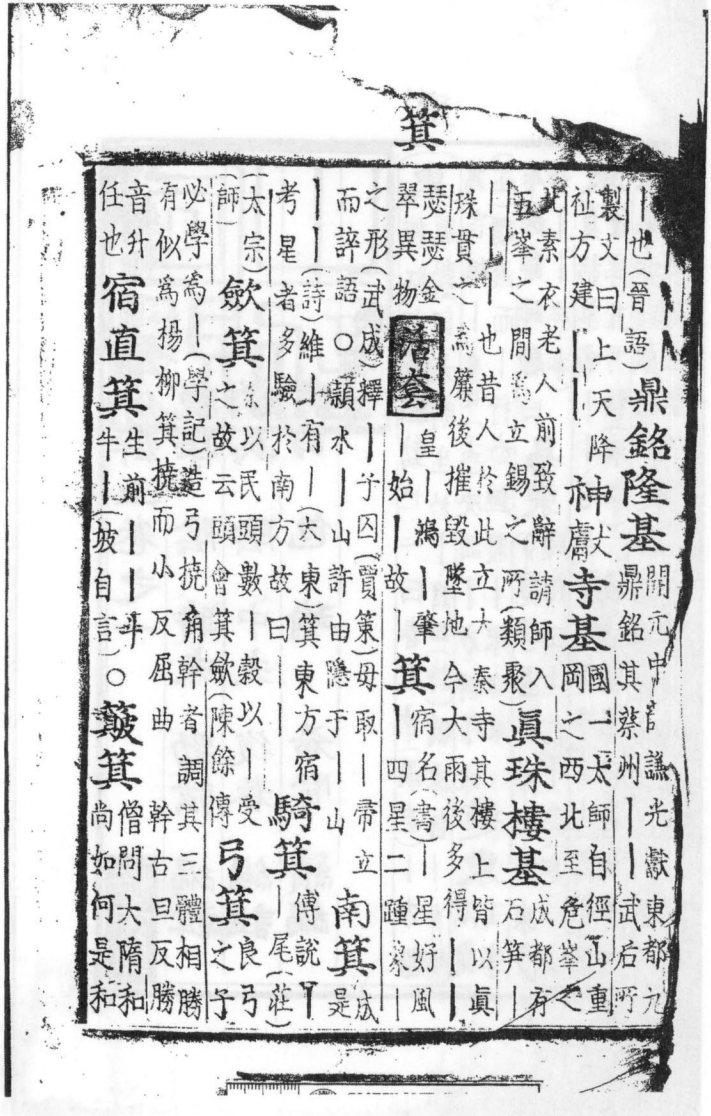
増続会通韻府群玉　朝鮮乙亥字再刊本　第２巻首
建仁寺両足院蔵


隆慶二年十月　日
内賜行永興都護府使安方慶增續韻府
羣玉一件
命除謝
恩
左承旨臣尹

増続会通韻府群玉　朝鮮乙亥字再刊本　内賜記
建仁寺両足院蔵



増続会通韻府群玉　朝鮮乙亥字再刊本　巻首
建仁寺両足院蔵



箕

也(晉語)鼎銘隆基開元中諡光獻東都九鼎銘其蔡州武后所製文曰上天降神虞寺基國一太師自徑山重岡之西北至危峯之石笋成都有玉峯之間爲立錫之所(類聚)眞珠樓基素衣老人前致辭請師入珠貫之爲簾後摧毀墜地今大雨後多得琴琴金翠異物

箕

皇始故四星二踵象

箕宿名(書)星好風之形(武成)釋于囚(賈策)毋取帝立而許語○潁水山許由隱于山(詩)維有(大東)箕東方宿考星者多驗於南方故曰

南箕成是

騎箕傳說尾(莊)(太宗)

斂箕系以民頭數穀以受之故云頭會箕斂(陳餘傳)

弓箕之子(師)必學爲(學記)造弓撓角幹者調其三體相勝有似爲楊柳箕撓而小反屈曲幹古旦反勝音升任也

宿直箕生前牛(坡自言)○

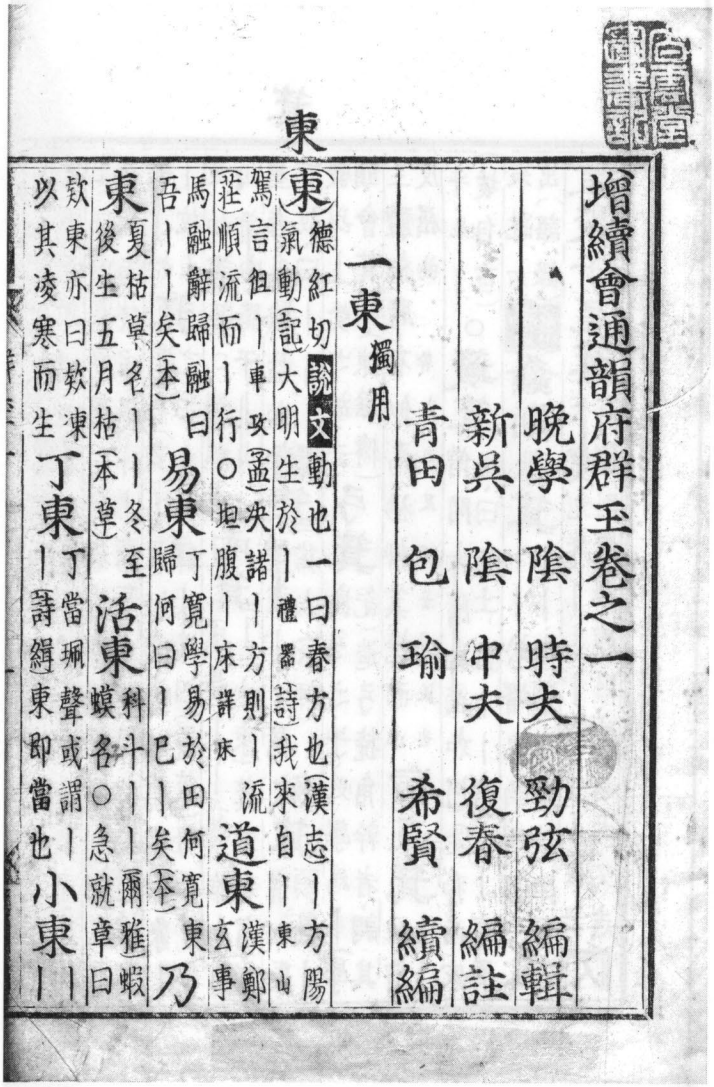
簸箕僧問大隋和尚如何是和

箕

間爲立錫之所(類聚)眞珠樓基成都有石箕丨丨丨丨也昔人於此立大秦寺其樓上皆以眞珠貫之爲簾後摧毀墜地今大雨後多得丨丨瑟瑟金翠異物活套皇丨鴻丨箕宿名(書)丨星好風丨四星二踵象丨丨故丨箕之形(釋丨于因(賈策)毋取丨帝立而許語○潁水丨山南箕成是丨丨(詩)維丨有山許曲隱于丨山(大東)箕東方宿考星者多驗於南方故曰丨丨騎箕(莊太宗師)斂箕(舜以民頭數丨穀以丨受之故云頭會箕斂(陳餘傳)弓箕(良弓之子必學爲丨(學記)造弓橈角幹者調其三體相勝有似爲楊柳箕橈而小反屈曲幹古旦反勝音升任也宿直箕生前斗牛丨丨○(坡自言)○簸箕僧問大隋和尚如何是和尚家風曰赤土盡丨丨謂丨丨有脣米跳不出(語錄)續蠡斯春箕丨丨丨蚣蝑也幽州謂之蝗類也(李詩注)五星聚于尾箕天寶九年丨丨于丨丨占云有德則慶無德則殃(唐天文志)人

増続会通韻府群玉　朝鮮乙亥字再刊本　第3巻
建仁寺両足院蔵

図版九



東

增續會通韻府群玉卷之一

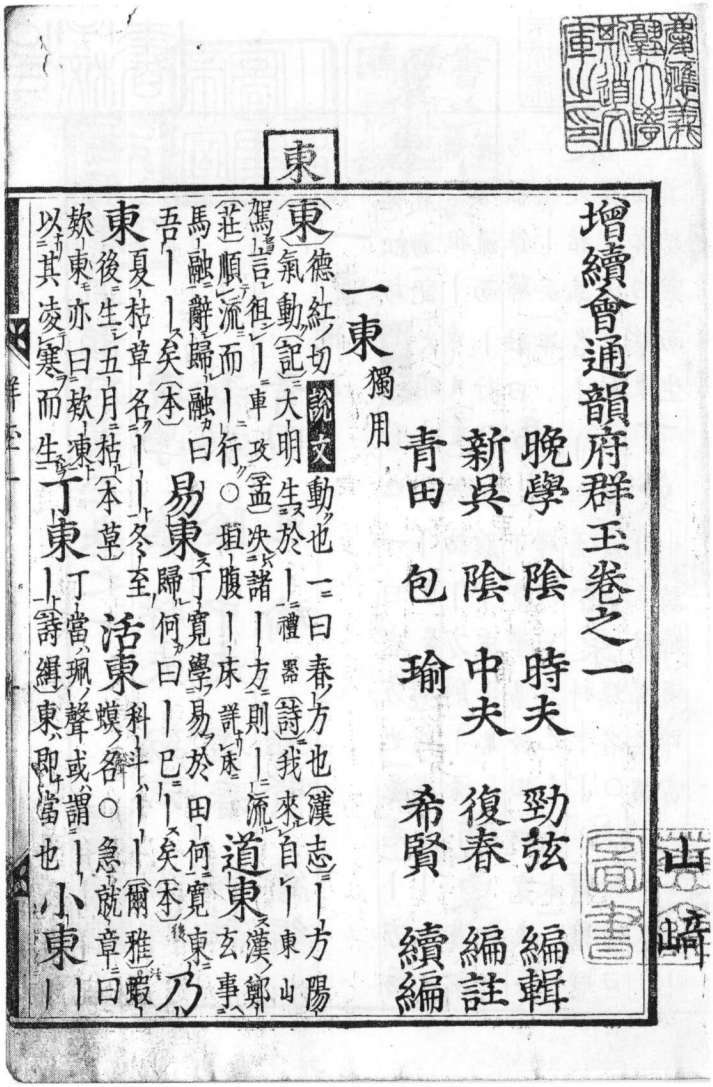
晚學 陰 時夫 勁弦 編輯
新吳 陰 中夫 復春 編註
青田 包 瑜 希賢 續編

一東 獨用

東 德紅切 說文 動也一曰春方也 漢志 一方陽氣動 記 大明生於一 禮器 詩 我來自一 東山 駕言徂一 車攻 孟 決諸一方則一流 莊 順流而一行○坦腹一床 群床 道東 漢鄭玄事馬融辭歸融曰吾一一矣 本 易東 丁寬學易於田何寬東歸何曰一已一矣 本 乃東 夏枯草名一一冬至後生五月枯 本草 活東 科斗一一爾雅蝦蟆名○急就章曰欵東亦曰欵凍以其凌寒而生 丁東 丁當珊聲或謂一一 詩 緝東即當也 小東一

増続会通韻府群玉　日本寛永２年古活字刊本　巻首
家　蔵

図版十



東

增續會通韻府群玉卷之一

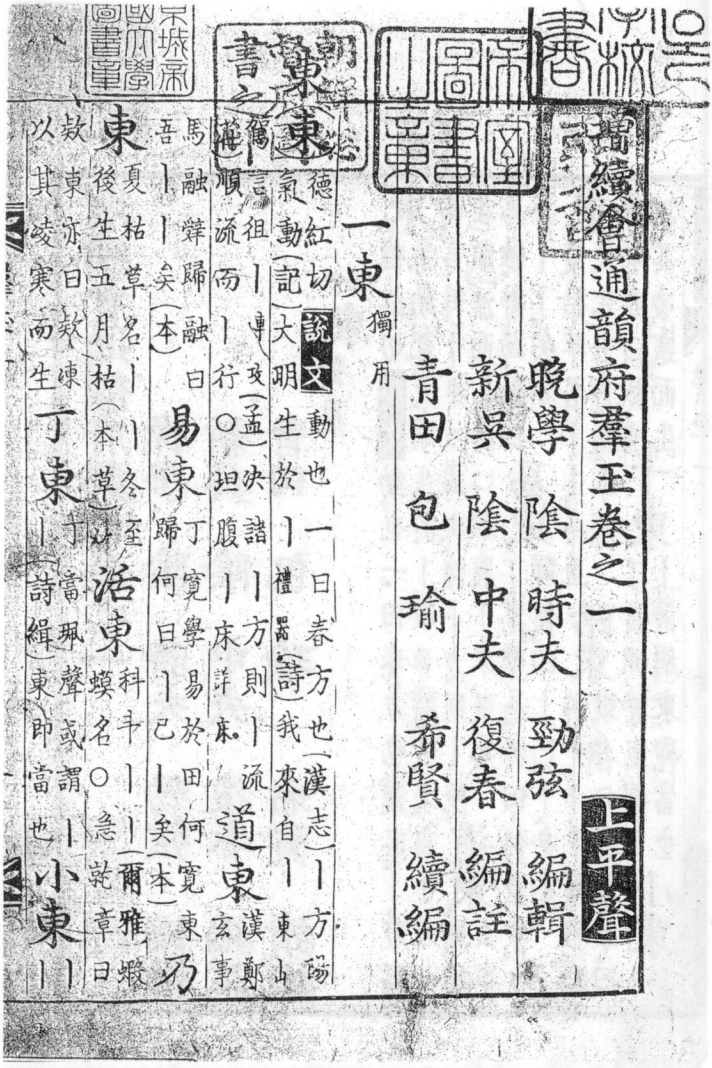
晚學 陰 時夫 勁弦 編輯
新吳 陰 中夫 復春 編註
青田 包 瑜 希賢 續編

一東 獨用

東 德紅切 說文 動也 一曰春方也 漢志 一方陽氣動 記 大明生於 禮器 詩 我來自 東山 駕言 徂 車攻 孟 決諸 方則 流 莊 順流而 行 ○ 疽腹 床 詩 床 道東 漢 鄭玄事 馬融 辭歸 融曰 吾 矣 本 易東 丁寬學易於田何寬東 歸何曰 已 矣 本 乃東 夏枯草名 冬至 活東 科斗 爾雅 郭璞 各 ○ 急就章 曰 欵東 亦曰欵凍 以其凌寒而生 丁東 丁當 珮聲或謂 詩 緝東 即當也 小東

増続会通韻府群玉　日本延宝３年刊本　巻首
斯道文庫蔵

図版十一



增續會通韻府羣玉卷之一　上平聲

晚學　陰　時夫　勁弦　編輯

新吳　陰　中夫　復春　編註

青田　包　瑜　希賢　續編

一東　獨用

東　德紅切　說文　動也一日春方也（漢志）丨方陽氣動（記）大明生於丨（禮器）（詩）我來自丨東山言徂丨東（孟）決諸丨方則丨流（書之舊）順流而丨行○坦腹丨床（詳床）道東　玄漢鄭玄事馬融韓歸融曰吾丨丨矣（本）易東　丁寬學易於田何寬東歸何曰丨己丨矣（本）功東　後生五月枯（本草）艾活東　科斗丨丨（爾雅）蝦蟆名○急就章曰敖東京曰敖陳聲或謂丨以其淩寒而生丁東　丁當珮聲（詩緝）東即當也小東丨

増続会通韻府群玉　朝鮮明崇禎再丁酉戊申字刊本　巻首
ソウル大学校奎章閣蔵